



北海道大学大学院 消化器外科学分野 I ～教室年報：2016年～

Department of Gastroenterological Surgery I
Hokkaido University Graduate School of Medicine
Annual Report 2016





北海道大学大学院
消化器外科学分野 I
教授 武富 紹信

巻頭言

今年も教室年報を発刊する時期がやって参りました。今回で4冊目の発刊となり、紙面も徐々に充実してきたのではないかと自負しております。教室年報発刊の目的は、教室外の先生方に、我々北海道大学消化器外科 I の活動を知っていただくことはもちろんですが、教室員にも1年間の教室の活動を振り返りながら、次の目標を立てるよいきっかけとなればと思い発刊しています。

さて、来年度の第117回日本外科学会総会学術集会の特別企画「今こそ地域医療を考える―都市と地方の外科医療と外科教育の格差を解消するには―」で講演する機会を与えていただき、現在発表準備をしております。

そもそも北海道に外科医療や外科教育の面で格差はあるのでしょうか？北海道の人口10万人当たりの医療施設従事医師数は211.7人（2016年10月現在、以下同様）であり、全国平均245.9人と大きな開きはありませんが、大学病院が存在する札幌圏241.7人、上川中部圏（旭川）295.5人のように都市部に医師は集中しており地域偏在が著しいのが現実です。特に根室圏100.5人、宗谷圏117.0人など人口10万人当たりの医師数が全国平均の50%に満たない地方も多く、中標津町立病院や稚内市立病院など、これらの診療圏に属する施設で当教室ご出身の先輩が長年にわたり地域医療を担っておられます。さて、これらの施設で外科医療に格差があるのかという問いに対する答えはNOです。この年報の関連施設紹介欄にも掲載しておりますが、少ない人数で多くの手術症例をこなし、しかもその治療成績は全国レベルと同等かそれ以上であり、地方にいても都市部と遜色のない外科治療を享受することができます。これは、多くの先輩方が知識や技術の習得にたゆまぬ努力をされてこられた賜物にほかなりません。さらに、当教室ではこれらの施設での若手外科医の研修を奨励しており、必然的に関連施設指導医には最新の医療知識、医療技術やきめ細かな指導が要求されます。若手外科医師への教育機会を通じ外科医療の質の向上が図られるという、実に巧妙なシステムが数十年前から機能しているのではないかと思います。都市部と地方の多数の病院が緊密に連携し外科教育を体系的に実践していくシステムがあれば地方での充実した外科教育は実践可能であり、それと同時に地方における外科医療の発展にも寄与します。この長年にわたって作りあげられてきた素晴らしい外科教育・外科医療の伝統を、是非守り続けたいと考えております。

今回2016年教室年報を編纂するにあたりご協力いただいた教室員および同門の諸先輩方に、ここにあらためて御礼申し上げます。特に、編集委員長として多くの時間を費やし頑張ってくれた宮城久之君、市川伸樹君、担当秘書の小原さん、正木さんに心より感謝申し上げます。

“志”ある外科医が集まり、厳しいながらもさわやかな風の吹く外科教室を目指してこれからも努力してまいります。

(2017年3月14日)



contents

目次

巻頭言

目次

3 2016年教室紹介

- 4 2016年度 教職員役職一覧
- 7 2016年度 教室体制
- 8 2016年年間業績一覧
消化器外科 I・週間予定表
2016年ジャーナルクラブ
2016年M&Mカンファレンス

〈診療部門〉

- 10 肝胆膵グループ
- 14 移植グループ
- 18 消化管グループ
- 21 小児グループ

〈研究部門〉

- 24 リサーチ統括部長より
- 26 研究グループ紹介
 - 26 移植グループ
 - 27 保存グループ
 - 29 腫瘍(肝胆膵)グループ
 - 31 腫瘍(消化管)グループ
 - 32 小児グループ

〈留学生〉

- 34 国内留学
- 40 海外留学

- 48 〈Senior Fellow〉
- 50 〈2016年入局後期研修医〉
- 53 〈秘書・クラーク・実験助手〉

55 業績紹介(学会・論文・学位取得者・研究費一覧)

71 2016年の年表・年間行事

- 105 〈学会・研究会主催〉

113 関連病院紹介

- 136 編集後記

2016年教室紹介

2016年教室紹介 / 組織構成・教室メンバー一覧表

2016年度 教職員役職一覧

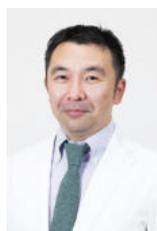
Faculty

大学教員

 <p>Taketomi Akinobu 医学研究科/ 消化器外科学分野 I 教授 武富 紹信</p>	 <p>Kamiyama Toshiya 医学研究科/ 消化器外科学分野 I 准教授 神山 俊哉</p>	 <p>Shimamura Tsuyoshi 病院/ 臓器移植医療部 准教授 嶋村 剛</p>	 <p>Takahashi Norihiko 病院/手術部 准教授 高橋 典彦</p>
 <p>Kamachi Hirofumi 病院/ 消化器外科 I 講師 蒲池 浩文</p>	 <p>Kawamura Hideki 医学研究科/ 消化器外科学分野 I 特任講師 川村 秀樹</p>	 <p>Yokoo Hideki 病院/消化器外科 I 助教 横尾 英樹</p>	 <p>Yamashita Kenichiro 医学研究科/ 移植外科学講座 特任教授 山下健一郎</p>
 <p>Fukai Moto 医学研究科/ 移植外科学講座 特任助教 深井 原</p>	 <p>Homma Shigenori 病院/消化器外科 I 助教 本間 重紀</p>	 <p>Honda Shohei 病院/消化器外科 I 助教 本多 昌平</p>	 <p>Orimo Tatsuya 医学研究科/ 医学教育推進センター 教育支援部 教育助教 折茂 達也</p>
 <p>Goto Ryoichi 病院/消化器外科 I 特任助教 後藤 了一</p>	 <p>Wakayama Kenji 医学研究科/ 消化器外科 I 特任助教 若山 顕治</p>	 <p>Yoshida Tadashi 病院/消化器外科 I 特任助教 吉田 雅</p>	 <p>Miyagi Hisayuki 医学研究科/ 消化器外科学分野 I 特任助教 宮城 久之</p>

Instructors

インストラクター



**Watanabe
Masaaki**
病院/消化器外科 I
医員
渡辺 正明



**Koshizuka
Yasuyuki**
病院/消化器外科 I
医員
腰塚 靖之



**Einama
Takahiro**
病院/消化器外科 I
医員
永生 高広



**Kawamura
Norio**
病院/消化器外科 I
医員
川村 典生



**Ichikawa
Nobuki**
病院/消化器外科 I
医員
市川 伸樹



**Shimada
Shingo**
病院/消化器外科 I
医員
島田 慎吾



**Minato
Masashi**
病院/消化器外科 I
医員
湊 雅嗣



**Ohno
Yosuke**
病院/消化器外科 I
医員
大野 陽介

Senior Fellow

シニアフェロー



**Sakamoto
Yuzuru**
病院/消化器外科 I
医員
坂本 謙



**Shibata
Kengo**
病院/消化器外科 I
医員
柴田 賢吾



**Shibuya
Kazuaki**
病院/消化器外科 I
医員
渋谷 一陽



**Sugiyama
Ko**
病院/消化器外科 I
医員
杉山 昂



**Wakizaka
Kazuki**
病院/消化器外科 I
医員
脇坂 和貴

Residents

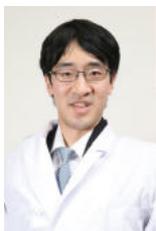
後期研修医



**Sakata
Toshihiro**
病院/消化器外科 I
医員
阪田 敏聖



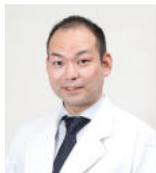
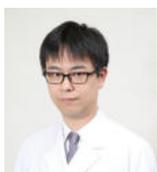
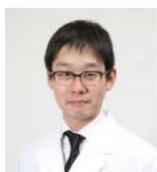
**Tanaka
Yuka**
病院/消化器外科 I
医員
田中 友香



**Nakamoto
Hiroki**
病院/消化器外科 I
医員
中本 裕紀

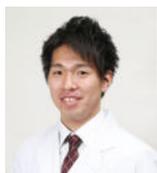
Ph.D.Course Students

大学院博士課程

 <p>Takahashi Hidenori 3年目 高橋 秀徳</p>	 <p>Fukasaku Yasutomo 3年目 深作 慶友</p>	 <p>Ishiguro Yuui 3年目 石黒 友唯</p>	 <p>Matsuzawa Fumihiko 3年目 松澤 文彦</p>
 <p>Umemoto Kohei 2年目 梅本 浩平</p>	 <p>Toyoshima Yujiro 2年目 豊島雄二郎</p>	 <p>Okada Naoki 2年目 岡田 尚樹</p>	 <p>Suzuki Takashi 1年目 鈴木 崇史</p>
 <p>Fujiyoshi Sunao 1年目 藤好 直</p>	 <p>Ganchiku Yoshikazu 1年目 巖築 慶一</p>	 <p>Kii Shuhei 1年目 木井 修平</p>	

Master's Degree Students

大学院修士課程

 <p>Otani Shintaro 2年目 大谷晋太郎</p>	 <p>Hashimoto Satsuki 2年目 橋本 咲月</p>	 <p>Nakayabu Takuya 1年目 中藪 拓哉</p>
--	---	---

2016年度（平成28年度）教室体制

教授	武富紹信		
医局	医局長	副医局長	
	本間重紀	本多昌平（～2016.10.31） 後藤了一（～2016.3.31、11.1～） 折茂達也（2016.4.1～）	

(2016/1/1-2016/12/31)

病棟	病棟医長 蒲池浩文	副病棟医長 本多昌平（～2016.10.31） 下國達志（～2016.3.31） 吉田 雅（2016.4.1～） 後藤了一（2016.11.1～）		
Group	小 児	消化管	肝胆脾	移 植
Chief	本多昌平（～2016.10.31）	川村秀樹	神山俊哉	嶋村 剛 山下健一郎
Sub chief	宮城久之（2016.4.1～）	崎浜秀康（～2016.3.31） 本間重紀 下國達志（～2016.3.31） 吉田 雅（2016.4.1～）	蒲池浩文 横尾英樹 敦賀陽介（～2016.3.31） 折茂達也 若山顕治（2016.4.1～）	後藤了一
Instructor	湊 雅嗣（2016.7.1～）	市川伸樹（2016.4.1～） 大野陽介（2016.4.1～）	永生高広（2016.4.1～） 島田慎吾	渡辺正明（2016.7.1～） 腰塚靖之 川村典生 財津雅昭（～2016.3.31）

Senior Fellow	坂本 讓、柴田賢吾、渋谷一陽、杉山 昂、脇坂和貴
---------------	--------------------------

Junior Fellow	阪田敏聖、田中友香、中本裕紀
---------------	----------------

Super Rotation	(1年目) 小田義崇、南波宏征、高畑明日香 (2年目) 川崎 彩、赤羽慧一郎、
----------------	--

外 来	外来医長	横尾英樹	副外来医長	川村秀樹、後藤了一
	新 来	再 来		
月	○	小 児 外 科 肝 胆 脾	本多昌平、宮城久之、湊 雅嗣 神山俊哉、蒲池浩文、横尾英樹、 敦賀陽介（～2016.3.31）、折茂達也、若山顕治、 永生高広（2016.4.1～）、島田慎吾、	
火	—	外 来 医 長	副外来医長	
水	○	小 児 外 科	本多昌平、宮城久之、湊 雅嗣	
木	—	外 来 医 長 移 植	副外来医長 嶋村 剛、山下健一郎、後藤了一、渡辺正明（2016.7.1～）、 腰塚靖之、川村典生、財津雅昭（～2016.3.31）	
金	○	小 児 外 科 消 化 管 移 植	本多昌平、宮城久之、湊 雅嗣 川村秀樹、崎浜秀康（～2016.3.31）、本間重紀、 下國達志（～2016.3.31）、吉田 雅、市川伸樹（2016.4.1～）、 大野陽介（2016.4.1～） 嶋村 剛、山下健一郎、後藤了一、渡辺正明（2016.7.1～）、 腰塚靖之、川村典生、財津雅昭（～2016.3.31）	

Research	(Chief) 深井 原 (3年目) 石黒友唯、高橋秀徳、深作慶友、松澤文彦 (2年目) 梅本浩平、岡田尚樹、豊島雄二郎、大谷晋太郎（修士）、橋本咲月（修士） (1年目) 木井修平、鈴木崇史、藤好 直、中藪拓哉（修士）
----------	--

2016年年間業績一覧

○手術：507例

2016年総手術件数：

(手術内容詳細については各グループ紹介参照)

- ・消化管G手術：189例
- ・肝胆膵G手術：143例
- ・移植G手術：14例
- ・小児G手術：161例

○学会発表：201

国内：164

海外：37

○論文発表：46

英文原著：28

英文症例報告：5

和文原著：6

和文症例報告：7

消化器外科 I ・ 週間予定表

	7:30	8:30	8:50	13:00	14:30	15:00	17:00
月曜日	術前症例検討会			総回診	学生指導 (縫合結紮/動物実習)		・薬剤説明会 ・MRIカンファレンス ・ほくたけセンター
火曜日	リサーチカンファレンス			手術日/病棟業務			
水曜日	術前症例検討会		当直報告	手術日/病棟業務	学生指導 (鏡視下縫合結紮) 隔週	手術日/病棟業務	
木曜日	M&Mカンファレンス 学会予演会			手術日/病棟業務			・消化器腫瘍内科との合同カンファレンスなど
金曜日	抄読会 /術前症例検討会 (予備日)			手術日/病棟業務			15:00 学生課題報告会 (隔週) ・消化管カンファレンス

2016年ジャーナルクラブ

1月15日	若山 顕治	Two-stage hepatectomyとALPPS	6月24日	脇坂 和貴	混合型肝癌について
1月22日	島田 慎吾	肝切除後門脈血栓症	6月30日	小田 義隆	E型肝炎ウイルスについて
1月29日	今泉 健	Open abdominal management		赤羽慧一郎	胎児・新生児卵巣嚢腫 一帝王切開は本当に必要か?
	村田 竜平	硬化性胆管炎と胆管癌の見分け方			
2月5日	本多 昌平	先天性門脈体循環シャントの病態と治療	7月22日	田中 友香	TACE後の胆管合併症
	佐野 修平	術後疼痛管理における局所浸潤麻酔の有用性	7月29日	川崎 彩	AFP産生胃癌
2月12日	川村 典生	Graft variationとDonor - Recipient Matching			
2月19日	矢部 沙織	Indocyanine green負荷試験と99mTc-GSAシンチグラフィの乖離について	9月2日	杉山 昂	炎症性腸疾患 疫学・病因・発癌関連遺伝子 ~潰瘍性大腸炎を中心に~
2月26日	大淵 佳祐	憩室炎に伴う結腸膀胱瘻 ~ Up to date ~	9月9日	渡辺 正明	Transplantation at Karolinska University Hospital
3月4日	藤居 勇貴	腸閉塞の保存的治療・遅延手術のタイミング	9月23日	本多 昌平	H病類縁疾患の現状と展望
3月11日	崎浜 秀康	微小転移検索の意義 ~ Circulating Tumor Cells & Disseminated Tumor Cells ~	9月30日	島田 慎吾	脂肪肝と肝がん・肝切除
4月22日	大野 陽介	がん免疫治療について これまでとこれから	10月14日	市川 伸樹	切除不能転移性大腸癌に対する原発巣切除の意義
5月6日	腰塚 靖之	肝移植後de novo発癌	10月21日	南波 宏征	直腸悪性黒色腫について
5月13日	宮城 久之	鎖肛における課題と病態解明	10月28日	永生 高広	最新膵癌治療と私見
5月20日	坂本 譲	末期腎不全患者における悪性腫瘍とHCCに対する肝切除術の現状	11月11日	湊 雅嗣	Trisomy18と食道閉鎖症
6月3日	渋谷 一陽	膵消化管吻合	11月18日	折茂 達也	肝門部領域?胆管癌?
6月10日	阪田 敏聖	小児複雑性急性虫垂炎の治療戦略	11月25日	中本 裕紀	膵・胆管合流異常症~治療を中心に~
6月17日	柴田 賢吾	肝外門脈閉塞症に対するRexShunt術	12月9日	後藤 了一	肝移植における抗ドナー抗体
			12月16日	渋谷 一陽	胆汁について

2016年M&Mカンファレンス

1月28日	消化管	術中結腸損傷で再手術を要したS状結腸癌の一例	9月29日	肝胆膵	肝門部胆管癌術後肝不全に陥った一例
4月28日	移植	脳死肝移植待機中に上咽頭から出血を来した死亡した、AIH acute on chronic型急性肝不全の1例	10月6日	移植	BacktableでのRetroportal Right Hepatic Artery Injury
6月16日	肝胆膵	門脈胆管瘻を認めた一例	10月20日	小児	肺葉外肺分画症を伴った食道裂孔ヘルニアの1例
6月23日	移植	脳死肝移植後に生じた肝動脈仮性瘤が自然消退した1例	10月27日	消化管	ステロイド内服患者におけるLADG後の 残胃潰瘍穿孔とY脚吻合部出血の1例
6月30日	小児	胸腺生検の一例	11月10日	肝胆膵	肝右葉切除後にRTBD逸脱による再手術および門脈血栓、難治性腹水に対する治療を要した一例
7月7日	消化管	婦人科術後ヘルニアの2例	11月17日	移植	脳死肝移植後肝動脈狭窄
8月5日	移植	生体肝移植後に敗血症となり肝不全に至った1例	12月22日	消化管	腹腔鏡胃全摘術後、食道空腸吻合部縫合不全の1例
9月15日	消化管	腹腔鏡下高位前方切除後、吻合部出血を来した1例			

2016年教室紹介

〈診療部門〉

■ 肝胆膵グループ

《スタッフ紹介》



神山 俊哉 (チーフ)

今年の満足度：60%

来年の抱負：北大病院としての肝臓外科の指導体制の確立

今抱えているproject、目指しているprojectなど：肝臓グループのproject全体の推進。

新しいリサーチテーマの確立、推進：肝細胞癌におけるWnt/ β -カテニン経路のうち β -カテニン非依存性経路を介して肝細胞癌と関連するWnt5aの発現と肝細胞癌の生物学的悪性度および切除例における予後因子としての研究。



蒲池 浩文 (サブチーフ)

今年度は肝胆膵グループ医師の肝胆膵高度手術技能専門医取得を念頭に、肝門部胆管癌、HPD、局所進行膵癌の大部分の手術を中堅の先生に施行してもらいました。手術自体の技術的な部分に関しては、おのおのほぼ問題なく施行できており満足できるものと思っています。来年度は術前・術中・術後におけるjudgeと自立性という観点に関し、さらに経験を積んでもらうことを目標としたいと思います。個人的な目標としては、患者に直結する手術技量をさらに向上させること、抱えているいくつかの論文を作成すること、臨床試験で進めている膵癌術前放射線化学療法を進めるとともに、その治療目的の一つとしてあげている癌幹細胞を標的とした治療法に関する基礎研究を進めていきたいと考えております。



横尾 英樹 (サブチーフ)

肝胆膵グループのおもに肝臓を担当しています。臨床では年々、厳しい症例が集まるようになってきておりますが、綿密な術前計画のもとほとんど合併症なく行えている今日、チーム力の向上を肌で感じている次第です。大腸癌肝転移症例も学内からの紹介も多くなりその治療戦略の構築も目指しております。肝細胞癌再発治療の一つとしてソラフェニブ治療を導入してから50例近くの症例が集まって参りましたので近々情報を発信してゆきたいと考えております。

研究ではプロテオミクスにて同定された肝細胞癌の悪性度に関わる分子であるFABP5とEB1を大学院生に解析してもらい新規の予後再発マーカーとして有用であることを突き止めずでに海外での学会発表や論文投稿しておりその結果が待たれるところです。



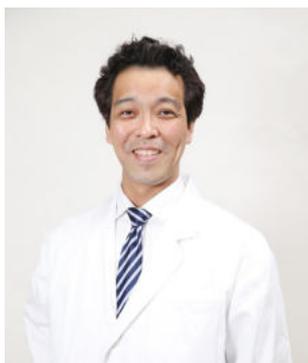
折茂 達也 (サブチーフ)

現在、北海道大学は学生のカリキュラム改正の変革期にあたっており、本年度より新旧カリキュラムの学生が混成で実習に回ってくることになりました。そのため病棟が少し混乱気味ですが、スタッフ、学生のご協力のおかげで何とか乗り切っています。また最近、後輩の肝切除の第一助手をする機会が増えました。指導医の先生方の力量と自分との間にはまだ大きな差があることを実感しますが、少しでも早く本当の実力をつけることが今の自分に必要であり、そのために何をすべきか常に考えたいと思います。



若山 顕治 (サブチーフ)

肝胆膵グループで主に肝疾患を担当している若山です。大学の肝胆膵グループで5年目となった平成28年度ですが、4月に特任助教に任命いただき、心機一転日々の仕事にあたっております。当グループの特徴でもありますが、高度進行肝細胞癌の診療にあたるのが今年も多く、積極的な外科的切除を中心として、術前放射線治療、術後補助療法の試み、進行再発例に対する集学的治療と、様々な科と協調して診療を進めてまいりました。これらの症例を中心に学会報告、また英語論文にて発表させていただくこともでき、充実した1年であったと思います。また、肝胆膵外科学会高度技能認定医の取得に向けて膵切除の経験を積ませていただき、また、内視鏡外科学会技術認定医（肝臓）取得に向けて腹腔鏡下肝切除の症例を蓄積させていただき、今後の認定医取得に向けての準備を進めることができた1年でもあったと思います。来年は、まずは肝胆膵外科学会高度技能認定医の取得を目指しつつ、日々の診療にあたりたいと思います。



永生 高広 (インストラクター)

今年から大学に戻ることになり肝胆膵グループで勤務しています。今年度の満足度は日々慣れない業務に追われ、理想である臨床・研究・教育のすべてにおいて高くなく、来年は臨床・研究・教育を少しずつでも前進させていきたいと考えています。今抱えているprojectとしては本年度蒲池先生から与えられた膵癌のNACRT後の神経叢浸潤の治療効果の検討と大学院時代から続けているMesothelinの血液検体を用いた腫瘍マーカーへの臨床応用があります。NACRT後の神経叢浸潤は今年一年かけたテーマで、その局所治療効果は高く、非常に興味深く感じました。今後としてはMesothelinの診断・治療への臨床応用をテーマに頑張っていきたいと考えています。



島田 慎吾 (インストラクター)

病棟インストラクターの島田慎吾と申します。今年は肝胆膵グループへ配属されて2年目の年となりました。1年目と比較すると、日常の業務については慣れもあり円滑に進めることができるようになりましたが、肝胆膵外科医としての実力は先輩方と比較してまだまだ不足しており、まだまだ研鑽をつまねばならないことを痛感しております。今後も定型的手術から高難度手術まで安全・確実に施行しうる外科医を目指して修練していきたいと思っています。研究面についても今年は当初の目標の60%くらいしか達成できなかったと自覚しており、大いに反省の必要があると考えておりますが、その中でも今年は初めての科研費を取得できたことと日本外科学会研究奨励賞、アメリカ肝臓学会 Liver Transplant and/or Hepatobiliary Surgery Fellow Awardを受賞できたことは大きな収穫でした。

今後ともグループ、教室全体の発展に寄与できるように微力ながら尽力したいと思います。

現在の取り組み

〈肝臓〉

1. 肝細胞癌根治切除後における機能的食品AHCC摂取による再発予防効果の検討
2. 高度脈管浸潤（門脈、下大静脈）を有する肝細胞癌に対する外科治療効果の向上、門脈腫瘍栓に対する放射線照射併用術後アジュバントとしてのIA-call+UFTの治療効果
3. 肝細胞癌多発再発に対するIA-call+UFTの治療効果
4. 高度脈管浸潤（下大静脈）を有する肝細胞癌に対する安全性、外科治療効果の向上
5. 10cmを超える肝細胞癌に対する治療効果向上
6. GSAシンチを用いた機能的肝予備能評価の有用性；PTPE前後の変化も含めて
7. PTPE後再生予測因子の検討；エコーによる非塞栓葉の門脈血流動態を含めて
8. 尾状葉原発肝細胞癌の生物学的特徴とその治療方針
9. 5cm以下肝細胞癌における病理学的門脈侵襲の予測因子の検討
10. 胆管細胞癌の肝門型、末梢型の生物学的特徴の評価と治療方針
11. 局所治療failureした肝細胞癌の病態、生物学的悪性度の検討
12. 多発転移性肝癌の治療方針
13. 肝細胞癌切除後肝内多発再発、遠隔転移再発に対するネクサバールの治療効果
14. NBNC肝細胞癌の病態、生物学的悪性度の検討
15. 混合型肝癌の病態、生物学的悪性度の検討
16. 予後因子としての末梢血リンパ球・単球比の意義
17. 腎不全患者に対する肝切除の検討
18. 肝切除術前プロバイオティクスを用いたpreparationの効果
19. 腹腔鏡下肝切除の標準化
20. 高度進行肝エキノコックス症に対する治療効果の向上
21. 北大消化器外科 I 肝胆膵Gにおける肝胆膵高度技能医育成プログラムの構築
22. 北大消化器外科 I 肝胆膵Gにおける内視鏡技術認定医育成プログラムの構築

〈胆膵〉

1. 局所進行膵癌患者に対するMetformin併用術前放射線化学療法の有効性の検討「PK-NACRT-Gmet試験」UMIN000017694
2. 胆膵悪性腫瘍術後の補助療法としてのS-1週4日投与の効果
3. 肝門部胆管癌における門脈塞栓術後の肝再生と肝線維化が術後肝不全に及ぼす影響の解析
4. 肝門部胆管癌における血管胆管3D-fusion imageを用いた手術navigationの有用性
5. 膵癌術前放射線化学療法によるSMA周囲神経叢浸潤への治療効果と縮小手術の可能性に関する研究

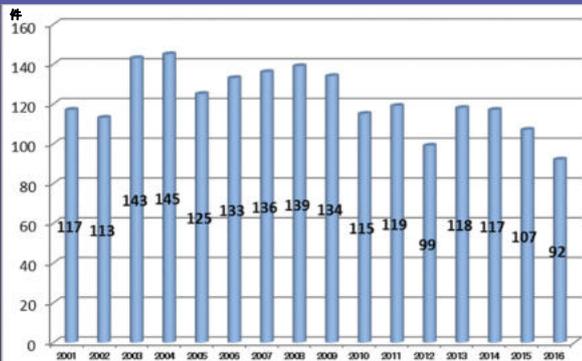
■参加臨床研究

1. 慢性膵炎による難治性疼痛に対する外科治療 施行症例の検討-多施設共同後向き観察研究-厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究班 難治性膵疾患に関する調査研究
2. 慢性膵炎に対する外科治療の実態調査と普及への課題解析-多施設共同後向き観察研究- 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究班 難治性膵疾患に関する調査研究
3. 切除不能胆道癌に対するGEM/CDDP/S-1とGEM/CDDPを比較するランダム化第Ⅲ相試験 Kansai Hepatobiliary Oncology Group (KHBO) 関西肝・胆道オンコロジグループ KHBO1401 BTC GCS vs GC Randomized Phase III UMIN 000014371
4. 膵全摘患者に対する前向き実態調査 UMIN000018763

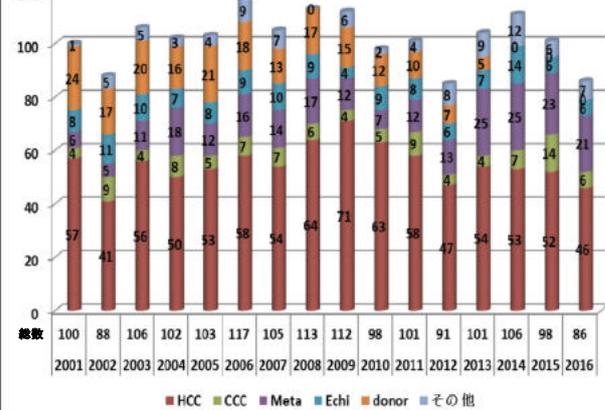
■基礎研究

1. 抗mesothelin抗体を用いた細胞接着阻害が膵癌細胞に及ぼす影響の解析
2. 膵癌細胞株を用いた癌幹細胞の多様性と役割の解析、および癌幹細胞をターゲットにした治療法開発に関する基礎研究

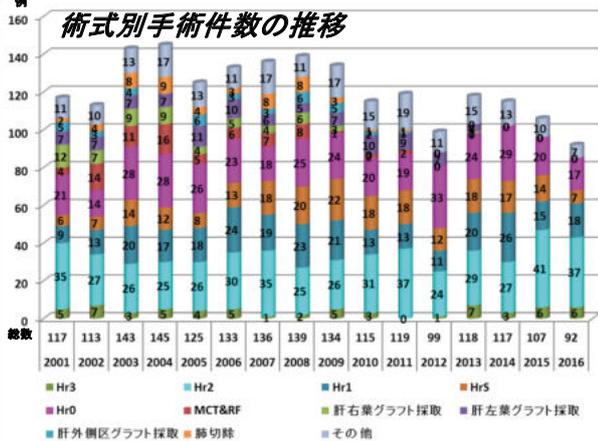
総手術件数の推移



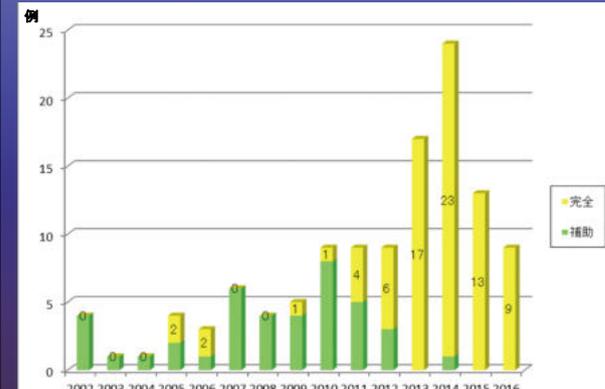
疾患別肝切除数の推移



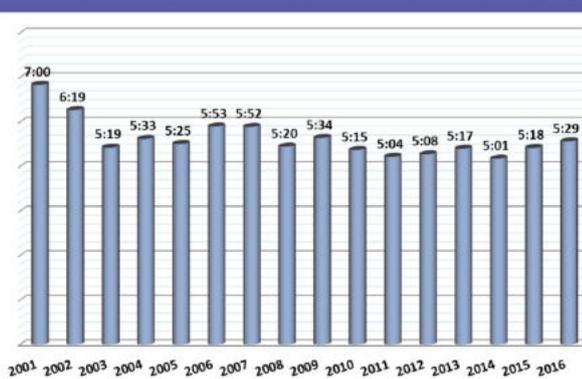
術式別手術件数の推移



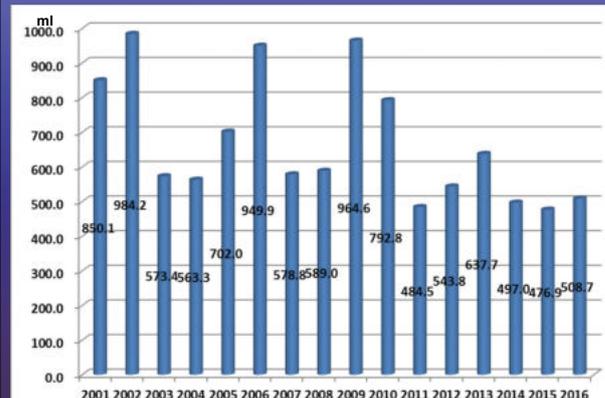
腹腔鏡下肝切除手術件数の推移



肝切除症例の手術時間中央値の年次推移



肝切除症例の平均出血量の年次推移



■ 移植グループ

《スタッフ紹介》



嶋村 剛 (チーフ)

北大病院における第1例目（1991年）の生体肝移植に続き、1997年から本格的に始動した肝移植プログラムに開始当初から参加し、成人生体肝移植179例、小児生体肝移植73例、脳死肝移植46例、膵腎同時移植6例、膵単独移植3例を経験しました。肝移植総数は年明け早々に300例になります。2010年の臓器移植法改正に伴い、わが国の肝移植も生体移植から脳死移植にゆっくりと移行しつつあります。移植後6か月の予測生存率が70%を下回るリスクの高い生体肝移植は見送り、脳死肝移植を選択する一年となりました。今後もこの基本方針を変えずに、脳死下の臓器提供を推進しつつ後進の育成を進めていきたいと考えています。このことはプログラムを預かる者の責務であり、北海道で唯一の脳死肝移植・膵移植実施認定施設の実施責任者としての職責と考えています。



山下 健一郎 (チーフ)

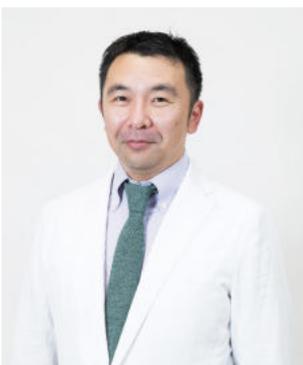
診療業務の傍ら、年度初頭から臨床試験再開に向けた業務に追われる日々が続いています。教室では、2010年末から「制御性T細胞を用いた細胞治療による新しい免疫抑制法の臨床研究」を開始し、世界に先駆けて10名の生体肝移植症例で臨床試験を行い、7症例で免疫抑制剤からの完全離脱・免疫寛容の誘導に成功していることは皆様もご存じかと思えます。東京女子医科大学(江川教授)、広島大学(大段教授)を実施施設に加え、多施設共同臨床試験として再開準備を進めていましたが、本臨床試験は再生医療の範疇に含まれるため、昨年末に施行された新法「再生医療等の安全確保等に関する法律」を遵守して行わなければならない、大幅な遅れと膨大なペーパーワークを余儀なくされています。現在、試験実施計画は厚生労働省が認定している特定認定再生医療等委員会の返答待ちで、今後は厚生労働省(厚生局)へ届出を行い、今年度中にはなんとか臨床試験を開始できるよう準備を進めている次第です。



後藤 了一 (サブチーフ)

昨年は脳死移植を比較的多く経験し、移植臓器の立ち上がりの良さを改めて実感することで、今後の脳死肝移植の発展、可能性を感じました。しかし一方で、脳死肝移植でも救えない症例も経験し、厳格な適応判断と適応拡大への努力についても考えさせられました。また学術面では、アジアを中心に学会活動に参加することが多く、肝移植におけるアジアの中での日本の立場を再認識しました。

今年はこれまで以上の脳死肝移植の施行と、生体肝移植症例数の増加、血液型不適合移植も見据えた安全な肝移植治療の提供に努力したいと思います。また、日本から世界に innovation を発信できるように、未解決の病態、治療法の開発に取り組んでいきたいと考えています。



渡辺 正明 (インストラクター)

Sweden Karolinska大学での留学を終え、本年7月から大学病棟で勤務させていただいています。留学中は、膵島移植・細胞移植・免疫寛容誘導の研究とともに、臨床での移植手術を経験させていただきました。膵島・細胞移植における大きな問題点である、低い早期のグラフト生着率の改善のための新しい治療法、さらに臨床移植での長期成績向上のため、肝臓移植・細胞移植における免疫寛容誘導のための基礎実験、それらの臨床試験の準備に携わりました。帰国後は、臨床の現場で大きく貢献できることを目標にしております。臨床移植の成績向上、そして、これまで携わってきた基礎研究を積み上げて、そこから移植医療における新しい治療法の開発・臨床試験、そして免疫寛容を目標とした臨床試験に向けてさらなる努力をして参ります。



腰塚 靖之 (インストラクター)

移植グループの腰塚です。だんだんと月日の経過を早く感じるようになり、今年は例年以上にあっという間に1年が過ぎ去りました。自分のすべきことがほとんどできずに終わってしまったと感じています。来年以降は、自分の目標を見据えてぶれることなく、臨床業務、学会発表、論文作成、後輩の指導に邁進します。

移植を通じて一人でも多くの患者さんのお役に立てることができるよう頑張りたいと思います。



川村 典生 (インストラクター)

2015年は9例の脳死下臓器摘出（他施設からの依頼症例1例を含む）、6例の脳死肝移植に参加致しました。脳死肝移植の実施数は現在京都大学に次いで全国2位の症例数をキープしております。症例数の増加に伴い、これまで海外留学の経験に頼らざるを得なかった脳死下臓器摘出の手法を、日本にいながらに習得できるように取り組んでおります。

研究面では、International Liver Transplant Society, annual international congressにて当科のsmall graft (GV/SV ratio<35%)を用いた生体肝移植の演題をplenary sessionで発表させて頂くことができました。今後は論文化をもう少し活発にしていければ、と思っております。

来年以降も臨床・研究両面で精進していきたいと思っておりますので、御指導御鞭撻の程宜しくお願ひ申し上げます。



太田 稔 (臨床工学技士)

本年4月からME機器管理センター副部長と臨床工学技士長の大役をおおせつかることになりました。みなさまにはこれまで肝移植医療を中心に十余年にわたりお世話になってきましたが、これからも移植医療を含めた医療全般に貢献できるよう努めますのでお力添え賜りますようお願いいたします。私の貴重な入院経験をもとに、患者さんに安心感を感じていただけるよう、社会的要請に応えられるよう、私なりのやり方で後輩の育成と組織の発展に寄与したいと考えております。ご協力よろしくお願ひいたします。



岡本 花織 (臨床工学技士)

移植医療に関連する血液浄化療法および手術関連業務に携わらせていただいている臨床工学技士です。日々、先生達から様々な刺激を受けながら、手術に取り組む姿勢や知識を学んでおります。今後も益々お役に立てるように頑張っていきたいと思っております。

現在取り組んでいること

1. 制御性T細胞治療による肝移植における免疫寛容誘導法の開発
2. ドナー特異的抗体を含む抗体関連拒絶への対策
3. 脳死肝移植待機患者の栄養評価および栄養療法の最適化に関する臨床研究
4. 小児肝移植後患者に対する弱毒生ワクチンの安全性に対する臨床研究
5. 小児肝移植患者に対する、疾患・服薬教育システムの確立
6. 血液型不適合肝移植（準備中）
7. 膵臓移植後の1型糖尿病再発についての多施設共同研究
8. 血液製剤によるHIV/HCV重複感染患者の肝移植に関する研究（厚生労働省エイズ対策事業・江口班）
9. 多施設共同研究による肝移植後肝炎ウイルス新規治療の確立と標準化
10. 昏睡型急性肝不全に対する血液浄化装置HAYATEの昏睡覚醒効果に関する臨床試験（多施設共同試験）
11. 生体肝移植ドナーに対するアンケート調査
12. 生体肝移植後リンパ増殖性疾患の全国調査
13. 原発性胆汁性肝硬変に対する肝移植後予後因子に関する多施設前向き研究（多施設共同試験）

2016年1月から12月の診療実績

1. 病棟実績
 - ・入院患者数（延べ人数）：144名
2. 手術件数
 - 生体肝移植術 1例（成人1例）
 - 生体肝グラフト採取術 1例
 - 脳死肝移植術 6例
 - 脳死下肝臓摘出術 9例（他施設協力分を含む）
 - 膵腎同時移植 0例
3. 外来実績
 - 外来患者数（延べ人数）：1,842名
 - 新患外来（紹介）：37名（延べ1,195名）
 - 現在フォロー中の患者数
 - 移植前フォロー患者数：53名
 - 生体肝移植待機：2名
 - 脳死肝移植待機：41名
 - 膵・膵腎移植待機：10名
 - 移植後患者数：256名（ドナー除く）
 - 肝移植後：246名（当院 221名、他院 25名）
 - 膵腎移植後：10名（当院 9名、他院 1名）
 - 生体肝移植ドナー：249名（*全員毎年受診はしてはず）

入院

- ◆ 入院患者数(延べ人数) : 144名
 - ・術前評価・待機 : 28名
 - ・ドナー評価 : 4名
 - ・手術(生体ドナー含む) : 10名
 - ・移植後再入院(検査・加療) : 112名
- ◆ 平均在院日数 : 15.4 日
- ◆ 術後平均在院日数
 - ・肝移植 : 70.1日(生体 78日、脳死 68.8日)
 - ・生体肝移植ドナー : 16日

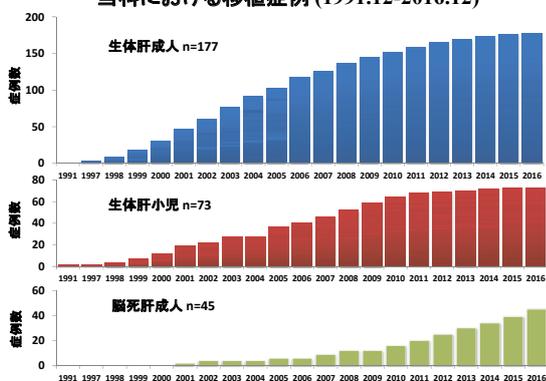
2016年1月~12月

外来

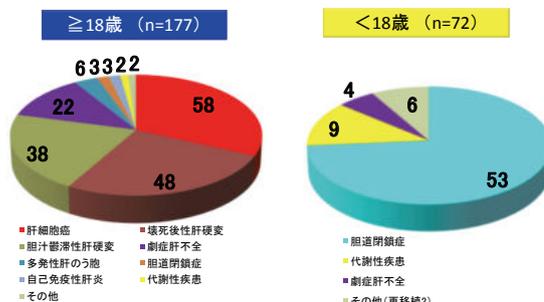
- ◆ 外来患者数(延べ人数) : 1842名
- ◆ 新患外来(紹介) : 37名(延べ1195名)
- ◆ 現在フォロー中の患者数
 - 移植前フォロー患者数 : 53名
 - ・脳死肝移植待機 : 41名
 - ・生体肝移植候補者(ドナー・レシピエント) : 4名
 - ・肺・臓器移植待機 : 10名
 - 移植後患者数 : 256名(ドナー除く)
 - ・肝移植後 : 246名(当院 221名、他院 25名)
 - ・生体肝移植ドナー : 249名 * 全員毎年受診はしていません
 - ・肺・臓器移植後 : 10名(当院 9名、他院 1名)

2016年1月~12月

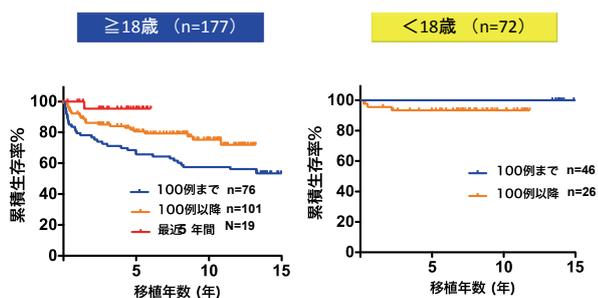
当科における移植症例(1991.12-2016.12)



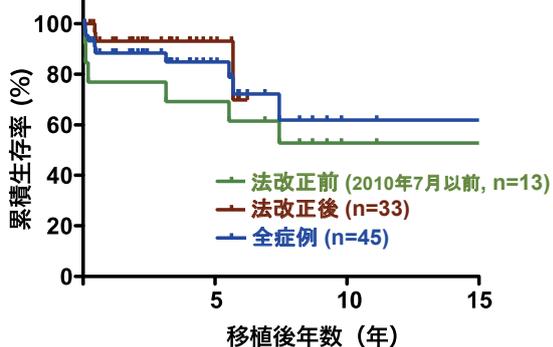
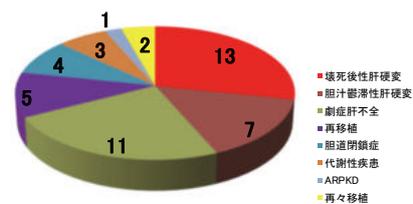
生体肝移植 249例



生体肝移植 249例(1997年9月~)



脳死肝移植 46例(成人45例、小児1例)



■ 消化管グループ

《スタッフ紹介》



川村 秀樹 (チーフ)

武富教授就任後、関連施設を含め教室全体で鏡視下手術の普及、推進を目指すこととなり、その一助となるべく大学に戻り、また大学における胃癌診療担当として約4年、消化管グループのチーフとなり約2年が経過しました。時代的な背景も追い風となっていますが関連施設においても技術認定医がかなり増え、胃癌や大腸癌に対する腹腔鏡下手術も普通に行われるような状況になってきました。また大学における鏡視下手術率も9割ほどとなり、なんとか、当初の目標の一つは達成できてきたと安堵しております。今後は第1外科関連施設とともに、新たなエビデンスを発信していけたらと思っています。今後ともよろしくお願いいたします。



本間 重紀 (サブチーフ)

下部消化管（小腸、大腸）を担当しております。大腸癌、潰瘍性大腸炎、クローン病の外科治療を中心に診療しております。何れの疾患においても、術前、術後の薬物療法の重要性が増しております。手術のタイミングを含めた、最適な治療法の選択を消化器内科・光学診療部、炎症性腸疾患グループ、化学療法グループの先生方と連携しながらおこなっております。また、地域の先生方からのご紹介、ご支援をいただき、着実に手術件数を積み上げてきております。安全第一をモットーに、また迅速に対応できるよう、グループ一丸となって尽力いたします。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



吉田 雅 (サブチーフ)

今年は特任助教を拝命したのと同時に、研修医係も担当することになりました。臨床では、術者としての自分の技量を向上させるだけでなく、助手としての技術習得が自分の中での最大のテーマでした。昨年と比較すると、少しずつですが前進している実感は若干あります。しかしながら、まだまだ理想には程遠く、これからも研鑽を続けていきたいと思っています。

一方、研修医係としては、今年は8名の先生方が入局宣言をしてくれて非常に嬉しい限りです。これも一重に、大学・関連病院の先生方のご協力あってのことと、心より感謝申し上げます。下戸であることが中々辛いところではありますが、研修医・学生の勧誘も重要な業務と考え、今後も努力していきたいと思います。

現在、前向きランダム化比較試験の自主臨床研究の準備を鋭意進めており、来年の大きなテーマとなりそうです。



市川 伸樹 (インストラクター)

本年より大学に戻り、初心に戻った一年でした。今年一番の出来事は、長年の課題であった学位がようやく取得できた事です。諸先生方のご指導無しでは達成できなかったと思い、心から感謝しております。また、大学人としては、自分自身の手術手技向上や日常診療はもちろんですが、学会活動、論文執筆、チーム課題への参加、教育など、教室へ貢献できる事を増やして行きたいと思っております。顧みると至らぬ部分が多々あり、未熟な自分ではありますが、精一杯頑張りますので、今後ご指導ご鞭撻の程、何とぞ宜しくお願い申し上げます。



大野 陽介 (インストラクター)

4月より大学病棟の消化管グループにて勤務しています。今年は、本格的に内視鏡外科のトレーニングを開始し、鏡視下手術の基本を学ぶことができました。胃癌、大腸癌とも多くの執刀機会を与えていただきましたが反省点も多く、悔しい思いが強い1年でした。来年度には内視鏡技術認定医を取得することを目標に研鑽を重ねたいと思います。また、大学勤務から1年が経過し、ようやく少し余裕が出てきました。大学院時代に学んだ腫瘍免疫の知識をもとに臨床と基礎を繋げるような研究を遂行することも来年度の課題としたいと思っております。

診療、研究と精一杯努力していきたいと思っておりますので、何卒よろしくお願いたします。

現在の取り組み

〈胃〉

1. Stage II,III胃癌に対する腹腔鏡下胃切除の検証的臨床研究 (多施設)
2. Stage IV胃癌に対する姑息的腹腔鏡下胃手術の探索的臨床研究 (多施設)

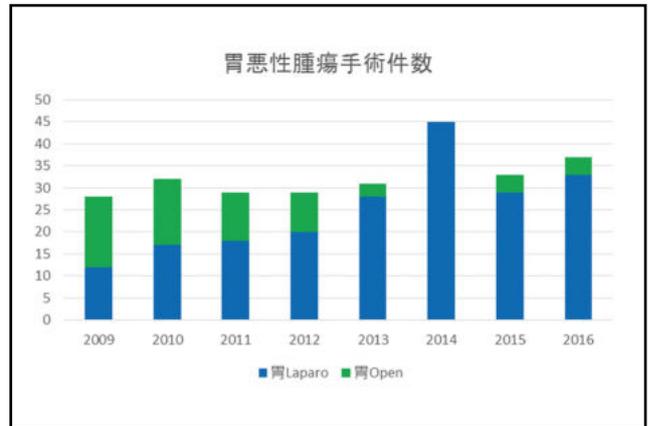
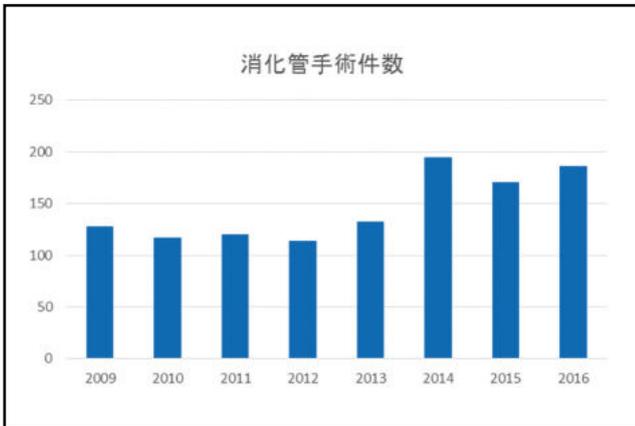
〈大腸〉

1. 手術支援ロボット (da Vinci Surgical system Si) を用いた

直腸腫瘍に対する腹腔鏡下直腸切除/切断術の探索的臨床研究
直腸癌術前化学療法RNAC-1試験

〈鏡視下手術全般・教育〉

1. 初期・後期研修医に対する鏡視下基本手技の教育 (ほくたけトレーニング)
2. 後期研修医からの鏡視下アドバンス手術執刀経験
3. 関連病院を含んだ内視鏡外科学会技術認定医取得支援
4. Linear staplerの至適切離条件の研究



■ 小児グループ

《スタッフ紹介》



本多 昌平 (チーフ)

2014年4月より小児グループのチーフとなり3年目となりました。臨床面・精神面ともども多くの方々に支えていただきながら、徐々にですが鏡視下手術や新しい治療法を導入する体制ができてきたと実感しております。大学病院の責務である臨床・研究・教育をバランス良くチーム全体でカバーし合いながら、今後更なる研鑽を重ねて北海道の小児医療に貢献できるよう邁進していく心づもりです。



宮城 久之 (サブチーフ)

2015年4月に神奈川県立こども医療センターより大学に戻り、チーフの本多先生のもと、臨床・教育・研究いずれにおいても充実した環境を整えられるよう、日々模索しております。北海道という地域特性がある中、幸いにも、武富教授をはじめとし他グループからの協力も得られ、質の高い医療を提供できてきていると考えております。

また道外の日本小児外科学会を代表する先生方とも交流が得られ、気軽に相談にのって頂いたり、勉強に行かせて頂いたりしており、医療の地域格差が生じないように努めております。目の前の患者さんに対し何がbestなのかを常に考え、安心して安全な医療を受けて頂けるよう日々精進し、同時に日本さらには世界へ貢献していけるよう目指して参りたいと存じます。



湊 雅嗣 (インストラクター)

今年から小児外科グループのインストラクターとして配属されました。今年本多チーフが留学のため不在となり、宮城チーフ代行の元、不撓不屈の精神で頑張っております。大学院生活3年間は終了し今年度は臨床がメインの大学院4年生でした。臨床と研究の両立にはまだまだ程遠いのですが、臨床に戻ってくると日々の疑問に対するアプローチが確かに変わりました。臨床では目の前の患者さんと家族に全力を尽くし、研究では世界と未来の患者さんとその家族に希望を持たせることができるようにと思っています。というわけで、2017年の目標は小児外科専門医取得と博士号取得です。

現在の取り組み

・2016年に取得した競争研究費

【本多 昌平】

基盤研究 (A) (海外学術調査) (H28 ~ H31) 分担
小児がん研究グループによる小児肝がんの海外診療状況調査と国際共同臨床研究基盤整備500 (10,400) 千円

基盤研究 (C) (一般) (H27 ~ H29) 代表

肝芽腫の発生・進展過程におけるDNAメチル化異常の解明
1,300 (3,700) 千円

挑戦的萌芽研究 (H28 ~ H30) 分担

肝芽腫局所進展に関わるドライバーエピゲノム変異の解明
1,100 (2,900) 千円

第22回伊藤財団交流助成 (H28)

肝芽腫の発生・進展とエピジェネティック異常
300千円

【宮城 久之】

基盤研究 (C) (一般) (H27 ~ H29) 分担

肝芽腫の発生・進展過程におけるDNAメチル化異常の解明
1,300 (3,700) 千円

挑戦的萌芽研究 (H28 ~ H30) 分担

肝芽腫局所進展に関わるドライバーエピゲノム変異の解明
1,100 (2,900) 千円

2016年診療実績 (1月~12月)

1. 外来実績

月曜、金曜の午前を中心に、10 ~ 25名/日程度、年間で延べ1,600名程度を2名体制で行っています。

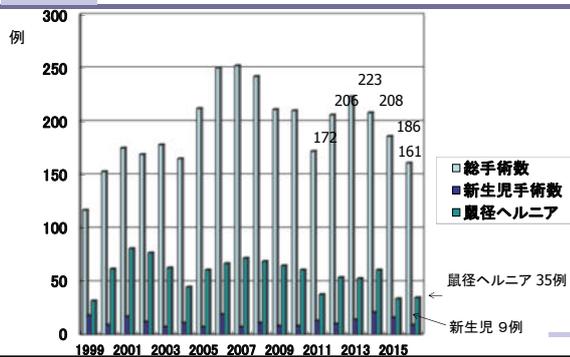
2. 病棟実績

延べ入院患者数 (新生児、小児腫瘍含む) : 201例

3. 手術件数

総手術件数	161例
新生児症例	9例
小児固形腫瘍	15例
鏡視下手術	42例

小児外科の年間手術数



新生児手術症例の内訳

新生児手術 9例		例数
先天性食道閉鎖症 (18トリソミー)	食道バンドニング・胃瘻造設術	3
胸腔内異物 (胸腔-羊水シャント逸脱)	胸腔内異物除去術	1
新生児壊死性腸炎	結腸切除術、ドレナージ術	1
臍帯ヘルニア	腹壁閉鎖術(サイロ形成術)	1 (1)
鎖肛	肛門形成術、ストーマ造設術	1
先天性横隔膜ヘルニア	裂孔閉鎖術	1
(乳児期以降)		
先天性食道閉鎖症 (バンドニング後)	先天性食道閉鎖症根治手術	3

主要手術疾患の内訳

主な小児固形腫瘍 (15例)

神経芽腫	腫瘍摘出術	2例
肝芽腫	生検術	1例
	腫瘍摘出術	1例
Wilms腫瘍	腫瘍全摘出	1例
	腎摘出術	1例
仙尾部奇形腫	摘出術	1例
膝腫瘍	摘出術	1例
その他	摘出術	7例

胆道系 (8例)

胆道閉鎖症	根治術	1例
膵胆管合流異常症	胆管空腸吻合術	2例
その他	シャント結紮術など	5例

主要手術疾患の内訳

鎖肛 (9例)

高位	腹腔鏡補助下高位鎖肛根治術	1例
中間位	ストーマ造設術	1例
低位	会陰式肛門形成術	7例

その他

ヒルシュスプリング病	経肛門のSoave法	1例
	腹腔鏡補助下Soave法	1例
	直腸粘膜生検 (便秘精査含む)	6例

鏡視下手術

術式	例数	疾患
腹腔鏡下噴門形成術	1	胃食道逆流症
胸腔鏡下高位鎖肛根治術	1	高位鎖肛
腹腔鏡補助下Soave法	1	Hirschsprung病
腹腔鏡補助下副腎腫瘍摘出術	1	神経芽腫
胸腔鏡下胸腺腫瘍生検	2	胸腺腫瘍
腹腔鏡下精巣固定術	1	停留精巣
腹腔鏡下鼠径ヘルニア手術 (LPEC)	35	鼠径ヘルニア
計	42例	

2016年教室紹介

〈研究部門〉

■ リサーチ統括部長より

消化器外科学分野 I における研究の概要



(リサーチ統括：深井 原)

Bedside to bench、Bench to bedsideの双方向性の継続的な活動を目指し、肝胆膵G、消化管G、移植G、小児Gの臨床と研究が行われています。大きな枠組みは昨年度までと変わりません。

大学院生が研究を通して日常臨床での疑問に対する答を探索する時間を持つことが、歩幅の違いこそあれサイエンスを一步前進させるはずです。ノーベル生理学医学賞を受賞された大隅教授が、“役に立つ研究”という考え方が日本をダメにする、と仰っていました。“役に立つことだけ”に意義があり、それ以外の研究成果が軽視されることへの警鐘として、多くの科学者の称賛を得ています。与えられたテーマを研究している中で興味深い知見が得られると、“世界で初めての凄い発見をした”、とワクワクすることがあります。文献を具に調べれば大抵誰かが報告しているのですが、中には本物があるかもしれません。不可能とされることを実現する方法、あるいは、ヒントが得られるかもしれません。イヌを用いた人工肝臓の実験では無肝犬の最長生存記録を樹立し、大小動物の各種臓器移植、免疫抑制、免疫寛容の導入、切除組織を用いた初代培養や細胞株の樹立等々、当科の研究は不可能に挑戦してきた歴史があります。諸先輩のパイオニア魂を絶やさずに次世代に受け渡すことも重要です。とは言え、臨床医学は実

学であり、外科教室の研究からトランスレーショナルリサーチを外すわけにはいかないでしょう。与えられたテーマを進めながらであれば、若い人が見つけた（かもしれない？）シーズを試行錯誤させる寛容さを残せば、と考えています。

研究活動の持続的発展には、研究費を継続的に獲得することが不可欠です。H28年度は科研費の新規採択が8件でした。内訳は基盤B 2件、基盤C 3件、萌芽 1件、若手B 2件でした。継続課題と合わせると競争的資金 26件、民間財団や産学連携研究 8件でした。H29年度の科研費申請（25件）では申請書の質を向上させるために、幾つかの工夫をした結果、ここ数年で最も質が高く、多数の新規採択があることを期待しています。可能な限り教室の米櫃に米を満たすように、引き続き微力ながらそのノウハウを若い人たちに伝えることができれば幸いです。

消化器外科領域（肝胆膵、消化管、小児悪性腫瘍）では癌が主要な研究対象です。臨床検体と患者情報を集積し、悪性度マーカーを見出し、それらの分子生物学的意義を検証し、分子標的治療の可能性を模索するためにTissue Bankが重要な役割を果たしています。2016年12月31日の時点でTissue Bank登録症例は、肝切除症例 1578例（肝細胞癌 1016例、胆道癌 246例、大腸癌肝転移 208例、その他 108例）、膵臓癌 93例、大腸癌 1597例、胃癌 628例、その他 1150例、計5046例となりました。

若い先生方の中にはTissue Bankの歴史を知らない人も多いと思いますので、先人への敬意と感謝を込めて紹介させていただきます。Tissue Bankは藤堂省前教授の指導の下、1999年に開始され、北河徳彦、高田尚幸、高橋将人、中西一彰、尾崎倫孝（敬称略）を歴代の責任者として、艱難辛苦の未現在のシステムの基礎を構築していただきました。

当初は岩見沢、小樽、札幌、苫小牧、砂川、深川の各市立病院、旭川、札幌の厚生病院、社会保険総合・中央病院、幌南、釧路労災、日鋼記念、溪和会江別、恵み野、恵佑会から合計1755症例をご登録いただきました。平成13年に厚生労働省の「ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理指針」が施行され、以後、平成16、20、25、26年に改定され、平成20年には「臨床研究に関する倫理指針（改正）」、ヘルシンキ宣言（修正）も公布され、より厳格な個人情報、試料の取扱いを求められるようになり、大学の症例のみを収集する体制へと変更

を余儀なくされました。同意取得、試料採取、臨床情報の記録、予後情報の更新等のたゆまぬ努力によって世界屈指のバンクに成長しました。Tissue Bankを利用した研究に関わる方は、先人への感謝と次世代への継承を忘れないでください。

かくしてTissue Bankはわれわれの臨床、研究に定着したのですが、多くの意味で転換期を迎えています。まず、管理法を見直す必要があります。集積症例の凍結組織（癌部、非癌部）、血清（経時採取）、OCT包埋組織、FFPE組織は合計4万アイテムを超え、その所在と残量をアナログで管理するのは既に限界となっています。2次元バーコード付きチューブをラックに収納し、スキャナーにのせるだけでバーコードが読み取られ、ラック番号、ラック内での位置が登録され、試料の臨床情報や残量を入力、登録する半自動の管理システムに転換すべく準備中です。管理の省力化の後には、一部の試料を他施設で管理することによるリスク分散を検討しています。

保有試料の数的優位性の消失に対する対策は喫緊の課題です。多くのバイオバンクが稼働し、中には東北や筑波のように多額の予算が措置され、収集件数が飛躍的に増加しているものもあります。15年以上におよぶ試料収集、管理のシステムを運用してきた先行者のメリットを活かして、他の施設ではできないような次の一手を打たなければ、大規模な予算に庇護された新興のバイオバンクにtop runnerの座を明け渡すこととなります。そこで、2012年度からTissue Bankの収集試料に、切除試料由来の培養細胞を追加しました。癌部、非癌部の初代培養肝細胞、癌細胞、線維芽細胞とそれらを不死化、ダイレクトリプログラミング、iPS化した細胞などをストックするものです。遺伝子背景が異なる多くの細胞種の蓄積を目指すものです。これらの倫理委員会承認を得て、実際に大学院生の鈴木崇史君と共にこれまでに20例余の初代培養を実施し、実現可能性が見えてきました。当面は線維芽細胞と肝細胞を初代培養し、一部を不死化し、種々の基礎研究を行う共同研究機関に供与していく予定です。現在は、肝炎ウイルスの感染肝細胞株の樹立を目指して検討中です。

Tissue Bankの試料を最大限に活かすために、基本的な分子生物学的解析、組織染色、代謝物解析などのインフラを拡充してきました。現在、医局では蛍光3重免疫染色をはじめとする各種の組織染色、qPCR、免疫沈降・ウェスタンブロット、核酸泳動はもとより、ウイルスやプラスミドを用いた

遺伝子導入、CRISPR/Cas9による遺伝子編集（ノックアウト）、si-RNAによるノックダウン、磁気ビーズ抗体を用いた循環腫瘍細胞の単離や類洞内皮細胞の単離、自家蛍光による星細胞のソーティング、ヒト組織からの初代培養、iPS細胞の培養など、外科の研究室としては比較的高度のインフラ、ノウハウが根付いています。このような設備、体制のもと、各研究グループが独自の研究を進めております（詳細は各グループの項参照）。

これまで癌と移植の研究はかけ離れた研究テーマとして、相互に関わることなく進められてきました。臓器保存・修復の研究ではいかに細胞の生存、抗細胞死の機構を増強し、パイアビリティの増強、エネルギー産生と増殖の促進を目指します。一方、癌研究では真逆を目指します。免疫の面でも、移植ではグラフトが免疫担当細胞に攻撃されない方法を模索するのに対して、癌研究では癌細胞を異物と認識させ、免疫担当細胞が効果的に癌細胞を攻撃する環境を探索します。制御したい方向が異なるものの、標的分子は重複しており、解析や評価の手法は共有できるはずなのです。つまり、生存、細胞死、増殖、遊走、オートファジー、エネルギー代謝、炎症、酸化ストレス、レドックス、細胞内Ca²⁺ 関連シグナル等は外科学における普遍的な研究対象であり、これらに関わる蛍光融合タンパク、プローブをプラスミド、各種ウイルスに組み込んで取り揃えました。今後は、これらを導入した各種癌細胞株や切除試料由来の各種細胞も集積していきます。そもそも、切除肝組織は慢性肝炎、脂肪肝に加え、温阻血、細胞の分散後のストレスを負荷し、復温・再酸素化する過酷な系であり、生存細胞を得ることは至難の業です。ここにも、移植医療における臓器保存、酸素化灌流の新技術を応用しており、肝癌、肝炎の病態、治療のための細胞源の作成に多分野の知見が応用されているところに意義があります。

当科の内部から知識、技術の共有を進め、学内外の研究室とも積極的に交流し、知的好奇心、先端技術、臨床応用、のハブとなるよう、今後も切り開いていきたいと考えています。皆様の変わりないご指導、ご鞭撻、愛のある叱咤、ご助力をお願い申し上げます。

■ 研究グループ紹介

移植グループ



深作 慶友 (2007年卒)



巖築 慶一 (2009年卒)

1. 研究テーマと今後の方針

現在、移植グループでは、深作慶友（2007年卒）と巖築慶一（2009年卒）が、移植免疫学に関する基礎・臨床研究を行っています。

①「肝移植後de novo抗HLA抗体（donor specific antibody: DSA）の血管病変に果たす役割の解析」

カルシニューリン阻害薬が実臨床で使用されて以来、肝移植の短期成績は著明に改善しましたが、長期成績は十分とは言えず、グラフト不全の原因とされる慢性拒絶反応の制御は未だ重要課題です。近年慢性拒絶反応の原因として、グラフトに対する抗HLA抗体（DSA：Donor Specific Antibody）の存在が注目され、当科においても肝移植後のDSAとグラフト線維化との関連を報告してきました。現在我々は肝移植後に発生するde novo DSAを患者さんより提供頂き、ヒト血管に対する障害機序の解析を行っています。ヒト血管に生じる病変をin vivoで観察するため、マウスにヒト血管を移植するヒト化マウス血管移植モデルの確立を目指しています。

②「ヒト化マウスを用いた新規免疫モニタリング法の確立」

移植後のレシピエントの免疫状態を正確に把握することは、臓器移植後graft不全の回避や必要以上の免疫抑制剤投与による感染症・発癌などの副作用を防ぐために重要です。現在、臨床血液検査や肝生検、リンパ球混合反応などの免疫モニタリングの報告がありますが、それらはすべて免疫抑制下の患者の免疫状態を観察しており、現在の免疫抑制剤の効果判定はできても、免疫抑制剤を減量、中止した際

にドナー反応が生じてくるのかの判断は難しいと考えられます。我々はヒト化マウスに移植後患者の免疫細胞を再構築し、免疫抑制剤の影響が取り除かれたと考えられる状態で、アロ抗原に対する反応を観察する方法の確立を目指しています。現在、健常者においてヒト化マウスに再構築したヒト細胞のアロ反応の観察に成功し、肝移植後レシピエントにおいても再構築後のアロ反応を観察し、このdataが移植後の免疫モニタリングとして有用かどうかの解析を行っています。この研究で移植後の正確な免疫状態の観察が可能になれば、実臨床において適切な免疫抑制剤の調整が可能になると考えています。

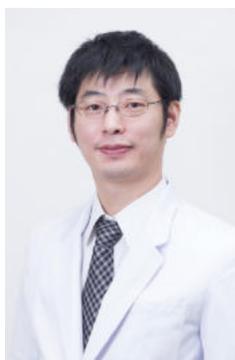
③「早期graft infiltrating cellの機能解析」

臓器移植後早期の免疫応答は未解明な領域が多いのが現状です。例えば、臓器移植において免疫抑制剤を移植直後に開始するよりも3日目から開始する方が、移植臓器の生着率が高くなることが知られていますが、その機序についてははっきりとわかっていません。我々は移植後早期の免疫応答の解明のため、移植後早期graft infiltrating cellの機能解析の手法の確立を目指しています。移植後早期graft infiltrating cellの機能解析は細胞数がごく少数であることから、有効な解析手法は現時点では確立していません。そこで、移植後早期graft infiltrating cellの機能解析を可能とするツールとして、マウス心再移植モデルを考案しました。マウスに移植した心移植片を移植後早期に免疫不全マウスに再移植することで、心移植片へ浸潤した細胞が免疫不全マウスに再構築・増殖し、機能解析が可能になると考えています。現在はマウス心再移植の手技の確立を中心に、モデル動物の確立を目標に実験を行なっています。

保存グループ



深井 原 (1994年卒)



梅本 浩平 (2008年卒)



大谷 晋太郎 (2015年卒)



橋本 咲月 (2015年卒)



中藪 拓哉 (2016年卒)

1. 研究テーマ・概要

深井 原：臓器移植におけるExpanded Criteria Donor臓器の修復法を開発しています。1) 酸素化体外灌流に用いる灌流液の開発、2) 至適灌流法の確立、3) 併用治療の開発、が柱です。1) 2) は梅本先生を中心となって単離ラット肝灌流で検討しています。私自身はほとんど実験できませんでした。3) は各種細胞株を用いて、抗酸化剤、抗酸化タンパク発現、細胞機能増強 (14-3-3ζ発現刺激) 等のコンディショニング法を探索し、普遍性のある興味深い事象を見出しました。今後、臓器レベルの検討に進む予定です。大谷、橋本、中藪が、新規抗酸化物の効果と質量分析イメージング法による評価を進めています (後述)。

日本臓器保存生物医学学会臓器保存プロジェクト委員会の構成メンバーを中心として、北大 (深井)、旭川医大 (松野)、京大 (秦)、国立成育医療センター (絵野沢)、首都大学東京 (小原) と連携して大型の研究費に応募しました。不採択でしたが、all Japanで進んでいく第一歩を踏み出しました。各種臓器の虚血再灌流の機序を質量分析イメージング法で網羅的解析を保健学科 (櫻井、千葉、恵) らと、心臓の修復ランゲンドルフ・灌流を循環器外科 (新宮Dr) と、肝星細胞の初代培養、機能解析を消化器内科 (大西Dr) と立ち上げました。多方面と共同研究が開始されたことに意義があると考えています。

平成28年は1) 2) に関しては自分の予定に対する満足度は0%、3) は50%程度でした。院生の指導の面では、梅本君、大谷君、橋本さんの、中藪君の満足度は本人記載の通りです。平成28年度は大谷君、橋本さん、29年度は梅本君、中藪君が修了予定です。論文作成中の石川君と併せて、結果をだすべく進んでいく予定です。

梅本 浩平：肝移植における脂肪肝ドナーからの臓器提供を

実現するための基礎的研究を行っています。脂肪肝ラットの肝臓を単純浸漬冷保存及び灌流保存し、水素ガスや新規抗酸化剤の併用効果を検証する予定です。今年度は安定した脂肪肝モデルを作製することに成功し、単離肝灌流モデルで positive dataを得ることを目標としていましたが、モデルの安定化に時間がかかり目標を達成できませんでした。今年度の後半になってようやく完成に近づいてきました。今後は脂肪肝モデルの冷保存再灌流 (無治療コントロール) に対して、1) 酸素化体外灌流 (4℃、25℃) の優位性を証明すること、2) 薬物による preconditioning、再灌流時水素投与、新規抗酸化剤投与 (冷保存時、再灌流時) の何れを酸素化体外灌流に併用し、上乘せ効果を証明することを目標として研究に邁進いたします。学位の取得に向け、positive dataが得られ次第論文執筆を進めていこうと思います。

平成28年は単離再灌流モデルの安定化に時間を要し、目標を達成できませんでした。満足度は50%程度です。

大谷 晋太郎：修士課程の大学院生として昨年度からお世話になっています。牡蠣から抽出、同定し化学合成に成功した新規抗酸化物 (保健学科 布田、古川、恵、千葉) による、冷保存再灌流障害軽減効果を検討しています。

今年度はテーマを1つに絞り、in vitro低温酸素化/復温モデルを用いた新規抗酸化物の心筋保護効果について検討を行いました。細胞死・ミトコンドリア障害を抑えることが分かり、作用メカニズムとして、生存カスケードの促進と抗酸化タンパクの発現の増強を確認しました。今後は酸化ストレスの解析を行い、論文化できればと考えています。

大学院卒業のため、今年度で研究が終了します。多くの先生方のお世話になり、非常に充実した研究生活を送りましたこの場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

満足度：現状では、70%程度と考えています。

橋本 咲月：イメージング質量分析 (Imaging Mass Spectrometry; IMS) を用いて、ラット脂肪肝に対する温虚血再灌流障害によって変動する分子の解析を行っています。IMSはスライドガラスに載せた凍結切片を特殊処理後にレーザー照射し、組織から飛び出す陽、陰イオンを質量分析装置で検出して、切片内に存在する分子量の増減を局在と共に評価する方法です。Naive、温虚血45、75分、温虚血後の再灌流1時間、6時間のモデルを正常肝、脂肪肝ラットで作製し、脂肪肝の温虚血再灌流の増悪要因を探索した結果、候補分子を検出することができました。

今春に就職活動を終えた後、IMSや免疫染色の手技に加えて、ラット温虚血再灌流の手術や、摘出した肝組織の評価法としてHPLCを用いたATP定量、ウェスタンブロット等、新たに多くの技術を習得し、実験の幅を広げることができました。

今年度は学会発表に間に合わせることはできなかったことと、修士論文の締め切りに追われていることのために、現在の満足度は60%です。それでもみなさまにお世話になりながら何とかここまで来られたので、あと少しの期間も論文作成に最大限の努力を尽くして満足度を100%の状態にして卒業できるよう奮闘したいと思います。

中藪 拓哉：北海道大学大学院医学研究科修士課程に進学し、今年度からお世話になっています。牡蠣から抽出、同定し、人工合成に成功した新規抗酸化物質（保健学科 布田、古川、恵、千葉）による小腸冷保存再灌流障害軽減効果の検討を行っています。

今年度は、in vitroで新規抗酸化物質の小腸上皮細胞に対する冷保存再灌流障害保護効果の検討を行ってきました。小腸上皮細胞を用いて、冷保存・復温・再灌流モデルにより新規

抗酸化物質の効果を検討し、冷保存時に細胞障害を抑え抗酸化能を発揮することを明らかにしました。来年度は引き続きこの研究を行い、新規抗酸化物質の細胞障害軽減のメカニズムを解明していく予定です。

今年度は、多くの先生達にたくさんのご指導を学ばせていただき、とても良い環境で研究を行うことができ、感謝しております。満足度は現状で70～80%で、来年度学会で発表することができれば100%に近づくと考えております。

〈研究費取得〉

挑戦的萌芽研究（平成27-28年度）（三野和宏；分担）研究経費50万円（総額280万円）遺伝子導入によらない安全な移植片内タンパク機能制御法の開発

基盤研究B、（平成28-31年度）（嶋村剛；分担）H28年度研究経費200万円（総額1350万円）脂肪肝グラフトのミトコンドリア機能と抗酸化能を増強する画期的な肝体外灌流法の開発

若手研究B、（平成28-30年度）（島田慎吾；代表）H28年度研究経費120万円（総額360万円）ラジカル消去と抗酸化酵素誘導による脂肪肝切除後肝再生促進と新規再生予測因子の探索

日本臓器保存生物医学会研究奨励賞、（平成28年度）（島田慎吾；代表）H28年度研究経費100万円（総額100万円）脂肪肝グラフトのEx vivo灌流による複合的コンディショニング法の開発

その他：深井（分担）：ノバルティスファーマ研究助成、ギリアド研究助成、アステラス寄付金
他多数。

腫瘍(肝胆膵)グループ



高橋 秀徳 (2007年卒)

糖鎖プロファイル解析による肝細胞癌の浸潤・転移の検討



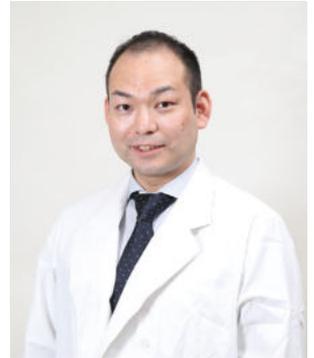
松澤 文彦 (2008年卒)

膵癌細胞株に対する抗メソテリン抗体の有効性の検討



岡田 尚樹 (2009年卒)

Diacylglycerol kinase α 阻害剤を用いた消化器分子標的治療の基礎的研究



鈴木 崇史 (2009年卒)

肝細胞癌の微小環境を標的とした新規治療法の開発

1. 研究テーマ・概要

〈肝細胞癌研究〉

近年ウイルス性肝炎の治療が飛躍的に向上しています。それに伴いB型やC型肝炎に起因する肝細胞癌も減少へ転じると推測されます。これまでウイルス性肝炎を基盤とした肝細胞癌が高い割合を占めておりましたが、今後その割合に変化が生じ肝細胞癌切除後の再発形式も少しずつ変化してくるものと考えられます。しかし現在臨床で肝細胞癌の腫瘍マーカーとしてよく用いられるAFPやAFPレクチン分画、PIVKA-IIは、予後や再発の予測因子としてはまだ十分とは言えません。そこで、当グループはプロテオミクス解析から得られた2つのタンパク (FABP5とAPC結合蛋白EB1) に着目して、肝細胞癌における予後・再発予測因子としての確立およびその機能解析を行っております。

また近年北海道大学大学院先端生命科学研究院の西村紳一郎らによって開発されたグライコプロッティング法により網羅的かつ定量的なグライコミクス (糖鎖) 解析が可能となりました。当グループではこの技術を取り入れ肝細胞癌切除症例の血清を解析したところ2種類の血清糖鎖が肝細胞癌の予後および再発に強く関わっていることを発見し報告しています。現在はこのような糖鎖がどのようにして癌の悪性度と関わっているのかを解明すべく日夜研究を進めています。

ジアシルグリセロールキナーゼ (DGK) はジアシルグリセロール (DG) をリン酸化してホスファチジン酸 (PA) を産生する酵素で、DGKの基質と反応産物であるDGとPAには様々な標的タンパク質があり重要なセカンドメッセンジャーとして機能しているとされております。中でもI型に分類されるDGK α は、肝細胞癌において発現と予後との相関や細胞増殖能との関連が報告されております。さらに、Tリンパ球のanergyを制御するとの報告もみられ、DGK α 阻害剤は癌細胞に対する直接的な増殖抑制、Tリンパ球の活性化による腫瘍

免疫の賦活化といった二方向からの抗腫瘍効果が期待されます。これらを検証すべく、マウスモデルを作成し研究を進めております。

また、肝細胞癌は微小環境と呼ばれる癌周囲組織 (線維芽細胞、免疫細胞、血管内皮細胞など) との相互作用において、癌増殖能・浸潤能・薬剤抵抗性などを獲得していることが判明しました。特に癌部の線維芽細胞は癌関連線維芽細胞 (CAF: Carcinoma Associated Fibroblasts) と呼ばれ、SDF-1/CXCR4/AKT経路、Integrin/FAK経路、CCL2/CCR2経路など、多彩な経路の活性化を介して腫瘍進展を促進させると考えられています。この肝細胞癌における微小環境の中心的役割を果たしているCAFに注目し、癌進展を制御する新規治療法の開発を進めております。

〈膵癌研究〉

近年の研究成果により、癌に対して分子標的薬を含め様々な治療法が開発されていく中で、膵癌は依然として最も予後不良な癌の一つです。当グループではメソテリンという癌細胞表面に発現する糖タンパクに着目し、膵癌、胆管癌といった種々の癌腫における発現の意義についてこれまでに報告を行ってきました。近年メソテリンを標的にした治療の開発が進められており、当グループでも膵癌の腹膜播種を模倣したマウスモデルにおいて抗メソテリン抗体を用いた補助療法の有用性を見出しました。現在そのメカニズムの解明を分子レベルで行っており、癌幹細胞等との関連を解析している段階であります。

2. 今年度の満足度・来年度の抱負・今後の方向性

今年度は高橋秀徳が肝細胞癌での網羅的糖鎖解析によりその機能について解析を行い、本邦の癌研究における主たる学会 (日本外科学会総会、癌学会等) での報告を行いました。

また、日本・モンゴル・韓国の医療における交流、発展を目的とした第8回日本・モンゴル国際消化器癌シンポジウムや、ILCA (International Liver Cancer Association) といった海外での英語発表も行いました。

また、松澤文彦が肝外胆管癌及び胆嚢癌におけるALDH1発現の意義についての検討を行い、国内の学会での報告を行

いました。

来年度も引き続き積極的に学会発表や論文投稿を行っていきたいと思います。また、新たな実験手法や技術に対しても積極的に学習・習得し、今後の研究に活用していきたいと考えております。



腫瘍(消化管)グループ



石黒 友唯 (2008年卒)



豊島 雄二郎 (2008年卒)



木井 修平 (2010年卒)

1. 研究テーマ・概要

現在、消化管Gでは石黒友唯(2008年卒)、豊島雄二郎(2008年卒)、木井修平(2010年卒)の3名が大学院生として各講座でリサーチを行っております。

石黒友唯は、北海道大学大学院医学研究科消化器外科学分野Iにて、胃癌再発においてEMTに注目した循環腫瘍細胞の意義とその精密な検出法の開発をテーマに研究を行っています。腫瘍細胞を検出する方法は今日までは上皮系マーカーに着目したものが主流でありましたが、癌細胞が浸潤・転移する際は上皮間葉転換(epithelial-mesenchymal transition; EMT)を起こすことも知られており、間葉系マーカーにも焦点を当てた検出方法の確立を目指すことでこれまでよりも検出感度の向上を目指しています。

豊島雄二郎は、北海道大学遺伝子病制御研究所免疫機能学分野において、がん微小環境において産生されるIL-6による免疫抑制作用の機序解明と、宿主免疫系の適切な制御による効果的ながん治療への応用に関する研究を行っています。野生型およびIL-6欠損マウスを用いてマウス大腸がん細胞株の脾臓内投与による大腸がん肝転移モデルを作出し、肝臓内の腫瘍細胞および各種免疫担当細胞の解析を行い、担がん微小環境から産生されるIL-6による抗腫瘍免疫の抑制状態に起因する大腸がん肝転移メカニズムの解明を目指しております。

木井修平は、2016年の7月より北海道大学遺伝子病制御研究所免疫機能学分野において、炎症性腸疾患における神経ペプチドシグナルの制御機構解明と疾患治療への応用をテーマに研究を行っています。野生型マウスや各種ノックアウトマウスを使用してDSS(デキストラン硫酸ナトリウム)を用いた大腸炎モデルを作出し、マウスの体重推移や大腸組織における病理組織や免疫担当細胞の解析を行い、炎症性腸疾患の発症メカニズムの解明を行うとともに疾患治療への応用を目指しております。

2. 今年度の満足度・来年度の抱負・今後の方向性

石黒:2014年12月から当科胃癌手術患者を対象として前向き試験を約2年間おこなってきました。術前、術後1週間目、術後1か月目、術後6か月目のtime pointを設定し検体を採取してきました。上皮系マーカーとしてCK(サイトケラチン)、間葉系マーカーとしてNカドヘリンをターゲットに癌細胞を同定しております。CTCを同定することで1) 血行性転移、再発を来す危険性の予測、2) 血行性転移・再発の早期発見、3) CTCの腫瘍学的特性(悪性度等)の把握、4) 補助療法の治療効果モニタリング等にご貢献できる可能性があります。3年間の実験生活が終えようとしていますが、術前にCTCが検出できた群で、術前よりも術後1週間目あるいは1か月目のCTC検出が多かった症例は再発のリスクが高くなるという一つの結論に達しそうな印象ではあります。今後は、論文作成に向けdateをブラッシュアップさせていきたいと思っております。

豊島:マウス大腸がん肝転移モデルにおいて、担がん微小環境下のCD11c陽性樹状細胞がIL-6の主な産生細胞であること、IL-6刺激により大腸がん細胞のアルギナーゼ1遺伝子の発現レベルが上昇すること、アルギナーゼ1遺伝子を過剰発現する大腸がん細胞は肝転移能が亢進することを確認しました。来年度は、IL-6関連因子を基軸とした分子メカニズムの解明をさらに進め、大腸がん肝転移における抗腫瘍免疫応答の制御機構を明らかにし、効果的ながん治療への応用へと発展させたいと考えています。

木井:マウス大腸炎モデルにおいて、STAT1欠損マウスにおいて大腸炎の程度や大腸炎による体重減少の程度の軽減が見られることを確認しました。今後、STAT1と神経ペプチドの関連を解明していくとともに神経ペプチドシグナルおよびSTAT1を介した分子メカニズムについての解析を進め、炎症性腸疾患の新たな治療法の確立を目指していきたいと思っております。

小児グループ



藤好 直 (2009年卒)

1. 研究テーマ・概要

〈肝芽腫におけるDNAメチル化異常の関与〉

DNAはその塩基配列を崩さずに、後天的な修飾を受けることで遺伝子発現を制御するシステムがあります。遺伝子のプロモーター領域のDNAメチル化異常によって癌抑制遺伝子発現が抑制された場合、細胞の癌化や進展を導いてしまいます。

当グループでは、チーフの本多先生が埼玉県立がんセンター研究所で行っていた研究テーマを引き続き北大で行っております。日本小児肝癌スタディグループや神奈川県立こども医療センターからの検体の提供や、札幌医大分子生物学講座などの様々なバックアップを頂き研究を進めております。

現在、肝芽腫の発生・進展に関与するDNAのメチル化異常を解明することを目的としております。網羅的メチル化解析、アレイ解析を元に候補遺伝子を抽出し、臨床検体の実際のメチル化率や遺伝子発現解析などを行っています。

①予後予測との関与、②化学療法抵抗性との関与、③遠隔転移との関与の解析を柱として研究を進めております。

肝芽腫は抗がん剤への反応性が予後に関与しており、特にCDDPへの抵抗性が予後不良に関与しております。私の研究テーマは肝芽腫のCDDP抵抗性に関与するDNAメチル化異常の研究です。

2. 今年度の満足度・来年度の抱負・今後の方向性

満足度：本年より研究に従事し始めたばかりの新参者ですので、右も左もわからない状態でしたが、昨年まで研究されていた湊先生を始め、小児Gの先生方に御指導いただき、徐々に研究を進められております。本年は、3か月間のICUローテーションもあり、満足な研究成果もあげられておりませんが、徐々に軌道に乗ってきているので、来年はさらに飛躍できるように頑張ります。

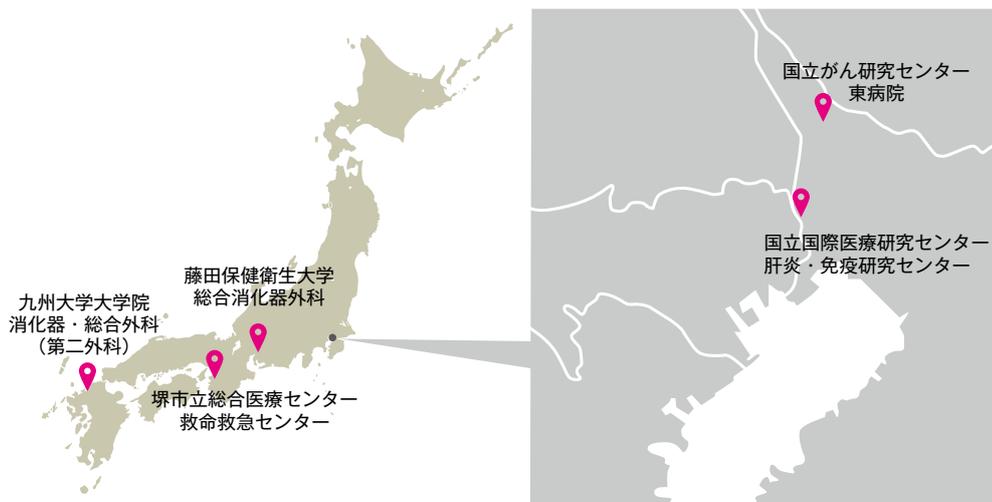
方向性：メチル化ビーズアレイや発現アレイの解析で絞り込んだ、肝芽腫のCDDP抵抗性に関与する候補遺伝子の解明を行っていく予定です。

2016年教室紹介

〈留学生〉

2016年教室紹介 / 留学生

国内留学



藤田保健衛生大学
総合消化器外科 (愛知県)

柴崎 晋 (2015年～)

堺市立総合医療センター
救命救急センター (大阪府)

常俊 雄介 (2015年～)

九州大学大学院
消化器・総合外科 (第二外科) (福岡県)

長津 明久 (2016年～)

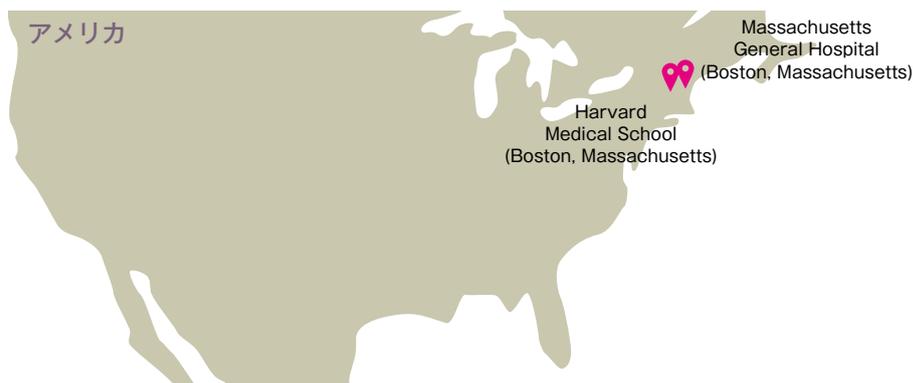
国立国際医療研究センター
肝炎・免疫研究センター (千葉県)

正司 裕隆 (2014年～)

国立がん研究センター
東病院 (千葉県)

今泉 健 (2015年～)

海外留学



Massachusetts
General Hospital,
Surgery Transplant Center,
Harvard Medical School
(Boston, Massachusetts)

大浦 哲 (2013年～)

Massachusetts
General Hospital
(Boston, Massachusetts)

木村 鐘康 (2015年～)



University Medical Center
Groningen
(Groningen, Netherlands)

藤好 真人 (2015年～)



Department of Pathology,
Otago University, NZ

本多 昌平 (2016年～)

(Queensland Institute of
Medical Research, QIMR)
Conjoint Gastroenterology
(Brisbane, Queensland)

川俣 太 (2015年～)

国内留学

柴崎 晋

卒業年：2002年

留学先：藤田保健衛生大学 総合消化器外科

近況報告

こちらでの生活も2年目を迎えました。一番大きな変化は、宇山教授のご厚意により2016年8月より講師に昇任させて頂いたことです。これに伴い、責任ある仕事を任せて頂けるようになり、非常に有意義な時間を過ごさせて頂いております。2015年9月に4つに別れていた消化器外科(上部消化管外科、下部消化管外科、肝脾外科、胆膵外科)がひとつに統合され、総合消化器外科として新たなスタートを切りました。これにより更なる飛躍が見込まれる次第です。

上部消化管外科としても、2014年9月から始まった先進医療も終盤に差し掛かり順調にロボット胃切除をこなしておりますが、2016年5月には、新しく非開胸(経縦隔、経食道裂孔アプローチ)食道亜全摘も開始され、常に進化し続ける環境に身をおける幸せを噛みしめつつ日々過ごすことができている。宇山教授の手術手技のみならず、手術・診療に対する考え方までも広く吸収することができ、自分自身も大きく成長させて頂いていることを実感しております。国内外においても非常に有名でありながら、それでいて我々に対しては非常に気さくであり、そのすごさに尊敬の念を抱いてやみません。このような機会を頂けて、武富先生はじめご協力頂きました皆様にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

名古屋(とはいっても本当に名古屋のはずれですが)での生活にもだいぶ慣れてきました。雪のない冬の生活は物足りなさを感じますが非常に楽です。そして、少し足を伸ばせば動物園、水族館、遊園地、その他の観光地などは豊富にあり、家族共々休日生活も満喫しております。岐阜の実家に立ち寄ることもでき、今更ながらに親孝行もでき、うれしく思います。

環境が大きく変わり大変な部分も多いのですが、外の世界に飛び込むことは想像以上に多くのことが得られる機会でも



宇山教授、石田医局長と私

ありますので、若い先生方も是非とも積極的に修行の旅に出て欲しいと思います。今後の北大消化器外科Iの更なる発展を願って、近況報告の締めとさせて頂きます。

2016年の業績

《学会》

2016.4.14-16 第116回日本外科学会総会(大阪)

(一般演題)

食道胃接合部腺癌に対する腹腔鏡下胃全摘の再建法からみた治療戦略

柴崎晋、須田康一、中村謙一、中内雅也、石川健、古田晋平、角谷慎一、稲葉一樹、石田善敬、宇山一郎

2016.7.5-6 第70回日本食道学会総会(東京)

(ポスター)

当科における食道胃接合部腺癌に対する腹腔鏡下手術治療戦略

柴崎晋、須田康一、中村謙一、中内雅也、石川健、古田晋平、角谷慎一、稲葉一樹、石田善敬、宇山一郎

2016.7.14-16 第71回日本消化器外科学会総会(徳島)

(ポスター)

食道胃接合部腺癌に対する腹腔鏡下胃全摘の再建法からみた治療戦略

柴崎晋、須田康一、中村謙一、中内雅也、石川健、古田晋平、角谷慎一、稲葉一樹、石田善敬、宇山一郎

2016.10.27-28 第46回胃外科・術後障害研究会(米子)

(主題：噴門側胃切除後の再建)

ロボット支援下噴門側胃切除・「観音開き法」食道残胃吻合の有用性

柴崎晋、石田善敬、鶴安浩、砂堀さやか、梅木祐介、後藤愛、戸松真琴、中村謙一、中内雅也、古田晋平、菊地健司、中村哲也、角谷慎一、稲葉一樹、宇山一郎

2016.12.8-10 第29回日本内視鏡外科学会総会(横浜)

(ワークショップ：進行食道胃接合部腺癌(Siewert type II)に対する郭清手技)

Siewert TypeII型食道胃接合部腺癌に対するロボット支援下経裂孔的下縦隔郭清の有用性

柴崎晋、石田善敬、鶴安浩、砂堀さやか、梅木祐介、後藤愛、戸松真琴、中村謙一、中内雅也、古田晋平、菊地健司、中村哲也、角谷慎一、稲葉一樹、宇山一郎

《論文》

Shibasaki S, Homma S, Yoshida T, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A. Epidermal Sutureless Closure of the Umbilical Base Following Laparoscopic Colectomy for Colon Cancer. Indian J Surg 2016 Jun;78(3):203-8.

Shibasaki S, Kawamura H, Homma S, Yoshida T, Takahashi S, Takahashi M, Takahashi N, Taketomi A. A Comparison Between Fentanyl Plus Celecoxib And Epidural Anesthesia for Postoperative Pain Management Following Laparoscopic Gastrectomy. Surg Today 2016 Sep; 46(10):1209-1216.

柴崎晋、須田康一、宇山一朗：「特集」内視鏡外科手術の現状と問題点—上部消化管内視鏡外科手術. Pharma Media 34 巻3号P13-16 (2016.3)

柴崎晋、須田康一、宇山一朗：「特集」必携 腹腔鏡下胃癌手術の完全マスター—ビギナーからエキスパートまで. Part II：その先の課題と努力目標—胃癌に対するロボット支援手術の現状と将来展望. 臨床外科 第71巻6号 P740-47 (2016.6)

柴崎晋、石田善敬、中内雅也、菊地健司、中村哲也、角谷慎一、稲葉一樹、宇山一朗：「特集」エキスパートに聞く！高難度内視鏡外科手術のコツ：食道胃接合部進行腺癌に対する鏡視下根治術—腹腔鏡下噴門側胃切除、経裂孔的縦隔郭清—。消化器外科 39巻11号P1485-1498 (2016.10)

常俊 雄介

卒業年：2003年

留学先：堺市立総合医療センター救命救急センター救急外科

■ 近況報告

平成15年卒の常俊雄介です。2015年4月より堺市立総合医療センターに国内留学させていただき、あっという間に1年半が経過しました。Acute Care Surgery (Trauma+ Emergency surgery+Surgical critical care) を専攻すべく、こちらで勉強させていただいております。

堺市という医療圏90万人を抱えている、大阪南の恵まれた(?) 地理風土条件などの要件が重なり、まだ救命センター開設1年ですが、豊富な外傷症例・手術症例が集まってきております。本年のAcute Care Surgery学会でも発表しましたが、おそらく国内では外傷症例・手術数はかなり上位であると思います。

現在私は、Acute Care Surgeon、救急・外傷外科医として、これまでの私の消化器外科としてのキャリアからも足りない部分である、胸部外科手術の研修をさせていただきつつ、救急診療にも参加するという生活を送っております。激動であった今週末の私の生活について紹介させていただきます。

金曜日：日勤で手術3件。TAPP 2件・臍胸に対する臨時手術（胸腔鏡下臍胸搔爬ドレナージ術）。深夜に後輩からヘルプコール「先生、原因不明の窒息・上気道閉塞患者で挿管できません…」→家から3分で到着。緊急輪状甲状靱帯切開からの緊急気管切開術で救命。咽頭嚢胞の感染・膿瘍形成での気道緊急症例であった。やれやれとAM3:30帰宅。

土曜日：そのまま朝から救命センター日直。アッペ1件のみで救急搬送も少なく、よかったと思った矢先に三次搬送症例が。高所墜落でショックバイタル、多発外傷、CTで外傷性肝損傷、初療室で緊急開腹。1分で大動脈用指クランプ・腹腔



大阪での外科学会で同期集合（左から吉田、野口、私、川村）

内5点パッキング・肝門部プリングルを行い出血コントロール・血圧上昇。よっしゃ！と思うも、再度血圧低下。結局頭部外傷ダメージが甚大にてそのまま御看取りに…。その直後に研修医から、待ってましたと原因不明のイレウスのコンサルト。CTでは珍しい横行結腸軸捻転の所見、腸が異常に長くCF難航すれば手術か…と思うも、内科のDrに見事に整復して頂き安心して帰途へ。へとへとだったが、幸い夜間はno call。

日曜日：病棟回診・翌日の自分の呼吸器外科担当患者の手術準備で終了。On callは上司の白井Drであり、ゆっくり休養。

こんな感じで、日々鍛えられております。もし外傷分野に興味のある先生、研修医などいらっしゃいましたら、当方へご連絡頂けますと幸いです。また来年は札幌で第9回Acute Care Surgery学会も開催されますので、多数のご参加をお願い致します。

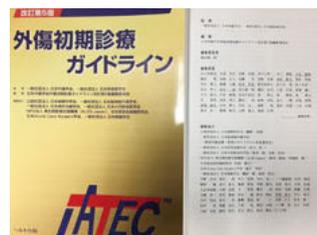
2016年の業績

(全国学会のみ) :

- ・2016.03.03 第52回腹部救急医学会総会 (ビデオワークショップ) : 「当科におけるinterval appendectomyのpitfall」 常俊雄介、白井章浩、清水克修、川田真大、蛭原健、尾崎貴洋、天野浩司、中田康城、横田順一郎
- ・2016.04.14 第116回日本外科学会総会 (ポスター) : 「complicated appendicitisに対する治療戦略」常俊雄介、白井章浩、清水克修、加藤文崇、蛭原健、尾崎貴洋、天野浩司、中田康城、横田順一郎
- ・2016.07.14 第71回日本消化器外科学会総会 (ポスター) : 「当科におけるOpen Abdominal Management-特に内因性疾患への応用について」 常俊雄介、白井章浩、川田真大、蛭原健、尾崎貴洋、天野浩司、中田康城、横田順一郎

- ・2016.09.24 第8回日本Acute Care Surgery学会学術集会 (シンポジウム) : 「外科医と救急医の混成teamからなるAcute Care Surgeryの実践」 常俊雄介、白井章浩、清水克修、山田元彦、川田真大、蛭原健、加藤文崇、尾崎貴洋、天野浩司、中田康城、横田順一郎
- ・2016.12.09 第29回日本内視鏡外科学会総会 (ポスター) : 「腹部刺創に対する異なるアプローチによる腹腔鏡下手術」 常俊雄介、白井章浩、清水克修、山田元彦、川田真大、蛭原健、天野浩司、中田康城、横田順一郎

* 外傷初期診療ガイドライン改定第五版 編集協力



JATEC教科書に名前載りました!

長津 明久

卒業年：2005年

留学先：九州大学大学院 消化器・総合外科 (第二外科)

近況報告



武富先生のご推薦をいただき、2016年4月から国内留学で九州大学の第二外科肝臓・移植グループで研修しております。今回、北海道以外に居を構えるのは初めての体験となりましたが、福岡は非常に活気のある町で町の規模も札幌と近く、非常に過ごしやすい土地柄です。

北大から初の国内留学生ということで、かなり緊張して臨むことになりましたが、暖かく迎えていただけて非常に有意義な研修生活を送っております。術者として肝切除の症例のみならず、肝移植も相当数経験でき、外科医として大きく成長できているように感じます。しかし、私自身の課題はまだ多く、特にアカデミックな点でこれから学ぶべきことがあると考えています。

貴重な機会ですので少しでも多くのものを吸収して糧にしようと思います。また北海道に戻りました際にはご指導・ご鞭撻の程よろしく願いいたします。



正司 裕隆

卒業年：2007年

留学先：国立国際医療研究センター 肝炎・免疫研究センター

■ 近況報告



平成19年卒業の正司裕隆です。私は平成26年4月より千葉県にある国立国際医療研究センター・肝炎免疫研究センターで研究に従事させていただいております。当センターには肝疾患部、肝炎情報センター部、免疫病理部、免疫制御部、消化器疾患部と5つの部門があり、私は肝疾患部に所属しております。肝疾患部では肝炎に対する診断、治療、予防に貢献することにより肝炎および肝がんの撲滅と免疫疾患対策を目指しています。昨年、当疾患研究部のホームページがリニューアルされました。さらに今年はFacebookも立ち上げられ、最近の教室の研究成果やイベントなどが非常にまめに更新されておりますので、ご興味がございましたら一度お立ち寄りいただけるとセンターの雰囲気を知っていただくことができるかと思います。

私の研究面についてですが、私は前センター長（現ゲノム医科学プロジェクト長）の溝上雅史先生と現センター長の考藤達哉先生の下で血管新生と肝線維化領域の勉強をさせていただいております。肝線維化領域の研究テーマではマクロファージ関連因子に着目した研究を行っております。Interleukin-34 (IL-34) は単球をマクロファージへと分化させ、単球系細胞の生存に欠かせない因子として報告されています。このIL-34が非アルコール性脂肪性肝疾患患者において線維化のstagingと相関し、良好な新規肝線維化バイオマーカーとなることがわかりました。センターの先生方のご尽力により、本年度、本研究内容をまとめてScientific Reportsに掲載させていただくことができました。また、何度か国際発表の機会をいただき、貴重な経験を積ませていただいております。まだまだ知らないことが多く未熟な私ですが、研究領域において経験豊富な先生方から日々新しい知識を教えていただき今後も精進してまいりたいと思っております。

最後になりましたが、このような素晴らしい環境で研究をさせていただく機会を与えてくださった武富教授、消化器外科学分野 I の先生方に厚く御礼申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

■ 2015-2016年業績

《国内学会発表》

1. 正司裕隆, 考藤達哉, 間野洋平, 青木孝彦, 由雄祥代, 杉山真也, 武富紹信, 溝上雅史: 肝細胞癌における血管新生関連細胞 (Tie2-expressing monocytes) 誘導因子の探索.

第51回肝臓学会総会 熊本 2015. 5.21-22

2. 正司裕隆, 由雄祥代, 間野洋平, 熊谷恵理奈, 土肥弘義, 杉山真也, 是永匡紹, 武富紹信, 溝上雅史, 考藤達哉: 非アルコール性脂肪性肝疾患におけるIL-34 新規マクロファージ関連肝線維化マーカー. 第52回日本肝臓学会総会 千葉 2016. 5.19-20
3. 正司裕隆, 溝上雅史, 考藤達哉
非アルコール性脂肪性肝疾患におけるマクロファージ関連肝線維化マーカー IL-34の検討. 第24回日本消化器関連学会週間 (Japan Digestive Disease Week; JDDW) 神戸 2016.11/3-6

《国際学会発表》

1. Hiroataka Shoji, Tatsuya Kanto, Sachiyo Yoshio, Yohei Mano, Masaya Sugiyama, Yoshihiko Aoki, Akinobu Taketomi, Masashi Mizokami. Comprehensive analyses of serum biomarkers associating with the increase of pro-angiogenic Tie2-expressing monocytes in patients with hepatocellular carcinoma. American Association for Cancer Research (AACR). Philadelphia, USA, 2015. 4.18-22
2. Hiroataka Shoji, Sachiyo Yoshio, Yohei Mano, Masaya Sugiyama, Yoshihiko Aoki, Norio Itokawa, Masanori Atsukawa, Yousuke Osawa, Kiminori Kimura, Akinobu Taketomi, Masashi Mizokami and Tatsuya Kanto. Pro-angiogenic Tie2-expressing monocytes/TEMs as a biomarker of the response to sorafenib in patients with advanced hepatocellular carcinoma. The Liver Meeting 2015: The 66th Annual Meeting of American Association for the Study of Liver Diseases (AASLD). San Francisco, USA, 2015. 11.7-11
3. Hiroataka Shoji, Sachiyo Yoshio, Yohei Mano, Erina Kumagai, Hiroyoshi Doi, Masaya Sugiyama, Yosuke Osawa, Kiminori Kimura, Taeang Arai, Norio Itokawa, Masanori Atsukawa, Moto Fukai, Akinobu Taketomi, Masashi Mizokami and Tatsuya Kanto
Pro-angiogenic Tie2-expressing monocytes/TEMs as a biomarker of the response to sorafenib in

patients with advanced hepatocellular carcinoma. Single Topic Conference (STC) Kanazawa, Japan, 2016. 9.22-23

4. Hiroataka Shoji, Sachiyo Yoshio, Yohei Mano, Erina Kumagai, Hiroyoshi Doi, Masaya Sugiyama, Masaaki Korenaga, Taeng Arai, Norio Itokawa, Masanori Atsukawa, Hiroshi Aikata, Hideyuki Hyogo, Kazuaki Chayama, Tomohiko Ohashi, Kiyoaki Ito, Masashi Yoneda, Yuichi Nozaki, Takumi Kawaguchi, Takuji Torimura, Masanori Abe, Yoichi Hiasa, Moto Fukai, Toshiya Kamiyama, Akinobu Taketomi, Masashi Mizokami and Tatsuya Kanto. Interleukin-34 as a fibroblast-derived marker of liver fibrosis in patients with non-alcoholic fatty liver disease. The Liver Meeting 2016: The 67th Annual Meeting of American Association for the Study of Liver Diseases (AASLD). Boston, USA, 2016.11/11-15

《原著論文》

1. Yoshio S, Sugiyama M, Shoji H, Mano Y, Mita E, Okamoto T, Matsuura Y, Okuno A, Takikawa O, Mizokami M, Kanto T: Indoleamine-2,3-dioxygenase as an effector and an indicator of protective immune responses in patients with acute hepatitis B. *Hepatology*. 63(1):83-94, 2016 Jan.
2. Shoji H, Yoshio S, Mano Y, Kumagai E, Sugiyama M, Korenaga M, Arai T, Itokawa N, Atsukawa M, Aikata H, Hyogo H, Chayama K, Ohashi T, Ito K, Yoneda M, Nozaki Y, Kawaguchi T, Torimura T, Abe M, Hiasa Y, Fukai M, Kamiyama T, Taketomi A, Mizokami M, Kanto T. Interleukin-34 as a fibroblast-derived marker of liver fibrosis in patients with non-alcoholic fatty liver disease. *Sci Rep*. 6:28814, 2016
3. Kumagai E, Mano Y, Yoshio S, Shoji H, Sugiyama M, Korenaga M, Ishida T, Arai T, Itokawa N, Atsukawa M, Hyogo H, Chayama K, Ohashi T, Ito K, Yoneda M, Kawaguchi T, Torimura T, Nozaki Y, Watanabe S, Mizokami M, and Kanto T. Serum YKL-40 as a marker of liver fibrosis in patients with non-alcoholic fatty liver disease. *Sci Rep* 6:35282, 2016

今泉 健

卒業年：2010年

留学先：国立がん研究センター東病院 大腸外科

近況報告



今年度より、千葉県柏市にある国立がん研究センター東病院の大腸外科レジデントとして研修をさせて頂いております今泉です。当施設の特徴は、年間200件をこえる直腸癌手術があり、内肛門括約筋切除術（ISR）や下部進行直腸癌に対する側方リンパ節郭清などの高難度手術が日常的に行われております。また、腹腔鏡手術の教育には非常に重きが置かれており、毎朝、前日の手術ビデオの編集をレジデントが行い、スタッフを含めてdiscussionするmorning conferenceが行われています。合格率30%前後の難関な技術認定医取得ですが、当科受験者の合格率は100%という素晴らしい成績を残しており、そのための教育環境が充実していると感じています。ただ、長い手術の後のビデオ編集では日が変わることも、、、自分と同世代のレジデントばかりなので、助け合い、時には症例を取り合いながら、切磋琢磨して研修を行っております。

研修が始まったばかりでまだまだこれからですが、素晴らしい環境で少しでも多くのことを吸収し医局に還元できるものを学んでいきたいと思っております。最後になりましたが、研修の機会を与えてくださった武富教授、消化器外科Iの先生方に感謝申し上げます。今後ともご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

2015-2016年業績

《論文》

1. Imaizumi K, Homma S, Yoshida T, Shimokuni T, Sakihama H, Takahashi N, Kawamura H, Takakuwa E, Taketomi A. : Solitary left axillary lymph node metastasis after curative resection of carcinoma at the colostomy site: a case report. *Surg Case Rep*. 2016 Dec;2(1):99.
2. 今泉 健, 本間 重紀, 吉田 雅, 下國 達志, 崎浜 秀康, 高橋 典彦, 川村 秀樹, 畑中 佳奈子, 武富 紹信: 横行結腸mixed adenoneuroendocrine carcinoma

の長期無再発生存の1例. 日本消化器外科学会雑誌 49, 1045-1052, 2016

3. 今泉 健, 松山 貴俊, 中田 拓也, 村田 知洋, 吉村 哲規, 鶴田 耕二, 加藤 弘之: Epstein-Barr virus 感染を伴う肝炎性偽腫瘍の1例. 日本臨床外科学会雑誌 77, 423-429, 2016

《学会発表》

1. 今泉 健, 細田 充主, 岡田 宏美, 三橋 智子, 石田 直子, 市之川 一臣, 馬場 基, 武富 紹信, 山下 啓子: 乳癌術後残存乳房照射後に発生したRadiation-induced sarcomaの1例 第103回北海道外科学会, 札幌, 2015
2. 今泉 健, 本間 重紀, 吉田 雅, 下國 達志, 崎浜 秀康, 高橋 典彦, 川村 秀樹, 武富 紹信: 家族性大腸腺腫症の術後30年目に発生した結腸人工肛門部癌の一例 第70回日本大腸肛門病学会総会, 名古屋, 2015
3. 今泉 健, 本間 重紀, 吉田 雅, 下國 達志, 崎浜 秀康, 高橋 典彦, 川村 秀樹, 武富 紹信: 長期生存し得た横行結腸内分泌細胞癌の一切除例 第77回日本臨床外科学会総会, 福岡, 2015

4. 今泉 健, 本間 重紀, 吉田 雅, 下國 達志, 崎浜 秀康, 高橋 典彦, 川村 秀樹, 武富 紹信: 胃大腸重複癌に対してReduced port surgeryでの同時切除6例の検討 第28回日本内視鏡外科学会総会, 大阪, 2015
5. 今泉 健, 神山 俊哉, 横尾 英樹, 折茂 達也, 若山 顕治, 島田 慎吾, 敦賀 陽介, 蒲池 浩文, 武富 紹信: 術前診断困難であった巨大な細胆管細胞癌の一切除例 第104回北海道外科学会, 札幌, 2016
6. 今泉 健, 腰塚 靖之, 財津 雅昭, 川村 典生, 後藤 了一, 山下 健一郎, 武富 紹信, 嶋村 剛: 肝移植後肝細胞癌再発症例における再発後予後因子の検討 第116回日本外科学会総会, 大阪, 2016
7. 今泉 健, 池田 公治, 塚田 祐一郎, 佐々木 剛志, 西澤 祐吏, 伊藤 雅昭: 経腔的標本摘出法を併用しNeedlescopic Surgeryを行った大腸癌2例の報告 5th Reduced Port Surgery Forum, 大阪, 2016
8. 今泉 健, 西澤 祐吏, 池田 公治, 塚田 祐一郎, 佐々木 剛志, 伊藤 雅昭: 腹会陰式直腸切断術における術後会陰創部関連感染のリスク因子の検討 第78回日本臨床外科学会総会, 品川, 2016

海外留学

本多 昌平 卒業年: 1998年
留学先: Department of Pathology, Otago University, NZ

2016年10月中旬よりニュージーランドのダニーデンにあるオタゴ大学に来ております。肝芽腫のmicroRNA発現解析をProfessor Michael Eccles のチームと共同研究する目的です。当科にて行っている網羅的メチル化解析とmicroRNA発現解析を組み合わせることによって、肝芽腫の新規予後予測マーカーおよびターゲット治療に結び付く研究に仕上げることを目標としております。

ダニーデンはニュージーランドの南島でも特に南側に位置しており、南極から吹く南風(!)が夏でも冷たく感じられます。環境は北海道の牧歌的な風景に似ており、まさに羊だらけの平和な空間です。日本での大学勤務時とは完全に異なる時間の進みの中、世界を見渡しながら自分を見つめ直すのに貴重な時間となることを自覚しつつ、easy-goingで楽しみたいと考えています。支えて下さっている方々に心より感謝するばかりです。



2015-2016年業績

《論文》

- ・2016年
- 1. Honda S, Minato M, Miyagi H, Okada H, Taketomi A. Anal canal duplication presenting with abscess formation. Pediatrics International 2016 in press
- 2. Miyagi H, Honda S, Minato M, Okada T, Hatanaka

KC, Taketomi A. Impact of umbilical polyp resection: A report and literature review. *Afr J Pediatr Surg.* 2016; 13: 196-198. (査読有り)

- Miyagi H, Honda S, Minato M, Okada T, Taketomi A. Factors associated with the risk of persistent gastrostomy site infection following laparoscopic or open Nissen fundoplication. *Afr J Pediatr Surg.* 2016, in press (査読有り)
- Honda S, Minato M, Suzuki H, Fujiyoshi M, Miyagi H, Haruta M, Kaneko Y, Hatanaka KC, Hiyama E, Kamijo T, Okada T, Taketomi A. Clinical prognostic value of DNA methylation in hepatoblastoma: Four novel tumor suppressor candidates. *Cancer Sci.* 2016; 107: 812-819. (査読有り)
- Yamaguchi H, Kosugiyama K, Honda S, Tadao O, Taketomi A, Iwata A. Down Syndrome with Patent Ductus Venosus, Pancreaticobiliary Maljunction, and Paucity of Interlobular Bile Ducts. *Indian Journal of Pediatrics* 2016;83:78-80.

・2015年

- Uzuki Y, Cho K, Honda S, Fujisawa S, Taketomi A, Morikawa M, Minakami H. Atypical Double-Bubble in MRI of a Fetus with Double Atresia Involving Esophagus and Jejunum. *J Neonatal Biol* 2015;4(2):178
- Kondo T, Honda S, Minato M, Fujisawa S, Miyagi H, Cho K, Minakami H, Taketomi A. A preoperative diagnostic challenge of a long overlapping upper pouch with distal tracheoesophageal fistula. *J Neonatal Biol* 2015;4:4
- 近藤亨史、本多昌平、宮岡陽一、湊 雅嗣、岡田忠雄、武富紹信. 拡張胆管が門脈を圧排・閉塞し門脈圧亢進症を呈し先天性胆道拡張症. *小児外科* 47(11):2015
- Kato K, Honda S, Minato M, Miyagi H, Okada T, Cho K, Taketomi A. Torsion of an accessory spleen: A rare case and review of the literature. *Journal of Clinical Case Reports* 2015 5:11

《学会》

・2016年

- 低位鎖肛の稀な病型：Anopenile urethral fistulaと

Perineal canal

本多昌平、宮城久之、湊 雅嗣、武富紹信
日本小児科学会北海道地方会第295回例会
2016.2.14 (北大医学部フラテ会館)

- 腸管延長術 (STEP) 施行後に多発小腸潰瘍による下血を発症した1例
本多昌平、宮城久之、湊 雅嗣、嶋村 剛、武富紹信
第28回日本小腸移植研究会
2016.3.12 (東京国際交流館)
- 先天性門脈体循環シャントに対する外科治療戦略
本多昌平、宮城久之、湊 雅嗣、武富紹信
第116回日本外科学会定期学術集会
2016.4.15 (大阪国際会議場)
- 膿瘍形成した肛門管重複症の1例
A case of anal canal duplication complicated with abscess formation
本多昌平、宮城久之、湊 雅嗣、奥村一慶、河北一誠、武富紹信
第53回日本小児外科学会学術集会 2016.5.24 (福岡)
(poster)
- Aberrant DNA methylation related to chemoresistance in hepatoblastomas
Shohei Honda¹, Masashi Minato¹, Hisayuki Miyagi¹, Issei Kawakita¹, Kazuyoshi Okumura¹, Eiso Hiyama², Akinobu Taketomi¹
¹Department of Gastroenterological Surgery I, Hokkaido University Graduate School of Medicine
²Japanese Study Group for Pediatric Liver Tumor (JPLT)
The 24th Congress of the Asian Association of Pediatric Surgeons 2016.5.26 (Fukuoka)
(oral presentation)

・2015年

- 本多昌平 Laparoscopic percutaneous extraperitoneal closure method
(LPEC法) ~最近の知見および再発予防のために~ 日本外科学会 北海道地区生涯教育セミナー 2015/1/10
- 本多昌平, 藤澤空彦, 湊 雅嗣, 武富紹信 原因不明のS状結腸狭窄を認めた乳児の2例 第92回日本小児外科学会北海道地方会 150314
- 本多昌平、湊 雅嗣、藤澤空彦、岡田忠雄、武富紹信

胆道閉鎖症に対するMRCPと腹部超音波検査を併用した非侵襲的診断法 第115回日本外科学会定期学術集会(名古屋) 150418

9. 本多昌平、藤澤空彦、湊 雅嗣、岡田忠雄、武富紹信
小腸ストーマをもつ短腸症候群に対し再STEPを施行することでQOLが改善した1幼児例(続報) 第52回日本小児外科学会総会(神戸) 150528

10. Shohei Honda, Masashi Minato, Hisayuki Miyagi, Eiso Hiyama, Akinobu Taketomi Translational implication of four aberrantly methylated genes in

hepatoblastoma

3rd International Conference of Federatin of Asian Clinical Oncology (FACO) International Workshop 5 第53回日本癌治療学会(京都) 151029

11. 本多昌平、湊 雅嗣、宮城久之、檜山英三、武富紹信
肝芽腫の化学療法抵抗性に関わるDNAメチル化異常解析 第57回日本小児血液がん学会(甲府) 151126



大浦 哲

卒業年: 2001年

留学先: Instructor in Surgery, Massachusetts General Hospital, Center for Transplantation Sciences, Harvard Medical School, Boston, USA

近況報告



同門会の皆様、私は2001年卒業の大浦哲です。北海道大学病院・函館市立病院・帯広協会病院・俱知安厚生病院・足寄町立病院・天使病院で勤務させて頂き、学位取得後の2012年に渡米後Research Fellow、2015年からはInstructor

in SurgeryとしてMassachusetts General Hospital, Center for Transplantation Sciencesに勤務しております。私が移植、特に術後免疫抑制剤が必要で無くなる免疫寛容を自分の一生の仕事にしようと思ったのは、レジデント時代の二つの経験からでした。一つは、レジデント1年目に、Beth Israel Deaconess Medical Centerに留学直前の山下健一郎先生から伺った移植免疫学の話です。移植免疫学に関してBench to Bedの重要性と、免疫抑制剤が必要で無くなる夢の移植医療について先生の大学病院当直中に判り易く説明して頂きました。もう一つは、レジデント5年目に神山俊哉先生のご厚意で(笑)6か月間のICU勤務をさせて頂いた事でした。その際、免疫抑制剤の功罪を実際の患者で確認する事が出来ました。

私の勤務先は、Dr. Cosimi が前臨床試験としてカニクイザルを用いた移植実験を1980年代に確立、Dr. Kawai が1990年代に参加し腎移植にドナー骨髄移植を併用し、術後一時的な免疫学的キメラ状態をレシピエント体内で誘導し免疫抑制剤から離脱できる免疫寛容をカニクイザルで可能にしました。このアプローチは臨床の生体腎移植患者に適応され、最長14年間免疫抑制剤から離脱しています(Kawai T. New Engl J Med: 2008, 2013.)。これら免疫抑制剤を内服していない患者達から得た情報は移植免疫学のみならず、免疫抑

制剤の内服していない事により高血圧・糖尿病・高脂血症・感染症等の免疫抑制剤関連の副作用が見られず、それにより移植患者にかかわる医療費の抑制が通常の免疫抑制剤を内服している患者達と比較して明確に成りました。現在、米国内ではMGH, Stanford, Northwesternの3施設で生体腎移植に骨髄移植を併用し、プロトコルの違いによりキメラ状態の違いは有りますが、免疫寛容を誘導する試験が進行し、学会・論文・Grant等で切磋琢磨しております。しかしながら、免疫寛容を臨床で誘導出来ているのは生体腎移植患者に限られているので、現在はより普遍的(生体移植のみならず脳死移植においても)に臓器・細胞移植の種類に関わらず免疫寛容を誘導可能にする為に「時代の批判に耐え得る概念の確立」を目標に日々研鑽しております。MGHのMixed chimerism approachはカニクイザルを用いた前臨床試験を基に発展させて来ました。ClinicalとPre-clinicalで発展・疑問を行き来している点が他の二施設との大きな違いであります。このシステムが成り立っている点がMGHの最大の魅力だと思えます。

MGHの大動物を用いた移植実験はCenter内で、腹部外科・胸部外科が共同し肝臓・腎臓・脾臓・心臓・肺移植をモデルに、免疫寛容の誘導を目指しております。種々の臓器・細胞移植を扱うことにより、臓器・細胞特異的免疫寛容誘導の研究も進行しております。Center内には約10人のPI(Principal Investigator)が存在し、PIはそれぞれのTeamを統括し、研究の方向性を明確にして移植医療の進歩・論文作成・Grant獲得等を目指します。私の仕事に関しては、2015年より、自分の所属するTeam内での自分の研究活動のみならず、Transplant Centerに世界各国から来る国籍・人種・宗教・年齢・性別の異なるResearch Fellow達に対する教員としての指導が新たな仕事となり、言語の壁を超えた教育の難しさを実感しております。

生活面では、ボストンでの生活に慣れたおかげで、充実した日々を過ごしております。もしアメリカ東岸にいらっしゃる事が有れば連絡を頂けると幸いです。特に初夏から秋にかけてのNew England地方は素晴らしく、環境名所も多数存在します。季節によってお勧めのレストランか自宅でのBBQに招待させていただきます。また、北大第一外科の関係者のみならず、移植医療やボストンに興味がある方は連絡を頂けると出来る限りの事をサポートさせていただきます。MGHの移植臨床部門では北大第一外科出身の木村鐘康先生が活躍していますので、移植医療の基礎研究・臨床の両方を見るには大変良い環境だと思います。

最後に、外科医不足の中、海外で働かせて頂ける自分の立場を自覚し、背中を押して頂いた藤堂省教授・山下健一郎教授をはじめ、お世話になっている同門の先生方に深く感謝しております。

■ 2015-2016年業績

Published Work in Bibliography

1. Lei J, Kim JI, Shi S, Zhang X, Machaidze Z, Lee S, Schuetz C, Martins PN, Oura T, Farkash EA, Rosales IA, Smith RN, Stott R, Lee KM, Soohoo J, Boskovic S, Cappetta K, Nadazdin OM, Yamada Y, Yeh H, Kawai T, Sachs DH, Benichou G, Markmann JF. Pilot Study Evaluating Regulatory T Cell-Promoting Immunosuppression and Nonimmunogenic Donor Antigen Delivery in a Nonhuman Primate Islet Allograft Transplantation Model. *Am J Transplant*. 2015; 15(10): 2739-49.
2. Oura T, Hotta K, Cosimi AB, Kawai T. Transient mixed chimerism for allograft tolerance. *Chimerism*. 2015; 6(1-2): 21-6.

3. Oura T, Ko DS, Boskovic S, O'Neil JJ, Chipashvili V, Koulmanda M, Hotta K, Kawai K, Nadazdin O, Smith RN, Cosimi AB, Kawai T. Kidney Versus Islet Allograft Survival After Induction of Mixed Chimerism With Combined Donor Bone Marrow Transplantation. *Cell Transplant*. 2016; 25(7): 1331-41.
4. Todo S, Yamashita K, Goto R, Zaitzu M, Nagatsu A, Oura T, Watanabe M, Aoyagi T, Suzuki T, Shimamura T, Kamiyama T, Sato N, Sugita J, Hatanaka K, Bashuda H, Habu S, Demetris AJ, Okumura K. *Hepatology*. 2016; 64(2): 632-43.
5. Hotta K, Aoyama A, Oura T, Yamada Y, Tonsho M, Huh KH, Kawai K, Schoenfeld D, Allan JS, Madsen JC, Benichou G, Smith RN, Colvin RB, Sachs DH, Cosimi AB, Kawai T. Induced regulatory T cells in allograft tolerance via transient mixed chimerism. *JCI Insight*. 2016; 1(10).
6. Oura T, Hotta K, Lei J, Markmann J, Rosales I, Dehnadi A, Kawai K, Ndishabandi D, Smith RN, Cosimi AB, Kawai T. Immunosuppression With CD40 Costimulatory Blockade Plus Rapamycin for Simultaneous Islet-Kidney Transplantation in Nonhuman Primates. *Am J Transplant*. 2016 Aug 8.

Research Support

1. MGH Department of Surgery 2016 Shore Fellowship Award

木村 鐘康

卒業年：2003年
留学先：MGH

■ 近況報告



2015年8月より米国Massachusetts General HospitalでAbdominal Organ Transplant SurgeryのClinical Fellowとして勤務しています。

この度医局年報に投稿する機会をいただきましたので、昨年に引き続き近況報告をさせていただきます。

現在Clinical Fellowとしての仕事

が2年目になり、かなり職場に慣れてきたと実感しています。

1年目は英語力の問題もあり、他のスタッフからの信頼を勝ち得るのに苦労しましたが、とにかく真面目に一生懸命働くことで、3か月程でようやく適応し仕事も任されるようになりました。まだまだ英語力は不十分と感じていますが、仕事に使う会話は問題なくこなせるようにもなりました。

1年目の仕事は主に病棟管理、腎移植レシピエント手術、脳死ドナー手術でしたが、2年目になり仕事内容が大きく変わりました。病棟管理が無くなり、ドナー手術、肝移植にはすべて入り、残りの時間をリサーチに充てています。手術に

関しては、日本とは違い基本的にFellowがほぼ術者となり、Staff Surgeonが前立ちとなります。脳死、もしくは心停止ドナー手術は完全にFellowが責任を持ち、レジデントや医学生と一緒にDonor hospitalに行き手術を行います。ドナー手術だけで年間約100件、肝移植レシピエント手術で年間約80件ありますので、手術の経験数としては十分ではないかと感じています。

リサーチはマウスを使ったRegulatory B cellとToleranceメカニズムの解明をテーマにかなりBasicなStudyを行っています。リサーチに充てられる時間は限られており、いつ移植が入るかわからないので予定を立てるのも難しい状況ですが、ピッツバーグ留学時代の経験を生かして何とか1年で結果を残したいと考えています。

日々多忙でストレスもありますが、日本ではなかなかできないような経験を多くさせていただいており、大変充実した生活を送らせていただいています。

2年間のフェローが終わった後も、まだこちらで学ぶべきことがたくさんあると感じておりますので、このままもう少しばかり米国に残るつもりでおります。

来年以降はフェローが終わり指導医となる予定ですので、責任も増え仕事内容もまた大きく変わると思いますが、いろいろな意味で完全にindependent surgeonになれるまではもう少し努力し精進したいと考えております。

ボストンは観光にも非常にいい街ですので、もし学会や見学等で来られる機会がありましたら是非声をおかけください。リサーチでご活躍中の大浦先生とともにご案内致します。

最後にこのような留学の機会を与えて下さりました武富教授、同門の先生方にこの場を借りて心からお礼申し上げます。

■ 2015-2016年業績

1. Orthotopic mouse liver transplantation to study

liver biology and allograft tolerance.

Yokota S, Ueki S, Ono Y, Kasahara N, Pérez-Gutiérrez A, Kimura S, Yoshida O, Murase N, Yasuda Y, Geller DA, Thomson AW.

Nat Protoc. 2016 Jul;11(7):1163-74. doi: 10.1038/nprot.2016.073.

2. Contribution of alloantigens to hepatic ischemia/reperfusion injury: Roles of natural killer cells and innate immune recognition of nonself. Kimura S, Ozaki KS, Ueki S, Zhang M, Yokota S, Stolz DB, Geller DA, Murase N. Liver Transpl. 2016 Jan;22(1):80-90. doi: 10.1002/lt.24330.
3. IRF-1 promotes liver transplant ischemia/reperfusion injury via hepatocyte IL-15/IL-15R α production. Yokota S, Yoshida O, Dou L, Spadaro AV, Isse K, Ross MA, Stolz DB, Kimura S, Du Q, Demetris AJ, Thomson AW, Geller DA. J Immunol. 2015 Jun 15;194(12):6045-56. doi: 10.4049/jimmunol.1402505.
4. CD39 deficiency in murine liver allografts promotes inflammatory injury and immune-mediated rejection. Yoshida O, Dou L, Kimura S, Yokota S, Isse K, Robson SC, Geller DA, Thomson AW. Transpl Immunol. 2015 Mar;32(2):76-83. doi: 10.1016/j.trim.2015.01.003.

藤好 真人

卒業年：2003年

留学先：Universitair Medisch Centrum Groningen

■ 近況報告

オランダのUniversitair Medisch Centrum Groningen (UMCG) の肝胆膵・移植外科に留学させていただいております平成15年卒の藤好真人です。

UMCGはヨーロッパでも有数の移植センターであると同時に、臓器移植における機械灌流法研究のメッカの一つでもあり、私は現在Robert Porte教授のメンターシップの下、臨床フェローとして勤務しながら臓器保存および機械灌流の研究を行っております。

研究面では、ラット肝移植モデルに胆汁のサンプリング過



程を導入することにより、臓器保存による肝実質傷害だけではなく、再灌流後の肝細胞および胆管上皮細胞の機能を評価

できる実験系を構築し、このモデルを用いて新規臓器保存法の基礎研究を行っております。留学先で新たに実験系を立ち上げる必要があったことに加え、オランダの動物実験のレギュレーションは厳格であるため、ここまでくるのに長い時間を要してしまいました。

これらの基礎研究に加え、機械灌流法の臨床RCTのメンバーにも加わっております。オランダでは心停止後ドナー（DCD）を用いた肝移植の比率が世界で最も高く、UMCGではDCD肝移植における重要な合併症であるNon-anastomotic biliary stricture (NAS) を克服するため、Hypothermic oxygenated dual machine perfusion (DHOPE) の多施設RCTを行っております。Liver assistを用いた臨床機械灌流を安全に行うにはコツやトラブルシューティングが必要であり、その習得は本留学の目的の一つであると考えております。

臨床面では、肝胆膵・移植外科のフェローとして勤務しております。勤務内容としては、手術日と移植待機日があり私はオランダ語がまだ話せないため外来は免除されております。手術日には肝胆膵の予定手術を行います。移植待機日は原則

手術には入らず病棟の回診を担当し、肝移植が入った時には手術を行います。

こちらでは、私の実力不足のため迷惑をかけ通しではありますが、周囲の人の助けを頂戴しながら多くのことを学ばせて頂いております。

この留学を支えて頂いております武富教授、本間医局長をはじめ医局の皆様には心より感謝申し上げます。

■ 2015-2016年業績

《学会》

M. Fujiyoshi, T.A. Berendsen, R. van Rijn, R. Porte, Orthotopic liver transplantation following dual machine perfusion in the mouse, Nederlandse Transplantatie Vereniging Bootcongres 2016, 2016.3.9-10, Groningen, the Netherlands.

《論文》

なし

川俣 太

卒業年：2005年

留学先：オーストラリア・ブリスベン (Queensland Institute of Medical Research, QIMR) Conjoint Gastroenterology

■ 近況報告

私は2005年卒業の川俣太です。2015年12月からポスドクとしてオーストラリア・ブリスベンのQIMRに勤務しております。QIMRはクイーンズランド大学医学部とロイヤルブリスベンホスピタルのある広大な敷地の中に存在します。臨床研究に特化した施設で、人種はオージー（オーストラリア人）とヨーロッパ人とアジア人が5：3：2くらいの割合です。ラボは大変自由な雰囲気、みなでカフェに繰り出し、みんないつも笑顔で楽しんで仕事をしています。

留学先でのテーマは、Molecular Determinants of Metastatic Colorectal Cancerであり、原発大腸癌周囲の正常粘膜、原発大腸癌、肝転移巣からDNA、RNAを抽出し、正常粘膜から原発大腸癌、および大腸癌の転移巣の成立に至る要因について、SNPおよび全ゲノムシーケンスでの遺伝子変異の解明を目指し、実臨床において、ゲノムバイオマーカーに基づく真の癌個別化診療が実現できるよう日々、努力しています。

ブリスベンとは沖縄と同じ緯度で、真冬でも10度を下回る事があまりありません。真夏も35度くらいで過ごしやすいです。気候のよさではオーストラリアトップです。街は川沿いにあるリバーシティで、素晴らしいジョギングコースもあり、みんな走っています。さらに、ゴールドコーストやサンシャインコーストなどの美しい海辺、島々にも1時間程度のドライブで行くことが可能で、週末は大物狙いの釣りを楽しんでいます。また、海辺や公園には無料で使えるBBQ台があちこちに

あり、スイッチ一つで鉄板が熱くなります。

楽しく有意義な留学生活を送っていますが、研究留学中には、どうしても、臨床外科医としての感覚が失われていくような懸念が常にあります。今後の展望ですが、Occupational English Test (OET) という英語試験の合格を目指しています。この英語試験は、英語を母国語としない外国人医師がオーストラリアで臨床医として働くにあたって、必要な試験となっています。なんとか留学中にOET試験の合格を目指し、オーストラリアでの臨床医としての臨床経験も得ることができればと思っています。

最後に、留学をさせて頂く機会を与えてくださった武富教授、消化器外科学分野 I の先生方に厚く御礼申し上げます。

■ 2015-2016年業績

《論文》

1. Ono H, Kusano M, Kawamata F, Danjo Y, Kawakami M, Nagashima K, Nishihara H. Intraoperative localization of arteriovenous malformation of a jejunum with combined use of angiographic methods and indocyanine green injection: Report of a new technique. Int J Surg Case Rep. 2016 Oct 15;29:137-140
2. Einama T, Kawamata F, Kamachi H, Nishihara H,

Homma S, Matsuzawa F, Mizukami T, Konishi Y, Tahara M, Kamiyama T, Hino O, Taketomi A, Todo S. Clinical impacts of mesothelin expression in gastrointestinal carcinomas. *World J Gastrointest Pathophysiol.* 2016 May 15;7(2):218-2

3. Homma S, Kawamata F, Shibasaki S, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A. Does reduced-port laparoscopic surgery for medically uncontrolled ulcerative colitis do more harm than good? *Asian J Endosc Surg.* 2016 Feb;9(1):24-31.
4. Kusano M, Ono H, Danjo Y, Kawamata F, Tajima Y, Ohtsubo S, Shimada S, Koyanagi K. Fluorescent Navigation Surgery for Gastrointestinal Tract Cancers: Detection of Sentinel Nodes, Tumor Tattooing, and Harvesting of Lymph Nodes. *ICG Fluorescence Imaging and Navigation Surgery.* (Springer Book), 165-175, 2016
5. Homma S, Kawamata F, Shibasaki S, Ishikawa T, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A.



Reduced Port Laparoscopic TME with ColoAnal Anastomosis with or without Intersphincteric Resection. *SURGICAL TECHNIQUES IN RECTAL CANCER - TransAnal, Laparoscopic and Robotic Approach* (Springer Book) in press, 2017

6. Einama T, Kamachi H, Nishihara H, Homma S, Kanno H, Ishikawa M, Kawamata F, Konishi Y, Sato M, Tahara M, Okada K, Muraoka S, Kamiyama T, Taketomi A, Matsuno Y, Furukawa H, Todo S. Importance of luminal membrane mesothelin expression in intraductal papillary mucinous neoplasms. *Oncol Lett.* 2015 Apr;9(4):1583-1589.

2016年教室紹介

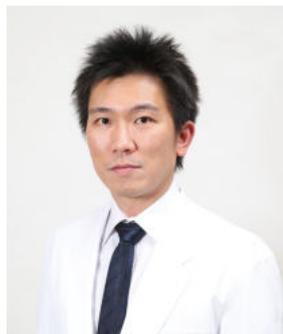
〈Senior Fellow〉

〈2016年入局後期研修医〉

2016年教室紹介 / Senior Fellow

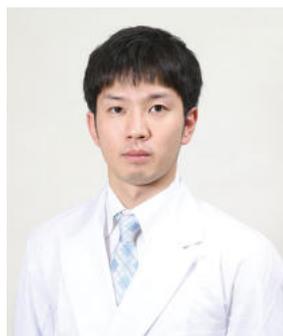
Senior Fellowアンケート

アンケート項目	1 今年度の感想/来年度の抱負/ 今後興味ある専門分野など	2 大学に戻ってきて 変わっていたこと	3 今年を漢字1文字で 表現すると?
---------	----------------------------------	------------------------	-----------------------



坂本 譲 (2010年北大卒 卒後7年目)

- 1 今年度の感想：3年前に、外科医としての経験がない状態で大学病棟をローテートした時とは違い、各グループの専門性に触れ理解しつつ日々の診療を行うことが出来た。3年間市中病院で自分自身が経験した、悩ましい症例や専門的治療を要する症例を、大学の専門に長けたグループにおいて実際に学ぶことができ大変有意義であった。また、大学ならではの珍しい症例や専門性に特化した学会発表も経験することができ、学問的にも非常に勉強になった。
来年度の抱負：大学院卒業と博士号取得に向けてリサーチを始める予定だが、大前提としてしっかりと結果、可能であれば日本ではなく世界に出しても恥ずかしくない結果を出したい。また、リサーチを専門とする方々の基本的な考え方や方法論を是非学びたい。
今後興味ある専門分野：腹部外科学一般に興味があるのは変わらないが、一人前の外科医として手術手技、術前術後も含めたマネジメントをまず習得したい。手術に関しては、内視鏡外科、肝胆膵外科、腹部救急疾患について、より専門性を深めていきたい。
- 2 大学病棟全体の雰囲気としては、自分が医学生の時や3年前の後期研修医の時と比較すると、前期研修医や学生の姿が多く見られた印象があった。近づき難く漠然とこわいイメージだった第一外科が、若干教育的で雰囲気が和らいだ印象だった。先生方も個別に話す機会があり、外科医としての考え方や物事の考え方を学ぶ機会が多かった。
- 3 「考」：臨床では病態や治療法、学問では学会発表や臨床研究の構築、など、今までは与えられたことをあまり考えなくてもなんとなく出来ていたことが、今年1年は色々な自分で考えさせられる機会が多かった。やはり常にアンテナを高くして、日々勉強が必要なることを実感した。
- 4 学会発表で、症例報告ではなくまとめものが経験できたこと。苦手であった統計処理を学ぶ機会がもてたこと。色々な先生方に、3年目は安心感が違うと言ってもらえたこと。肝亜区域切除を経験できたこと。一年を通じて学会発表を多くできたこと。
- 5 物事を順序立てて考える力。学会のスライド作り。
- 6 医学統計の基礎を理解し、自分でデータを処理できる能力。英語論文を書くこと。海外での学会発表。外科医としての基本的な手術手技の再確認。



柴田 賢吾 (2010年弘前大卒 卒後7年目)

- 1 今年度消化器外科Iに入室させていただき5年目となりました。その間北海道医療センター、砂川市立病院、釧路労災病院で研修させていただき3年ぶりに大学に戻ってきました。高度な手術を再度見られる機会ができてうれしく思いました。前回とは違った視点で見ることができ日々楽しく過ごしております。臨床研究をいただき（小児外科グループの先生方には多大なご協力をいただき）日々精進しております。また、今年は洞爺に長期出張に行き、地域医療についても学ぶ機会がありました。限られた設備で地域住民のニーズに応えるのはとても難しく、やりがいがあり充実した日々を送ることができました。今後はどの分野、臓器でも内視鏡手術がメインとなることが予想されるので修練して消化器外科Iの鏡視下手術の普及向上へ貢献していきたいと考えております。
- 2 当直室の二段ベッドがなくなった。初期研修医が増えた。
- 3 「太」：色々な考え方がより中身が濃く太くなった気がします。あと純粹に太りました。
- 4 昨年働いていた後輩が入局したこと。
- 5 加療を行う上での戦略を客観的に検討し意見すること。
- 6 テーマ（無い物）などを考えて生み出す能力。

4 今年一年で特によかった出来事

5 今年一年で力がついたと思うこと

6 今年一年では不十分で課題と感じたこと



渋谷 一陽 (2010年札医大卒 卒後7年目)

- 1 今年度は大学病棟で再び働くこととなりました。4月から消化管G、移植G、肝G、とローテーションし、現在は小児Gです。日々、忙しいですが市中病院での経験を経て、大学では初心に戻った気持ちで再び疾患や術式の知識を深めることができているのではないかと考えています。
- 消化管Gでは腹腔鏡下結腸切除を中心に執刀もさせて頂きました。
- 移植Gでは生体・脳死肝移植どちらも経験できました。周術期管理の難しさを改めて実感するとともに、移植後の全身状態の著大な改善を目の当たりにすると患者様の人生に与えるインパクトの大きさは計り知れないと思いました。
- 肝Gでは手術が多い大変な面もありますが、充実していました。大学でしか経験しないような症例も多くあり、いろいろな技術や考え方を知ることができたと思います。
- 小児Gでは重症な子どもも入院していますが、子供の生きる力の強さに日々感動を覚えています。
- これからも宜しくお願い致します。

- 2 基本的に何も変わってないような気がします。看護婦さんは少し変わってましたが。
- 3 「瞬」：診療や手術、日常生活でも常にアンテナを張っていることが大切だと思います。これからも一瞬一瞬を大事にしていこうと思います。
- 4 7月の徳島は良かったです（消化器外科学会）。特に阿波尾鶏！
- 5 明日への挑戦
- 6 昨日の反省



杉山 昂 (2010年北大卒 卒後7年目)

- 1 4年ぶりに大学の病棟に戻ってきました。3年間市中病院を回ってからだと、見えてくるものがだいぶ変わり、その変化を特に感じたのは手術でした。前回は、外科医になったばかりであり、今だから話せますが、正直なんの手術をしているのかさっぱり内容が多かったです。と言うか、大半だったかもしれません。しかし、曲がりなりにも3年間外科医として働いてから戻ると、一つ一つの処置・手術がとても興味深く見ることができています。手術に至る過程、手術での操作、その後の管理についても考え方のトレーニングが少しは出来たと思います。そして、レベルの高い手術をしている場所であると改めて感じました。来年度はおそらくリサーチに入り、手術から離れる可能性が大きく、現時点でははっきりとしたリサーチのイメージがまだ出来上がっていないですが、何かしら常に臨床現場を意識しながら今年学んだことを活かす事が出来るように頑張っていきたいと思っています。
- 2 医局旅行という行事が出来たこと、当直室が2段ベッドじゃなくなっていたこと。
- 3 「増」：今年は、4年前と違って中堅の学年として戻ってきて、責任も仕事も増えました。知り合いも増えただけ、何よりも体重と体脂肪が増えた気がします。ちなみにγも増えました。運動量は確実に減りました。
- 4 同期で徐々に集まって仕事が出来たこと。
- 5 統計ソフトの使い方。
- 6 臨床研究でも論文でも学会発表でも、まだまだ考察する力とそれを裏付ける基礎知識が足りないと感じた。



脇坂 和貴 (2010年北大卒 卒後7年目)

- 1 卒後7年目の今年度は大学病棟勤務でした。卒後3年目の大学病棟勤務の時とは違った立ち位置で仕事できて非常に勉強になりました。来年度はリサーチに進むことになるかと思いますが、何かしら自分の研究テーマを見つけて取り組んでいきたいと思っています。また、来年度の抱負としては消化器外科専門医を取得することを目指したいと考えています。今後自分が進む専門分野についてはまだ決めかねておりますが、色々な先生にアドバイスを頂きながら自分の将来を考えていきたいと思っています。
- 話は変わりまして、今年は医局対抗サッカー大会の代表を務めさせて頂きました。予選リーグ、決勝トーナメントを順調に勝ち上がり、決勝は整形外科との対戦となりました。前半は2-1でリードして折り返しましたが、後半に同点に追いつかれる試合展開となりました。整形外科と比べ交代要員も少なく防戦一方となりましたが、何とか凌いでカウンターで1点を勝ち越しましたが、試合終了間際に決められてしまい、3-3の同点でPK戦へと突入しました。PKは相手GKの好守に阻まれ、1-3で悔しい敗戦となりました。結果は準優勝でしたが、熱い試合ができて非常に充実した大会となりました。来年度は優勝を目指して頑張りたいと思いますので、今後とも変わらぬご支援をよろしくお願い致します。
- 2 病棟業務がやや軽減されて改善していると感じた。
- 3 「成」：自分の成長、子供の成長の成です。
- 4 何とか家庭と仕事を両立できているような気がする。
- 5 小児の術後管理
- 6 腹腔鏡の手術手技

後期研修医アンケート

アンケート 項目	1 今年度の感想/来年度の抱負/ 今後興味ある専門分野など	2 進路(外科)を考え始めた時期 3 一外入局を考え始めた時期	4 一外入局を決めた時期 5 一外に入局した決定的な理由
-------------	----------------------------------	------------------------------------	---------------------------------



阪田 敏聖

1 4月から第一外科の一員として大学病院で勤務を始めて、あっという間に8カ月が経ちました。ICU、移植グループ、肝グループ、麻酔科とローテートして忙しくも充実した毎日を過ごすことができいております。ICUでは肝移植後の管理を中心に学び、移植グループでも肝移植を経験できました。肝グループでは、肝胆膵系の解剖を中心にたくさんのことを学ばせていただきました。麻酔科では、心臓移植の麻酔やドナー手術を経験することが出来ました。日々学ぶことが多く、興味の幅が広がり外科学の奥深さを体感しております。まだ、消化管グループや小児外科グループをローテート前ですが、楽しみで仕方ありません。大学病院で学んだことを身につけていけるように精進したいと思います。

また、来年の4月からは新天地の勤務が待っており、期待が膨らみます。今後、先生方にも大変お世話になると思いますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

- 2 学生時代から(学士編入のため、大学3年生から)
- 3 初期研修2年目
- 4 初期研修2年目の夏過ぎ
- 5 初期研修で指導いただいた先輩の存在
関連施設の多さ(手術件数)
教育・指導の充実
- 6 医局対抗バスケット大会で優勝したこと。
- 7 術後管理、術中管理
解剖学的知識
論文検索や学会発表
- 8 論文作成
病態生理や解剖



田中 友香

1 今年度は大学で各グループをローテートするほかにも麻酔とICUでも勤務しました。ひとつひとつの症例について自分の理解が足りないことが分かり、日々の診療やプレゼン、学会発表などを通して多くのことを学べたと感じます。手術では、先輩方が当たり前に行っているひとつひとつの動作が、自分では意識しても難しかったりと、気づくことが多かったと思います。自分が責任を持って、執刀や術後管理をするうえで必要なことをなるべく多く吸収し、来年度につなげていきたいと思っています。

- 2 研修医2年目
- 3 研修医2年目
- 4 研修医2年目10月
- 5 研修医からみて魅力的な先輩方が多く、伝統もあり、スタッフの仕事に対する姿勢をみて。
- 6 クリーブランドクリニックの見学ができたこと。
- 7 早起き
- 8 1例1例に対する理解

- 6 今年一年で特によかった出来事
- 7 今年一年で力がついたと思うこと

- 8 今年一年では不十分で課題と感じたこと



中本 裕紀

1 今年一年大学病院で勉強させて頂いた感想ですが、外科医としての基礎知識・基礎技術がまるで足りないことを痛感致しました。足りない知識・技術は患者さんの不利益に直結することも感じました。また1日は24時間で無駄にして良い時間は1秒たりともないことを感じました。来年度以降は症例毎にしっかりと勉強し自分の糧にしていきたいと思います。現時点で興味を持っている分野は肝・胆・膵分野と移植分野です。将来の方向性をしっかりと決められるよう1つ1つの知識・技術を身につけていきたいと思えます。今後ともよろしくお願い致します。

- 2 学生時代から
- 3 研修医1年目から
- 4 研修医2年目
- 5 研修医時代に外科はやりがいがある仕事だと感じて
- 6 何例か執刀させて頂いた。
- 7 プレゼン能力
- 8 臨床的考察力、解剖



2016年教室紹介

〈秘書・クラーク・実験助手〉

■ 医局秘書

小原 美都

平成26年4月より医局秘書として勤務させていただいております。担当業務は、医局長関連業務、同門会事務局、医学科学生・大学院学生関連業務（学位申請等）、業績収集、教室年報・ホームページ関連業務で、多岐にわたる仕事の中でたくさん勉強させていただいてまいりました。

2月をもちまして退職いたしますが、医局を離れましても、先生方の益々のご活躍と教室の繁栄を心よりお祈り申し上げます。

今まで本当にお世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。有難うございました。

星川 愛弓

平成27年6月より医局秘書として勤務させていただいております。担当業務は、主に先生方の出張・兼業業務等の事務管理、北海道外科学会事務局、日本小児外科学会北海道地方会の事務局等の学会関連業務をしております。務めて早1年が経ちました。頼れる先輩秘書2名をお送りし、新しい秘書2名をお迎えし、より一層身を引き締め努めてまいりました。まだまだ未熟ではございますが、今後も、精一杯努めてまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

片桐 千尋

平成28年2月より医局で勤務させていただいております。主に教授関連業務を担当しております。働き始めは不安な事ばかりでしたが、皆様に暖かいご指導をいただきながら、楽しく勤めさせて頂いております。まだまだわからないことばかりですが、皆様から教えていただくことの一つ一つを大切に頑張りますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

近藤 歩美

平成28年2月より医局秘書として働かせて頂いております、近藤歩美と申します。

主に科研費にまつわる業務を担当しております。「科研費とは何だろう？」というところから始まり、慣れない業務に戸惑いの連続でございました。しかし、先生や先輩秘書の方々に温かくご指導していただき、一番の山場とされる「科研費申請」も無事に終わることができました。

こちらで働き始めて1年が経とうとしております。次年度は今年度の反省を生かし、同じ仕事を行うにしても効率が良くなるよう工夫して取り組んで参りたいと思います。

至らない点が多いことかと存じますが、日々努力して参りますので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。

正木 聖子

平成29年1月より秘書として勤務させていただいております。担当業務は、医局長関連業務、同門会事務局、医学部学生・大学院学生関連業務（学位申請等）、業績収集、教室年報・HP関連業務です。働かせていただいてまだ1ヶ月足らずで、わからないことばかりで先輩秘書の皆さんから一つずつ教えていただいているところです。一日も早く仕事を覚えて、先生方や皆様のお役に立てるよう頑張りますので、どうぞよろしくお願い致します。

■ 病棟クラーク

鈴木 愛

平成25年4月より病院CRで働かせていただいております。主な業務は診療録関連で、NCD登録などを担当しております。今年は小児外科学会でNCD会議に参加させていただき、貴重な経験となりました。

4年目となりますが、初心を忘れず先生方のお役に立てるよう努めてまいりますので、今後ともよろしくお願い致します。

■ 実験助手

三好 早香

2012年5月より技術補助員として勤務させていただいております。担当業務はTissueBank検体の処理・管理、また大学院生の先生方の実験のお手伝いもさせていただいております。TissueBankは今年も多く臨床の先生方のご協力のおかげでたくさんの症例を登録することができ、大変有難く思っております。過去採取された検体を実際に実験にお使いいただく機会も増えており、改めて大事な仕事に関わらせていただいているのだなと感じております。先生方の研究のお役に立てるよう引き続き精一杯努めてまいりますので、どうぞよろしくお願い致します。

五十嵐 瑠美

移植患者さんの免疫モニタリングアッセイ、実験のお手伝いをさせていただいております。

よい実験結果につながるよう、正確な仕事をするように心掛けております。

どうぞよろしくお願い致します。

小林 希

一外に所属させていただいてから10年が経ってしまい、どのような貢献ができたかと自問する日々です。

vitro実験室のさらなる発展に微力を尽くしております。

堀米 正敏

動物実験助手の堀米です。今は、医局にある実験室に出入りしたり、病院に検体回収などをしています。結構雑用が多いですが、どうぞよろしくお願い致します。

2016年業績紹介

(学会・論文・学位取得者・研究費一覧)

2016年業績紹介

業績

2016年学会一覧

《学会発表（国内）》

2016.1.15 第84回大腸癌研究会（熊本）

Stage IV大腸癌に対する治療成績（M1a, M1bの比較）

吉田雅、本間重紀、下國達志、崎浜秀康、川村秀樹、武富紹信

大腸癌における血中循環腫瘍細胞と骨髄腫瘍細胞～再発と癌関連死～

石黒友唯、崎浜秀康、吉田雅、下國達志、本間重紀、川村秀樹、武富紹信

2016.1.20 第19回札幌肝不全懇話会（札幌）

Acute on chronic肝不全（原因不明）に対し脳死肝移植を施行した1例

腰塚靖之、川村典生、財津雅昭、後藤了一、山下健一郎、鈴木友己、武富紹信、嶋村剛

核酸アナログ中断後のB型慢性肝炎増悪に対し脳死肝移植を施行した1例

腰塚靖之、川村典生、財津雅昭、後藤了一、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

2016.1.23 第35回北海道腎移植談話会（札幌）

当科で施行した腎移植9例の経過報告

腰塚靖之、川村典生、財津雅昭、後藤了一、山下健一郎、鈴木友己、武富紹信、佐々木元、岩見大基、森田研、嶋村剛

2016.1.27 第50回新さっぽろ消化器懇話会、特別講演（札幌）

肝臓外科領域の最近の進歩と今後の展望

武富紹信

2016.2.6 第8回消化器疾患プロジェクト会議、特別講演（東京）

消化器癌における腫瘍血管内皮細胞の機能解析

武富紹信

2016.2.12 第4回北海道小児外科フォーラム（札幌）

重症心身障がい者に対する周術期管理におけるDoripenem（DRPM）の使用経験

宮城久之、本多昌平、湊雅嗣、武富紹信

2016.2.14 第43回日本集中治療医学会（神戸）

持続緩徐式血液濾過器の（1→3）-β-Dグルカン値に関する基礎的検討

太田稔、岡本花織、加藤伸彦、南昭子、川村典生、財津雅昭、腰塚靖之、後藤了一、山下健一郎、嶋村剛

2016.2.27 第104回北海道外科学会（札幌）

StageIV 胃癌に対する腹腔鏡下手術の安全性に関する検討

佐野修平、川村秀樹、吉田雅、下國達志、本間重紀、崎浜秀康、武富紹信

診断に苦慮した臀部巨大類表皮嚢胞の1例

藤居勇貴、本間重紀、吉田雅、下國達志、崎浜秀康、川村秀樹、武富紹信

自己免疫性膵炎のフォロー中に胆管癌を発症した1例

村田竜平、蒲池浩文、敦賀陽介、岡田宏美、三橋智子、長川達哉、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

術前診断困難であった巨大な細胆管細胞癌の一切除例

今泉健、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

胆道結石術後に続発した胆汁性肝硬変に対して脳死肝移植を施行した1例

大淵圭祐、財津雅昭、川村典生、腰塚靖之、後藤了一、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

2016.3.3-4 第52回日本腹部救急医学会総会（東京）

下大静脈原発悪性腫瘍に対して外科的切除により致命的な合併症を防ぎ得た1例

大淵佳祐、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、藤居勇貴、敦賀陽介、蒲池浩文、後藤了一、岡田宏美、三橋智子、嶋村剛、武富紹信

肝移植後脾動脈瘤破裂をきたした2例

財津雅昭、川村典生、腰塚靖之、後藤了一、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

2016.3.3-5 第43回膵・膵島移植研究会（広島）

膵島移植におけるプロテアソーム阻害による早期グラフト障害の抑制

小野仁、旭火華、吉田雅、腰塚靖之、渡辺正明、外丸詩野、江本慎、深井原、嶋村剛、武富紹信、藤堂省、山下健一郎

2016.3.5 第15回東日本肝移植周術期研究会（東京）

肝移植前リンパ球クロスマッチ陽性の予後予測因子の検討

後藤了一、財津雅昭、川村典生、腰塚靖之、太田稔、鈴木友己、神山俊哉、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

2016.3.5 第94回日本小児外科学会北海道地方会（札幌）

後腹膜奇形腫と鑑別が困難であった後腹膜脂肪芽腫の1例

宮城久之、本多昌平、湊雅嗣、河北一誠、奥村一慶、矢部沙織、武富紹信

Perineal canalの1例

矢部沙織、本多昌平、宮城久之、湊雅嗣、河北一誠、奥村一慶、武富紹信

2016.3.5-6 第118回消化器病学会北海道支部例会（札幌）

肝線維化が99mTc-GSAシンチグラフィに及ぼす影響

若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

同時性肝転移を伴った大腸癌に対する腹腔鏡下大腸・肝同時切除の検討

吉田雅、本間重紀、下國達志、崎浜秀康、高橋典彦、川村秀樹、柿坂達彦、神山俊哉、武富紹信

当教室における鏡視下手術教育プログラム—初期教育から技術認定医取得まで—

下國達志、川村秀樹、吉田雅、本間重紀、崎浜秀康、武富紹信

2016.3.12 第28回日本小腸移植研究会（東京）

腸管延長術（STEP）施行後に多発小腸潰瘍

本多昌平、宮城久之、湊雅嗣、嶋村剛、武富紹信

2016.3.17-19 第88回日本胃癌学会総会（別府）

Reduced port gastrectomy 100例の周術期成績の検討

川村秀樹、吉田雅、下國達志、崎浜秀康、本間重紀、武富紹信、高橋昌宏

2016.3.19 日本消化器病学会北海道支部第18回教育講演会 (札幌)

炎症性腸疾患の外科治療

本間重紀、吉田雅、下國達志、崎浜秀康、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

2016.4.2 第6回東京・神奈川劇症肝炎研究会 (東京)

脳死肝移植後に肝機能障害が再燃・遷延したHAVによる劇症肝炎の1例

腰塚靖之、川村典生、財津雅昭、後藤了一、太田稔、岡田宏美、畑中佳奈子、山下健一郎、武富紹信、田中一成、姜貞憲、高橋和明、嶋村剛

2016.4.14-4.16 第116回日本外科学会定期学術集会 (大阪)

大量肝切除を伴う胆管・胆嚢癌手術の治療戦略と成績

蒲池浩文、敦賀陽介、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、後藤了一、山下健一郎、神山俊哉、武富紹信

局所進行膵癌に対するGemcitabine併用NACRTの有用性の検討
敦賀陽介、蒲池浩文、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

肝線維化が99mTc-GSAシンチグラフィに及ぼす影響

若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、島田慎吾、蒲池浩文、敦賀陽介、武富紹信発表

肝細胞癌切除症例における新規血清肝線維化マーカー M2BPGi 測定の有用性

横尾英樹、藤好真人、久野敦、後藤雅志、深井原、蒲池浩文、神山俊哉、是永匡紹、溝上雅史、成松久、武富紹信

顕微鏡的門脈侵襲を有する肝細胞癌に対する系統的切除の傾向スコアを用いた解析

島田慎吾、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、折茂達也、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

Hydrogen Sulfide Augments Survival Signals in Warm Ischemia and Reperfusion of the Mouse Liver.

Shimada S, Fukai M, Wakayama K, Ishikawa T, Kobayashi N, Kimura T, Yamashita K, Kamiyama T, Shimamura T, Taketomi A, Todo S.

肝内胆管癌に対する外科切除、リンパ節郭清の妥当性

折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

局所進行膵癌に対するGemcitabine併用NACRTの有用性の検討

敦賀陽介、蒲池浩文、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

中肝静脈再建を行い完全切除し得た転移性肝癌の2例

大淵佳祐、神山俊哉、横尾英樹、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、後藤了一、小林展大、河北一誠、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

Reduced port gastrectomy 100例の成績—従来の腹腔鏡下胃切除との短期成績の比較—

川村秀樹、吉田雅、下國達志、崎浜秀康、本間重紀、武富紹信、高橋昌宏

術後QOLを重視した潰瘍性大腸炎に対するReduced Port Surgery

本間重紀、吉田雅、下國達志、崎浜秀康、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

高齢者大腸癌症例に対する外科治療戦略

下國達志、吉田雅、本間重紀、崎浜秀康、川村秀樹、武富紹信

pT4大腸癌に対する腹腔鏡下手術の安全性

吉田雅、本間重紀、下國達志、崎浜秀康、川村秀樹、武富紹信

当科における肝移植後de novoドナー特異的抗HLA抗体に対する治療戦略

後藤了一、深作慶友、川村典生、財津雅昭、腰塚靖之、太田稔、畑中佳奈子、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

生体肝移植における脂肪肝ドナーのダイエット効果の検討

藤居勇貴、川村典生、財津雅昭、腰塚靖之、後藤了一、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

GV/SV ratio 35%以下のsmall graftで安全に肝移植を行うために
川村典生、財津雅昭、腰塚靖之、後藤了一、高橋徹、太田稔、鈴木友己、神山俊哉、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

肝移植後肝細胞癌再発症例における再発後予後因子の検討

今泉健、腰塚靖之、川村典生、財津雅昭、後藤了一、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

先天性門脈体循環シャントに対する治療戦略

本多昌平、宮城久之、湊雅嗣、武富紹信

定型的なダイヤモンド型十二指腸十二指腸吻合が施行できなかった先天性十二指腸閉鎖症・狭窄症の3例

宮城久之、本多昌平、湊雅嗣、武富紹信

肝芽腫において異常メチル化で発現抑制されるPARP6の機能解析
湊雅嗣、本多昌平、宮城久之、檜山英三、武富紹信

臍腸瘻を合併した臍帯ヘルニアの一例

河北一誠、本多昌平、宮城久之、湊雅嗣、武富紹信

肝癌細胞株におけるuPAの発現変化に伴う浸潤能変化と糖鎖異常解析

高橋秀徳、神山俊哉、柿坂達彦、相山健、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、敦賀陽介、蒲池浩文、横尾英樹、西村紳一郎、武富紹信

ALDH1の低発現は肝外胆管癌および胆嚢癌の重要な予後因子である

松澤文彦、水上達三、蒲池浩文、三橋智子、敦賀陽介、畑中豊、神山俊哉、武富紹信

術前サルコペニアは胃癌切除後の短期成績に影響するか？

石黒友唯、崎浜秀康、吉田雅、下國達志、本間重紀、川村秀樹、武富紹信

担がん環境下で産生されるIL-6を標的とした新規大腸がん免疫治療の構築

豊島雄二郎、北村秀光、大野陽介、寺田聖、吉田雅、下國達志、本間重紀、崎浜秀康、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

低温酸素化状態における14-3-3 zetaによるエネルギー産生と細胞内シグナルの制御 ヒト尿管上皮細胞株 (HK2) を用いた検討

深井原、小林希、石川隆壽、梅本浩平、島田慎吾、若山顕治、大谷晋太郎、橋本咲月、藤好真人、山下健一郎、嶋村剛、武富紹信

ラット肝冷保存再灌流における重水含有臓器保存液 (Dsol) の保護効果 Autophagyと細胞生存・死シグナルへの影響
梅本浩平、深井原、島田慎吾、石川隆壽、大谷晋太郎、橋本咲月、藤好真人、若山顕治、山下健一郎、嶋村剛、武富紹信

2016.4.21-23 第102回日本消化器病学会総会 (東京)
BCLC Stage B、C症例に対する肝切除の意義
神山俊哉、若山顕治、折茂達也

2016.4.27 第20回札幌肝不全懇話会 (札幌)
HEVによる劇症肝炎治療中に、急性膵炎から下横隔動脈仮性瘤を発症した1例
腰塚靖之、川村典生、財津雅昭、後藤一、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

脳死肝移植後に肝機能障害が再燃・遷延したHAVによる劇症肝炎の1例
腰塚靖之、川村典生、財津雅昭、後藤一、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

2016.5.11 第25回KULDUS講演会、特別講演 (福岡)
肝臓外科領域におけるC型肝炎治療
武富紹信

2016.5.21 第70回手術手技研究会 (東京)
潰瘍性大腸炎に対するReduced Port Surgery
本間重紀、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、川村秀樹、武富紹信

2016.5.24-26 第53回日本小児外科学会学術集会 (福岡)
膿瘍形成した肛門管重複症の1例
本多昌平、宮城久之、湊雅嗣、奥村一慶、河北一誠、武富紹信

腸管延長術 (STEP) を施行2年後に多発小腸潰瘍による消化管出血をきたした1例
近藤享史、本多昌平、宮城久之、湊雅嗣、奥村一慶、河北一誠、武富紹信

Oncologic emergencyを呈した後腹膜悪性ラドイド腫瘍の1例
奥村一慶、本多昌平、宮城久之、湊雅嗣、武富紹信

網羅的DNAメチル化解析を用いた肝芽腫の遠隔転移因子の検索
湊雅嗣、本多昌平、宮城久之、新開真人、北河徳彦、田中水緒、田中祐吉、武富紹信

2016.6.2-4 第28回日本肝胆膵外科学会学術集会 (大阪)
Operative planning for major hepatectomy to prevent liver failure.
Taketomi A, Tsuruga Y, Shimada S, Wakayama K, Orimo T, Kakisaka T, Yokoo H, Kamachi H, Kamiyama T.

肝葉切除を伴う肝門部領域胆道系腫瘍における血行再建の手法と成績
蒲池浩文、敦賀陽介、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、後藤一、山下健一郎、神山俊哉、武富紹信

局所進行膵癌に対するGemcitabine併用術前放射線化学療法の有用性の検討

敦賀陽介、蒲池浩文、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

巨大肝細胞癌に対する肝切除後の遠隔転移と予後の検討
若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

A significance of anatomical resection and predictive factors for hepatocellular carcinoma with microscopic portal vein invasion under 5cm in diameter
Shimada S, Kamiyama T, Yokoo H, Orimo T, Wakayama K, Tsuruga Y, Kamachi H, Taketomi A.

TACE、RFA後再発の肝細胞癌に対する肝切除症例の検討
折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

占拠部位 (肝門型、末梢型) からみた肝内胆管癌の予後因子解析
横尾英樹、神山俊哉、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

局所進行膵癌に対するGemcitabine併用術前放射線化学療法の有用性の検討
敦賀陽介、蒲池浩文、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、神山俊哉、武富紹信

2016.6.15-17 第41回日本外科系連合学会学術集会 (大阪)
3D画像支援システムによる下右肝静脈領域を評価した肝切除
横尾英樹、神山俊哉、折茂達也、若山顕治、永生高広、島田慎吾、蒲池浩文、武富紹信

腹腔鏡下結腸切除中における術後鎮痛法
吉田雅、本間重紀、大野陽介、市川伸樹、下國達志、崎浜秀康、高橋典彦、川村秀樹、武富紹信

2016.6.17 第38回日本血栓止血学会学術集会 (奈良)
プロテインS研究会シンポジウム「消化器外科領域におけるVTEの臨床的重要性」
武富紹信

2016.6.23 第16回岐阜肝臓外科研究会、特別講演 (岐阜)
肝細胞癌に対する分子標的治療～外科医はどう使いこなすか～
武富紹信

2016.6.25 第22回北海道内視鏡外科研究会 (札幌)
境界病変と診断された肝腫瘍に対する腹腔鏡下肝切除術の検討
脇坂和貴、神山俊哉、島田慎吾、永生高広、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、蒲池浩文、武富紹信

当科における鏡視下手術教育プログラム
吉田雅、川村秀樹、本間重紀、大野陽介、市川伸樹、武富紹信

進行胃癌に対する腹腔鏡下胃切除術の周術期成績の検討
渋谷一陽、川村秀樹、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、武富紹信

2016.6.25 第27回北海道肝がん研究会 (札幌)
混合型肝癌切除症例の検討
脇坂和貴、神山俊哉、島田慎吾、永生高広、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、蒲池浩文、武富紹信

2016.7.1 第85回大腸癌研究会（大阪）

大腸癌に対する腹腔鏡下大腸切除術の治療成績
吉田雅、本間重紀、大野陽介、市川伸樹、川村秀樹、武富紹信

2016.7.1-2 第52回日本肝癌研究会（東京都）

BCLC Classification Stage Bのサブクラス分類に対する肝切除の意義

神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

顕微鏡的門脈侵襲を有する5cm未満肝細胞癌に対する系統的切除の意義と予測因子

島田慎吾、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、折茂達也、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

肝門型・末梢型肝内胆管癌の臨床病理学的検討

折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

NBNC肝細胞癌切除例における予後再発因子の検討

横尾英樹、神山俊哉、岡田尚樹、折茂達也、若山顕治、永生高広、島田慎吾、蒲池浩文、武富紹信

下大静脈/右心房腫瘍栓を有する肝細胞癌に対する肝切除

若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、島田慎吾、永生高広、折茂達也、蒲池浩文、武富紹信

2016.7.2 第109回日本臨床外科学会北海道支部例会（札幌）

肝細胞癌における顕微鏡的門脈侵襲の予測因子と系統的肝切除の意義

島田慎吾、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、折茂達也、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

境界病変と診断された肝腫瘍に対する腹腔鏡下肝切除術の検討

脇坂和貴、神山俊哉、島田慎吾、永生高広、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、蒲池浩文、武富紹信

膵癌におけるNACRT後の治療効果と適切な切除範囲に関する検討

永生高広、蒲池浩文、折茂達也、敦賀陽介、坂本讓、島田慎吾、若山顕治、横尾英樹、神山俊哉、三橋智子、武富紹信

進行胃癌に対する腹腔鏡下胃切除術の周術期成績の検討 臨床外科地方会

渋谷一陽、川村秀樹、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、武富紹信

生体肝移植後の内ヘルニアにより小腸穿孔を発症した1例

中本裕紀、坂本讓、後藤了一、腰塚靖之、川村典生、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

2016.7.6 第11回小児肝移植懇話会（旭川）

当科における小児生体肝移植後免疫抑制剤中止、減量症例の検討
後藤了一、財津雅昭、川村典生、腰塚靖之、山本真由美、柏浦愛美、太田稔、山下健一郎、嶋村剛

2016.7.7-8 第34回日本肝移植研究会（旭川）

脳死肝移植を増やすために今できること：北海道における臓器提供・移植医療の理解に向けた取り組み
嶋村剛、古川博之、藤堂省

肝細胞癌に対する生体肝移植：全国集計

嶋村剛

肝移植における免疫誘導

山下健一郎

肝移植後De novo悪性腫瘍に対するサーベイランスの有用性の検討

腰塚靖之、川村典生、後藤了一、太田稔、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

昏睡型急性肝不全に対して可搬型持続的オンライン血液透析濾過装置（HAYATE）を用いて意識覚醒を得た1例

太田稔、岡本花織、加藤伸彦、南昭子、川村典生、財津雅昭、腰塚靖之、後藤了一、山下健一郎、嶋村剛

イメージング質量分析によるラット脂肪肝虚血再灌流障害の評価

橋本咲月、深井原、早坂孝宏、梅本浩平、大谷晋太郎、白澤憲典、中藪拓哉、島田慎吾、惠淑萍、千葉仁志、山下健一郎、嶋村剛、武富紹信

2016.7.7-9 第51回日本小児腎臓病学会学術集会（名古屋）

肥厚性幽門狭窄症を合併した先天性ネフローゼ症候群の一例

高橋俊行、岡本孝之、佐藤泰征、山崎健史、有賀正、宮城久之、本多昌平

2016.7.14-16 第71回日本消化器外科学会総会（徳島）

肝前・後区域間離断を伴う胆道再建手術におけるS8c遺残膿瘍の原因と対策

蒲池浩文、敦賀陽介、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、後藤了一、山下健一郎、神山俊哉、武富紹信

経皮経肝的門脈塞栓術PTPE後の肝体積増大予測因子の検討

島田慎吾、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、折茂達也、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

胆管内腫瘍栓を伴う肝細胞癌に対する肝切除症例の検討～特に閉塞性黄疸をきたした症例を中心に

折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

下大静脈/右心房腫瘍栓を伴う高度進行肝細胞癌に対する肝切除を中心とした集学的治療

若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、島田慎吾、折茂達也、蒲池浩文、敦賀陽介、武富紹信

肝内胆管癌における術後再発予防に対する戦略の変遷と展望

横尾英樹、神山俊哉、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

当科における胃全摘後食道空腸吻合の方法と成績—Linear staplerを用いた再建の優位性について—

川村秀樹、吉田雅、下國達志、崎浜秀康、本間重紀、武富紹信、高橋昌宏

大学医局制度を活用した内視鏡外科技術認定医取得を目指した教育プログラム

本間重紀、吉田雅、下國達志、崎浜秀康、川村秀樹、武富紹信

大腸癌原発巣におけるFDG-PET/CTのSUVmax・SUVglucの検討

下國達志、本間重紀、吉田雅、崎浜秀康、川村秀樹、武富紹信

腹腔鏡下結腸切除術における術後鎮痛法の検討
吉田雅、本間重紀、下國達志、崎浜秀康、川村秀樹、武富紹信

個別指導による内視鏡外科手術修練の効果と技術認定取得後の技術向上に関する検討
市川伸樹、本間重紀、石川倫啓、鈴木崇史、辻健志、上泉洋、大平将史、数井啓蔵、脇坂和貴、武富紹信

生体肝移植における制御性T細胞を用いた免疫寛容誘導法の臨床試験
山下健一郎、財津雅昭、後藤了一、長津明久、鈴木友己、嶋村剛、神山俊哉、場集田寿、奥村康、藤堂省

肝移植後de novoドナー特異的HLA抗体に対するリツキサン投与の治療効果
後藤了一、深作慶友、川村典生、財津雅昭、腰塚靖之、太田稔、畑中佳奈子、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

選択的CD28副刺激遮断によるヒト化マウスモデルにおける皮膚移植の検討
Zaitso M, Issa Fadi, Hester Joanna, Milward Kate, Vanhove Bernard, Wood Kathryn

当院の生体肝移植ドナー手術成績とドナー手術侵襲の早期グラフ機能・移植成績に及ぼす影響
川村典生、神山俊哉、後藤了一、腰塚靖之、財津雅昭、高橋徹、太田稔、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

2016.7.22 有田地区医師会学術講演会（伊万里）
肝臓外科領域におけるC型肝炎治療
武富紹信

2016.7.27-29 第21回日本癌免疫学会学術総会（大阪）
IL-6による免疫抑制メカニズムの解明と新規大腸がん肝転移治療への応用
豊島雄二郎、大野陽介、項慧慧、寺田聖、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信、北村秀光

2016.8.19-20 第43回日本膵切研究会（東京）
膵癌におけるNACRT後の適切なSMA神経叢郭清範囲に関する検討
永生高広、蒲池浩文、敦賀陽介、田中友香、脇坂和貴、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、神山俊哉、三橋智子、武富紹信

2016.8.20 第18回北海道肝イメージ研究会（札幌）
術前診断が困難であった限局性結節性過形成の1例
脇坂和貴、神山俊哉、島田慎吾、永生高広、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、蒲池浩文、武富紹信

2016.9.3 第8回血液疾患免疫療法学会学術総会（札幌）
IL-6に関連したマイクロRNAの新規機能と担がん生体におけるバイオマーカーとしての有用性
豊島雄二郎、大野陽介、大竹淳矢、寺田聖、項慧慧、岡田尚樹、木井修平、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信、北村秀光

2016.9.3 第95回日本小児外科学会北海道地方会（札幌）
臍静脈と左胃静脈を用いたmeso-Rex Bypassを施行した肝外門脈閉塞症の1例
柴田賢吾、本多昌平、宮城久之、湊雅嗣、神山俊哉、嶋村剛、後藤了一、田中友香、武富紹信

MMIHSの6歳女児例に対する外科的治療戦略の検討
湊雅嗣、本多昌平、宮城久之、岡田忠雄、武富紹信

2016.9.3-4 第119回日本消化器病学会北海道支部例会（札幌）
膵癌におけるNACRT後の治療効果と適切なSMA神経叢郭清範囲に関する検討
永生高広、蒲池浩文、折茂達也、敦賀陽介、田中友香、脇坂和貴、島田慎吾、若山顕治、横尾英樹、神山俊哉、三橋智子、武富紹信

切除不能転移性結腸直腸癌における原発巣切除の意義
市川伸樹、本間重紀、吉田雅、大野陽介、渋谷一陽、川村秀樹、川本泰之、村中徹人、原田一顕、中積宏之、結城敏志、小松嘉人、坂本直哉、武富紹信

2016.9.12 平成28年度ライオンズクラブ国際協会331-A地区献血推進セミナー（札幌）
善意の提供に支えられる医療：輸血・移植医療
嶋村剛

2016.9.15-16 第27回日本消化器癌発生学会総会（鹿児島）
Preoperative Detection of Circulating Tumor Cells and Disseminated Tumor Cells in Patients with Colorectal Carcinoma
石黒友唯、崎浜秀康、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、川村秀樹、武富紹信

IL-6による免疫抑制メカニズムの解明と新規大腸がん肝転移治療への応用
豊島雄二郎、北村秀光、大野陽介、項慧慧、寺田聖、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、川村秀樹、高橋典彦、武富紹信

2016.9.16-17 第35回Microwave Surgery研究会（熊本）
大腸癌肝転移症例に対する肝切除と併せた術中マイクロ波腫瘍凝固療法（MCT）の有用性
島田慎吾、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、折茂達也、永生高広、蒲池浩文、武富紹信

2016.9.17 第22回北海道肝移植適応研究会（札幌）
肝移植後の小児に対するハイゼントラ®の使用経験
腰塚靖之、川村典生、渡辺正明、後藤了一、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

当院での重症HEV肝炎3例の経験：肝移植実施1例と非実施2例の検討
川村典生、腰塚靖之、渡辺正明、後藤了一、岡本花織、太田稔、小川浩司、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

2016.9.29-10.1 第52回日本移植学会（東京）
肝移植の組織適合検査 HLAタイピングとリンパ球クロスマッチ（ワークショップ）
後藤了一、腰塚靖之、川村典生、渡辺正明、太田稔、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

当院における肝移植後腸閉塞症例の検討
坂本讓、後藤了一、中本裕紀、阪敏聖、腰塚靖之、川村典生、太田稔、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

2016.10.6-8 第75回日本癌学会学術総会（横浜）
Analysis of N-glycan alternation and invasiveness associated with u-PA expression in hepatocellular carcinoma cell-lines

Takahashi H, Kamiyama T, Kakisaka T, Aiyama T, Shimada S, Wakayama K, Orimo T, Kamachi H, Yokoo H, Nishimura S, Taketomi A.

Detection of circulating tumor cell (CTC) focusing epithelial-mesenchymal transition (EMT) in gastric cancer
Ishiguro Y, Sakihama H, Ohno Y, Ichikawa N, Yoshida T, Homma S, Kawamura H, Taketomi A.

IL-6 suppresses Type-1 immune responses in tumor microenvironment and promotes liver metastasis of colorectal cancer

Toyoshima Y, Ohno Y, Xiang H, Terada S, Homma S, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A, Kitamura H.

2016.10.7 第10回Acte Care and Emergency Surgery (ACES) 研究会、特別講演

肝臓外科領域におけるVTE
武富紹信

2016.10.8 第6回TALTフォーラム (Trans-ARIAKE Liver Transplantation Forum) (熊本)

北海道における肝移植：過去・現在・未来
嶋村剛

2016.10.9 第35回日本心臓移植研究会 (札幌)

臓器移植における細胞治療を用いた免疫寛容誘導
山下健一郎

2016.10.12 標茶町講演会、特別講演 (標茶)

知っていますか？メタボで肝臓が悪くなる
武富紹信

2016.10.15 第11回膵癌術前治療研究会 (仙台)

膵癌におけるNACRT後の治療効果と適切なSMA神経叢郭清範囲に関する検討

永生高広、蒲池浩文、折茂達也、敦賀陽介、坂本讓、島田慎吾、若山顕治、横尾英樹、神山俊哉、三橋智子、武富紹信

2016.10.15 第37回日本大腸肛門病学会北海道地方会 (札幌)

広汎子宮全摘術後に外腸骨動脈が起点となって生じた絞扼性イレウスの2例

杉山昂、本間重紀、市川伸樹、渋谷一陽、大野陽介、吉田雅、川村秀樹、武富紹信

2016.10.22-24 第25回日本組織適合性学会総会 (札幌)

肝移植における免疫寛容誘導の試み
山下健一郎

2016.10.27 第15回LPEC研究会 (東京)

LPEC施行3ヵ月後に対側再発した1幼児例
宮城久之、本多昌平、湊雅嗣、武富紹信

2016.10.29 第105回北海道外科学会 (札幌)

門脈分岐奇形を伴った肝内胆管癌の1例
田中友香、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、永生高広、島田慎吾、脇坂和貴、坂本讓、蒲池浩文、武富紹信

当科におけるHPDの周術期管理と成績

坂本讓、蒲池浩文、折茂達也、永生高広、若山顕治、島田慎吾、横尾英樹、後藤了一、山下健一郎、神山俊哉、武富紹信

完全内臓逆位を伴う進行胃癌に対する腹腔鏡下胃全摘術
柴田賢吾、川村秀樹、渋谷一陽、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、武富紹信

肝移植における工夫—門脈—体循環シャントを使用した1例
阪田敏聖、後藤了一、坂本讓、中本裕紀、腰塚靖之、川村典生、太田稔、岡本花織、千葉裕基、鈴木友己、山下健一郎、武富紹信、嶋村剛

2016.11.1 函館市外科学会学術講演会、特別講演 (函館)

進行肝癌に対する治療戦略
武富紹信

2016.11.3-6 第14回日本消化器外科学会大会 (神戸)

肝門型・末梢型肝内胆管癌の臨床病理学的検討
折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、島田慎吾、敦賀陽介、蒲池浩文、武富紹信

胃GISTに対する腹腔鏡下胃部分切除の方法と成績

川村秀樹、吉田雅、下國達志、崎浜秀康、本間重紀、武富紹信、高橋昌宏

2016.11.12 第33回北海道スーマリハビリテーション研究会 (札幌)

根治的切除9年後に孤立性腋窩リンパ節転移を来した結腸人工肛門部癌の1例

南波宏征、本間重紀、吉田雅、今泉健、大野陽介、市川伸樹、高橋典彦、川村秀樹、武富紹信

2016.11.18-19 第71回日本大腸肛門病学会学術集会 (三重)

cT4結腸癌に対する腹腔鏡下手術の短期成績
吉田雅、本間重紀、大野陽介、市川伸樹、川村秀樹、武富紹信

切除不能転移性病変を有するステージIV大腸癌における原発巣切除の意義

市川伸樹、本間重紀、吉田雅、大野陽介、渋谷一陽、川村秀樹、川本泰之、村中徹人、原田一顕、中積宏之、結城敏志、小松嘉人、坂本直哉、武富紹信

2016.11.23 第10回肝臓内視鏡外科研究会 (東京)

肝頭背領域 (S7/8) に対する腹腔鏡下肝部分切除における工夫
坂本讓、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、島田慎吾、永生高広、蒲池浩文、武富紹信

2016.11.23 北海道移植医療推進協議会主催 移植者のつどい 2016 (札幌)

移植医のないしよばなし
嶋村剛

2016.11.24-26 第78回日本臨床外科学会総会 (品川)

当科におけるHPDの周術期管理と成績
蒲池浩文、折茂達也、永生高広、若山顕治、島田慎吾、横尾英樹、後藤了一、山下健一郎、神山俊哉、武富紹信

肝門型、末梢型肝内胆管癌のリンパ節郭清の意義

横尾英樹、神山俊哉、折茂達也、若山顕治、永生高広、島田慎吾、蒲池浩文、武富紹信

下大静脈、右心房腫瘍栓を伴った肝細胞癌に対する治療戦略

若山顕治、神山俊哉、横尾英樹、島田慎吾、永生高広、折茂達也、蒲池浩文、武富紹信

PTPE後残肝体積と非塞栓門脈血流の関連性の検討

島田慎吾、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、折茂達也、永生高広、蒲池浩文、武富紹信

肝内胆管癌に対するリンパ節郭清の意義—新旧規約の比較による検討

折茂達也、神山俊哉、横尾英樹、若山顕治、島田慎吾、永生高広、蒲池浩文、武富紹信

境界病変と診断された肝腫瘍に対する腹腔鏡下肝切除術の検討
脇坂和貴、神山俊哉、島田慎吾、永生高広、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、蒲池浩文、武富紹信

腹腔鏡下大腸切除における経口経静脈併用予防的抗生剤投与のSSI軽減に対する効果

市川伸樹、本間重紀、吉田雅、大野陽介、渋谷一陽、川村秀樹、数井啓蔵、上泉洋、武富紹信

大腸癌の術前深達度診断における腹部超音波検査の有用性についての検討

大野陽介、本間重紀、吉田雅、市川伸樹、渋谷一陽、川村秀樹、武富紹信

2016.11.26-27 第43回日本臓器保存生物医学会学術集会(八王子)

臓器灌流法の先にあるべき技術の開発

深井原、島田慎吾、小林希、梅本浩平、大谷晋太郎、中藪拓哉、三野和宏、山下健一郎、嶋村剛、武富紹信

2016.12.3 第110回日本臨床外科学会北海道支部例会(札幌)

異時性4重複癌(直腸・肺・胃・肝)であった肝内胆管癌の1切除例

阪田敏聖、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、永生高広、島田慎吾、坂本讓、蒲池浩文、武富紹信、中智昭、三橋智子

上行結腸癌及び胆石症術後に腹膜再発の鑑別が困難であった腹腔内膿瘍の1例

中本裕紀、本間重紀、吉田雅、市川伸樹、大野陽介、杉山昂、川村秀樹、武富紹信

肝癌に対する肝移植～肝癌の再発と再発後の予後不良因子についての検討

腰塚靖之、川村典生、渡辺正明、後藤了一、太田稔、山下健一郎、神山俊哉、武富紹信、嶋村剛

本邦初のE型遅発性肝不全に対する脳死肝移植

渋谷一陽、川村典生、腰塚靖之、渡辺正明、後藤了一、武富紹信、山下健一郎、嶋村剛

2016.12.5-7 第45回日本免疫学会学術総会(沖縄)

IL-6 causes dysfunction of antitumor immunity and promotes tumorigenesis in a liver metastasis model using colorectal cancer cells

Toyoshima Y, Okada N, Xiang H, Terada S, Kii S, Ohno Y, Homma S, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A, Kitamura H.

STAT1-mediated signaling cascade is associated with inflammatory bowel disease

Kii S, Toyoshima Y, Okada N, Xiang H, Terada S, Homma S, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A, Kitamura H.

2016.12.8-10 第29回日本内視鏡外科学会総会(横浜)

Reduced port gastrectomyにおける当科の工夫

川村秀樹、渋谷一陽、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、武富紹信、高橋昌宏

肥満症例に対する腹腔鏡下大腸切除術の治療成績(BMIによる分類)

吉田雅、本間重紀、大野陽介、市川伸樹、川村秀樹、武富紹信

技術認定取得後の助手力向上に関する検討

市川伸樹、本間重紀、吉田雅、大野陽介、渋谷一陽、川村秀樹、上泉洋、武富紹信

当科における他臓器合併切除を要した局所進行大腸癌に対する腹腔鏡下手術のまとめ

大野陽介、本間重紀、吉田雅、市川伸樹、渋谷一陽、川村秀樹、武富紹信

完全内臓逆位を伴う進行胃癌に対する腹腔鏡下胃全摘術

渋谷一陽、川村秀樹、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、武富紹信

腹腔鏡下に切除したHIV感染症を伴う小腸癌の1例

柴田賢吾、川村秀樹、大野陽介、市川伸樹、吉田雅、本間重紀、武富紹信

2016.12.17 第58回日本小児血液・がん学会学術集会(東京)

小腸多発性myeloid sarcomaにより腸重積およびイレウスを発症した1例

宮城久之、本多昌平、湊雅嗣、井口晶裕、長祐子、大島淳二郎、杉山未奈子、有賀正、武富紹信

《学会発表(国際)》

2016.3.1-3 New Key Opinion Leaders Meeting (Bangkok, Thailand)

The Operational Tolerance with a Regulatory Cell-Based Cell Therapy in Living Liver Transplantation.
Goto R.

2016.3.25 Samsung Medical Center Organ Transplantation Symposium (Seoul, Korea)

The role of regulatory T cells in liver transplantation tolerance. "Invited speaker".
Yamashita K.

2016.4.4-6 22th International Liver Transplant Society annual international congress (Seoul, Korea)

Optimizing small for sized graft: Our experience in Living Donor Liver Transplantation using GV/SV less than 35% grafts

Kawamura N, Zaitzu M, Koshizuka Y, Goto R, Suzuki T, Kamiyama T, Yamashita K, Taketomi A, Shimamura T.

2016.4.8-9 Transplantation Science Symposium (TSS) Asian Regional Meeting 2016 (Tokyo)

The role of regulatory T cells in liver transplantation tolerance
Yamashita K.

The current strategies for preexisting donor specific antibodies in liver transplantation.

Goto R, Koshizuka Y, Kawamura N, Zaitzu M, Ota M,

Yamashita K, Taketomi A, Shimamura T.

A proteasome inhibitor, bortezomib prevents pancreatic islet graft loss after transplantation
Ono H, Asahi Y, Yoshida T, Koshizuka Y, Watanabe M, Tomaru U, Kobayashi N, Emoto S, Fukai M, Shimamura T, Taketomi A, Todo S, Yamashita K.

2016.4.24-28 The 49th Pacific Association of Pediatric Surgeons (Hawaii, USA)

Persistent gastrostomy site infection in patients with laparoscopic and open Nissen fundoplication
Miyagi H, Honda S, Minato M, Okada T, Taketomi A.

2016.5.11-13 XXVIII Congress of the Scandinavian Transplantation Society (Stockholm, Sweden)

ARA 290, A Non-Hematopoietic Erythropoietin Analogue, Protects Pancreatic Islets. Inhibits Kupffer Cells and Dendritic Cells Activation Result To Improve Islet Allografts Engraftment In Pancreatic Islet Transplantation.

Watanabe M, Ming Han Yao, Jennifer Jager, Sune sun, Helen Zemack, Anthony Cerami, Michael Brines, Myriam Aouadi, Torbjörn Lundgren and Makiko Kumagai-Braesch.

2016.5.24-26 The 24th Congress of the Asian Association of Pediatric Surgeons (AAPS) (Fukuoka)

DNA methylation related to chemoresistance in hepatoblastomas.

Honda S, Minato M, Miyagi H, Kawakita I, Okumura K, Hiyama E, Taketomi A.

Retroperitoneal lipoblastoma: a case report.

Miyagi H, Honda S, Minato M, Kawakita I, Okumura K, Taketomi A.

A case report of anopenile urethral fistula.

Kawakita I, Miyagi H, Honda S, Minato M, Okumura K, Taketomi A.

2016.6.11-15 American Transplant Congress (Boston, USA)

ARA 290, A Non-Hematopoietic Erythropoietin Analogue, Protects Pancreatic Islets, Inhibits Kupffer Cells and Dendritic Cells Activation Result To Improve Islet Allografts Engraftment In Pancreatic Islet Transplantation.
Watanabe M, Ming Han Yao, Jennifer Jager, Sune sun, Helen Zemack, Anthony Cerami, Michael Brines, Myriam Aouadi, Torbjörn Lundgren and Makiko Kumagai-Braesch.

2016.8.3 The international Association of Surgeons, Gastroenterologists and Oncologists Continuing Medical Education: Advanced Post-Graduate Course in Sendai (Sendai)

The proper resection area for superior mesenteric artery nerve plexuses in pancreatic cancer after neoadjuvant chemoradiotherapy.

Einama T, Kamachi H, Tsuruga Y, Tanaka Y, Wakizaka K, Shimada S, Wakayama K, Orimo T, Yokoo H, Kamiyama T, Mitsuhashi T, Taketomi A.

Strategy of laparoscopic partial resection for gastric gastrointestinal stromal tumors according to the growth pattern.

Ichikawa N, Kawamura H, Yoshida T, Ohno Y, Shibuya K, Homma S, Taketomi A.

The efficacy of our surveillance program on detection of de novo malignancies following liver transplantation

Koshizuka Y, Kawamura N, Zaitzu M, Goto R, Watanabe M, Ota M, Yamashita K, Taketomi A, Shimamura T.

Factors associated with risk of persistent gastrostomy site infection following laparoscopic or open Nissen fundoplication

Miyagi H, Honda S, Minato M, Okada T, Taketomi A.

2016.8.18-23 26th international congress of The Transplantation Society (Hong Kong)

A clinical trial of cell therapy-based tolerance induction in living donor liver transplantation: Long-term follow-up results.

Yamashita K, Goto R, Zaitzu M, Nagatsu A, Oura T, Watanabe M, Aoyagi T, Suzuki T, Shimamura T, Kamiyama T, Sato N, Sugita J, Hatanaka K, Bashuda H, Okumura K, Todo S.

The impact of preformed donor-specific antibodies in living donor liver transplantation depending on graft volume.

Goto R, Koshizuka Y, Kawamura N, Zaitzu M, Ota M, Kamiyama T, Yamashita K, Taketomi A, Shimamura T.

Selective blockade of CD28 costimulation prevented human allo-skin graft rejection in a humanised mouse model
Zaitzu M, Issa F, Hester J, Wood K.

A non-hematopoietic erythropoietin analogue, ARA 290, prolonged allogeneic islet graft survival in a mouse model.

Watanabe M, Ming Han Yao, Bo-Göran Ericzon, Anthony Cerami, Michael Brines, Torbjörn Lundgren, Makiko Kumagai-Braesch.

Ex vivo generation of alloantigen-specific immunomodulatory cells with co-stimulation blockade: do we need Treg purification for cell therapy?

Watanabe M, Ming Han Yao, Makiko Kumagai-Braesch, Dennis Andersson, Bo-Göran Ericzon.

2016.8.27-28 7th Japanese-Mongolian International Joint Symposium on Surgical Treatment of Digestive Tract Cancers. Invited Lecture (Ulaanbaatar, Mongolia)

Liver transplantation for hepatocellular carcinoma in Japan
Taketomi A.

Image guide for hepatic surgery by Indocyanine Green fluorescence imaging navigation.

Yokoo H, Kamiyama T, Orimo T, Wakayama K, Einama T, Shimada S, Kamachi H, Taketomi A.

Analysis of alternation of N-glycan and invasiveness associated with u-PA expression in hepatocellular carcinoma cell-lines

Takahashi H, Kamiyama T, Kakisaka T, Aiyama T, Shimada S, Wakayama K, Orimo T, Kamachi H, Yokoo H, Nishimura S, Taketomi A.

2016.9.9-11 International Liver Cancer Association 2016 (Vancouver, Canada)

Efficacy of Sorafenib for extrahepatic recurrence of hepatocellular carcinoma after liver resection

Yokoo Y, Kamiyama T, Orimo T, Wakayama K, Einama T, Shimada S, Kamachi H, Taketomi A.

Analysis of alternation of N-glycan and invasiveness associated with u-PA expression in hepatocellular carcinoma cell-lines

Takahashi H, Kamiyama T, Kakisaka T, Aiyama T, Shimada S, Wakayama K, Orimo T, Kamachi H, Yokoo H, Nishimura S, Taketomi A.

2016.9.22 4th International Conference of Federation of Asian Clinical Oncology (FACO). Invited Lecture (Xiamen, China)

Current surgical treatment for hepatocellular carcinoma in Japan.

Taketomi A.

2016.10.23-26 40th World congress of the international college of surgeon (Kyoto)

Possibility of pre-operative monocyte count as recurrence prediction biomarker in Stage II/III colorectal cancer.

Ohno Y, Homma S, Yoshida T, Ichikawa N, Kawamura H, Taketomi A.

Review of Living Donor Hepatectomy at Hokkaido University Hospital: Donor outcome and Effect on Graft Function and Survival.

Kawamura N, Kamiyama T, Goto R, Koshizuka Y, Zaitzu M, Takahashi T, Ota M, Yamashita K, Taketomi A, Shimamura T.

Hepatectomy for Hepatocellular Carcinoma with Bile Duct Tumor Thrombus.

Orimo T, Kamiyama T, Yokoo H, Wakayama K, Shimada S, Einama T, Kamachi H, Taketomi A.

The proper resection area for superior mesenteric artery nerve plexuses in pancreatic cancer after neoadjuvant chemoradiotherapy.

Einama T, Kamachi H, Orimo T, Tsuruga Y, Sakamoto Y, Shimada S, Wakayama K, Yokoo H, Kamiyama T, Mitsuhashi T, Taketomi A.

Presacral abscess formation as a presenting sign of anal canal duplication: a case report

Minato M, Honda S, Miyagi H, Okada H, Takakuwa E and Taketomi A.

2016.10.29 Asian Transplantation Week 2016, The 11th Korea Japan Transplantation Forum (Incheon, Korea)

The efficacy of our surveillance program on early detection of de novo malignancies and prognosis following liver transplantation

Koshizuka Y, Kawamura N, Zaitzu M, Goto R, Watanabe

M, Ota M, Yamashita K, Taketomi A, Shimamura T.

The impact of preformed donor-specific antibodies in short-term graft survival of adult living donor liver transplantation.

Goto R, Koshizuka Y, Kawamura N, Zaitzu M, Ota M, Kamiyama T, Yamashita K, Taketomi A, Shimamura T.

2016.11.9-12 The 15th World congress of endoscopic surgery/ ELSA 2016 (Suzhou, China)

Tutorial mentoring for laparoscopic colorectal surgery is effective in a general hospital.

Ichikawa N, Homma S, Yoshida T, Ohno Y, Shibuya K, Shibata K, Tanaka Y, Kawamura H, Taketomi A.

Laparoscopic total gastrectomy for gastric cancer with situs inversus totalis

Shibata K, Kawamura H, Ichikawa N, Yoshida T, Ohno Y, Shibuya K, Homma S, Taketomi A.

Successful excision of retrorectal epidermoid cysts by laparoscopic approach

Tanaka Y, Homma S, Ichikawa N, Yoshida T, Ohno Y, Shibuya K, Shibata K, Kawamura H, Taketomi A.

2016.11.11-15 AASLD Liver Meeting 2016 (Boston, USA)

Significant of Hepatectomy for Stage B and C Hepatocellular Carcinoma in the BCLC Classification.

Kamiyama T, Yokoo H, Orimo T, Wakayama K, Shimada S, Einama T, Kamachi H, Yamashita K, Shimamura T, Todo S, Taketomi A.

Portal venous flow measured by ultrasound sonography after percutaneous transhepatic portal vein embolization is useful for prediction of hepatic hypertrophy.

Shimada S, Kamiyama T, Yokoo H, Orimo T, Wakayama K, Einama T, Kamachi H, Taketomi A.

2016年論文一覧

《論文発表》

Kamiyama T, Kakisaka T, Yokoo H, Orimo T, Wakayama K, Kamachi H, Tsuruga Y, Taketomi A.

Anatomical Hepatectomy Using Indocyanine Green Fluorescent Imaging and Needle-Guiding Technique.

ICG Fluorescence Imaging and Navigation Surgery. 305-313

Shimada S, Ohtsubo S, Kusano M.

Microscopic Findings Fluorescence of Liver Cancers

ICG Fluorescence Imaging and Navigation Surgery. 315-324

Homma S, Kawamata F, Shibasaki S, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A.

Does the reduced port laparoscopic surgery for medically uncontrolled ulcerative colitis do more harm than good ?

Asian J Endosc Surg. 9(1): 24-31, 2016.2

Ohno Y, Kitamura H, Takahashi N, Ohtake J, Kaneumi

S. Sumida K, Homma S, Kawamura H, Minagawa N, Shibasaki S, Taketomi A.
IL-6 down-regulates HLA class II expression and IL-12 production of human dendritic cells to impair activation of antigen-specific CD4+ T cells
Cancer Immunol Immunother. 65(2): 193-204, 2016.2

Watanabe M, Torbjörn Lundgren, Yu Saito, Anthony Cerami, Michael Brines, Claes-Göran Östenson, and Makiko Kumagai-Braesch
A non-hematopoietic erythropoietin analogue, ARA 290, inhibits macrophage activation and prevents damage to transplanted islets
Transplantation. 100(3): 554-562, 2016.3

Ichikawa N, Yamashita K, Funakoshi T, Ichihara S, Fukai M, Ogura M, Kobayashi N, Zaito M, Yoshida T, Shibasaki S, Koshizuka Y, Tsunetoshi Y, Sato M, Einama T, Ozaki M, Umezawa K, Suzuki T, Todo S.
Novel anti-inflammatory agent 3-[(dodecylthiocarbonyl)-methyl]-glutarimide ameliorates murine models of inflammatory bowel disease
Inflamm Res. 65(3): 245-60, 2016.3

Asahi Y, Kamiyama T, Homma S, Hatanaka KC, Yokoo H, Nakagawa T, Kamachi K, Nakanishi K, Tahara M, Kakisaka T, Wakayama K, Todo S, Taketomi A.
Resection of liver metastasis derived from alpha-fetoprotein-producing gastric cancer—report of 4 cases
International Cancer Conference Journal 5(2): 98-103, 2016.4

Taketomi A.
Development and future directions of antiangiogenic therapy in hepatocellular carcinoma.
Int J Clin Oncol. 21(2): 205, 2016.4

Taketomi A.
Clinical trials of antiangiogenic therapy for hepatocellular carcinoma.
Int J Clin Oncol. 21(2): 213-8, 2016.4

Fukai M, Kobayashi N, Ishikawa T, Wakayama K, Shimada S, Umemoto K, Ohtani S, Fujiyoshi M, Yamashita K, Shimamura T, and Taketomi A.
14-3-3 ζ -mediated stimulation of oxidative phosphorylation exacerbates oxidative damage under hypothermic oxygenated conditions in human renal tubular cells (HK-2).
Transplant Proc. 48(4): 1288-91, 2016.5

Tsuruga Y, Kamiyama T, Kamachi H, Shimada S, Wakayama K, Orimo T, Kakisaka T, Yokoo H, Taketomi A.
Significance of functional hepatic resection rate calculated using 3D CT/ (99m) Tc-galactosyl human serum albumin single-photon emission computed tomography fusion imaging.
World J Gastroenterol. 22(17): 4373-9, 2016.5

Einama T, Kawamata F, Kamachi H, Nishihara H, Homma S, Matsuzawa F, Mizukami T, Konishi Y, Tahara M,

Kamiyama T, Hino O, Taketomi A and Todo S.
Clinical impacts of mesothelin expression in gastrointestinal carcinomas
World Journal of Gastrointestinal Pathophysiology. 7(2): 218-22, 2016.5

Honda S, Minato M, Suzuki H, Fujiyoshi M, Miyagi H, Haruta M, Kaneko Y, Hatanaka KC, Hiyama E, Kamijo T, Okada T, Taketomi A.
Clinical prognostic value of DNA methylation in hepatoblastoma: Four novel tumor suppressor candidates.
Cancer Sci. 107: 812-819, 2016.6

Shibasaki S, Homma S, Yoshida T, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A.
Epidermal Sutureless Closure of the Umbilical Base Following Laparoscopic Colectomy for Colon Cancer
Indian J Surg. 78(3): 203-208, 2016.6

Baba M, Takahashi M, Yamashiro K, Yokoo H, Fukai M, Sato M, Hosoda M, Kamiyama T, Taketomi A, Yamashita H.
Strong cytoplasmic expression of NF- κ B/p65 correlates with a good prognosis in patients with triple-negative breast cancer.
Surg Today. 46(7): 843-51, 2016.7

Shoji H, Yoshio S, Mano Y, Kumagai E, Sugiyama M, Korenaga M, Arai T, Itokawa N, Atsukawa M, Aikata H, Hyogo H, Chayama K, Ohashi T, Ito K, Yoneda M, Nozaki Y, Kawaguchi T, Torimura T, Abe M, Hiasa Y, Fukai M, Kamiyama T, Taketomi A, Mizokami M, Kanto T.
Interleukin-34 as a fibroblast-derived marker of liver fibrosis in patients with non-alcoholic fatty liver disease.
Sci Rep. 1; 6: 28814, 2016.7

Orimo T, Kamiyama T, Yokoo H, Wakayama K, Shimada S, Tsuruga Y, Kamachi H, Taketomi A.
Hepatectomy for Hepatocellular Carcinoma with Bile Duct Tumor Thrombus, Including Cases with Obstructive Jaundice.
Ann Surg Oncol. 23(8): 2627-34, 2016.8

Fujii Y, Homma S, Yoshida T, Taketomi A.
Jejunal intussusception caused by metastasis of a giant cell carcinoma of the lung.
BMJ Case Reports 2016.8

Watanabe M, Louise Hagbard, Helene Johansson, Helen Zemack, Carl Jorns, Meng Li, and Ewa Ellis.
Maintenance of hepatic functions in primary human hepatocytes cultured on xeno-free and chemical defined human recombinant laminins
PLoS One. 11(9): e0161383, 2016.9

Shibasaki S, Kawamura H, Homma S, Yoshida T, Takahashi S, Takahashi M, Takahashi N, Taketomi A.
A Comparison Between Fentanyl Plus Celecoxib And Epidural Anesthesia for Postoperative Pain Management Following Laparoscopic Gastrectomy
Surg Today. 46(10): 1209-1216, 2016.10

Wakayama K, Kamiyama T, Yokoo H, Kakisaka T, Orimo T, Shimada S, Tsuruga Y, Kamachi H, Taketomi A. Our technique of preceding diaphragm resection and partial mobilization of the hepatic right lobe using a vessel sealing device (LigaSure™) for huge hepatic tumors with diaphragm invasion. *Surgery Today*. 46(10): 1224-9, 2016.10

Miyagi H, Honda S, Minato M, Okada T, Hatanaka KC, Taketomi A. Impact of umbilical polyp resection: A report and literature review. *Afr J Pediatr Surg*. 13: 196-198, 2016.10-12

Shibuya K, Einama T, Abe H, Kanazawa R, Suzuki T, Matsuzawa F, Lee Wee K, Kaga T, Tamura E, Taketomi A, Kyuno K. Sonazoid can help visualize the intraductal spread of breast cancer. *Am Surg*. 82(12): 352-354, 2016.12.1

Yokoo H, Miyata H, Konno H, Taketomi A, Kakisaka T, Hirahara N, Wakabayashi G, Gotoh M, Mori M. Models predicting the risks of six life-threatening morbidities and bile leakage in 14, 970 hepatectomy patients registered in the National Clinical Database of Japan. *Medicine (Baltimore)*. 95(49): e5466, 2016.12

Shimada S, Wakayama K, Fukai M, Shimamura T, Ishikawa T, Fukumori D, Shibata M, Yamashita K, Kimura T, Todo S, Ohsawa I, Taketomi A. Hydrogen gas ameliorates hepatic reperfusion injury after prolonged cold preservation in isolated perfused rat liver. *Artif Organs*. 40(12): 1128-1136, 2016.12

Matsuzawa F, Homma S, Yoshida T, Shibasaki S, Minagawa N, Shimokuni T, Sakihama H, Kawamura H, Takahashi N, Taketomi A. Successful Treatment of Rectovaginal Fistula and Rectal Stenosis due to Perianal Crohn's Disease by Dual-port Laparoscopic Abdominoperineal Resection: a report of two cases *Surgical Case Reports*. 2(1): 1-6, 2016.12

Imaizumi K, Homma S, Yoshida T, Shimokuni T, Sakihama H, Takahashi N, Kawamura H, Takakuwa E and Taketomi A. Solitary left axillary lymph node metastasis after curative resection of carcinoma at the colostomy site: a case report *Surgical Case Reports*. 2(1): 99, 2016.12

Watanabe M, Saito Y, Jesper Wallmo, Takahashi T, Randa A Hadi Diab, Ming Han Yao, Michael Brines, Anthony Cerami, Claes-Goran Ostenson, Torbjorn Lundgren, and Makiko Kumagai-Braesch. An engineered Innate Repair Receptor agonist, ARA 290, protects rat islets from cytokine-induced apoptosis *J Diabetes Metab*. 7: 708, 2016.

Kawamura H, Shibasaki S, Yoshida T, Shimokuni T, Sakihama H, Homma S, Takahashi M, Taketomi A. The feasibility of laparoscopic gastrectomy for remnant gastric cancer *International Surgery*, in press.

Kawamura H, Yoshida T, Ohno Y, Ichikawa N, Homma S, Taketomi A. Advanced technique of reduced-port laparoscopic total gastrectomy for gastric cancer *Annals of Laparoscopic and Endoscopic Surgery*, in press.

Yoshida T, Kawamura H, Homma S, Shibasaki S, Shimokuni T, Sakihama H, Takahashi N, Taketomi A. Six cases of simultaneous reduced port laparoscopic surgery for synchronous gastric and colorectal cancer. *Int Surg*, in press.

Wakayama K, Kamiyama T, Yokoo H, Orimo T, Shimada S, Einama T, Kamachi H, Taketomi A. Huge Hepatocellular Carcinoma Greater than 10 cm in Diameter Worsens Prognosis by Causing Distant Recurrence after Curative Resection. *J Surg Oncol*. In press.

Honda S, Minato M, Miyagi H, Okada H, Taketomi A. Anal canal duplication presenting with abscess formation. *Pediatrics International*, in press.

Miyagi H, Honda S, Minato M, Okada T, Taketomi A. Factors associated with the risk of persistent gastrotomy site infection following laparoscopic or open Nissen fundoplication. *Afr J Pediatr Surg*, in press.

Yoshida T, Homma S, Shibasaki S, Shimokuni T, Sakihama H, Takahashi N, Sakihama H, Taketomi A. Postoperative analgesia using fentanyl plus celecoxib versus epidural anesthesia after laparoscopic colon resection *Surg Today*. [Epub ahead of print] 2016.5

Ichikawa N, Homma S, Nakanishi K, Kazui K, Kashiwakura S, Ohira M, Tsuji T, Suzuki T, Ishikawa T, Taketomi A. Safety of Laparoscopic Colorectal Resection in Patients With Severe Comorbidities. *Surg Laparosc Endosc Percutan Tech*. [Epub ahead of print] 2016.11

柏倉さゆり、本間重紀、柴崎晋、吉田雅、川村秀樹、武富紹信
梅の種子嵌頓によりイレウスを発症した直腸癌の1例
日本外科系連合学会誌 41(1): 89-93, 2016.2

蒲池浩文、敦賀陽介、島田慎吾、若山顕治、折茂達也、横尾英樹、柿坂達彦、田原宗徳、後藤了一、山下健一郎、神山俊哉、武富紹信
【肝門部胆管癌に対する手術適応の限界】肝門部胆管癌左葉系切除におけるTransparenchymal glissonian approach (TGA) による手術限界 (解説/特集)
癌の臨床 (0021-4949) 61(6): 403-408, 2016.2

嶋村剛、古川博之、藤堂省

北海道の地域連携からドナー獲得への取り組みは成功したのか
肝・胆・膵 72(3): 453-461, 2016.3

川村秀樹、本間重紀、吉田雅、柴崎晋、高橋典彦、武富紹信

Reduced port surgeryによる胃癌・大腸癌同時切除6例の経験
手術 Vol 70: 695-700, 2016.4

大平将史、本間重紀、柴崎晋、吉田雅、皆川のぞみ、川村秀樹、
高橋典彦、武富紹信

腸重積を伴う大腸癌に対し整復せずに待期的腹腔鏡下切除が可能
であった3例

日本消化器外科学会雑誌 49(4): 350-359, 2016.4

永生高広、阿部厚憲、鈴木麻由、志智俊介、松井博紀、金沢亮、
渋谷一陽、鈴木崇史、松澤文彦、濱口純、許理威、橋本卓、仲地耕平、
沼田泰尚、那須野央、須藤豪太、堀内努、田村悦哉、及能健一

当院における肝切除

帯広協会病院医誌 1: 21-28, 2016.5

小林展大、神山俊哉、折茂達也、岡田宏美、横尾英樹、武富紹信

腺癌を合併した難治性感染を伴う多発性肝嚢胞の1例

日本臨床外科学会雑誌 77(5): 1207-1211, 2016.5

大淵佳祐、神山俊哉、横尾英樹、折茂達也、若山顕治、武富紹信
パッチ再建を用いて切除した中肝静脈浸潤を伴う大腸癌肝転移の
2例

日本臨床外科学会雑誌 77(5): 1212-1216, 2016.5

坂本聡大、蒲池浩文、敦賀陽介、横尾英樹、神山俊哉、三橋智子、
武富紹信

胆嚢摘出から26年後に発症した遺残胆嚢管癌の1例

日本臨床外科学会雑誌 77(6): 1529-1534, 2016.6

柴田泰洋、細田充主、山本貢、市之川一臣、石田直子、武富紹信、
山下啓子

術前内分泌療法で病理学的完全奏効となった閉経後乳癌の1例

北海道外科雑誌 (0288-7509) 61(1): 62-66, 2016.6

深井原、島田慎吾、小林希、石川隆壽、梅本浩平、大谷晋太郎、
山下健一郎、嶋村剛、武富紹信

低音酸化状態におけるタンパク機能制御

Organ Biology 23(2): 173-179, 2016.7

太田拓児、柴崎晋、吉田雅、本間重紀、川村秀樹、清水亜衣、畑
中佳奈子、武富紹信

無症候性パラガングリオーマの1例

日本臨床外科学会雑誌 第77(7): 1831-1836, 2016.7

武富紹信

【分子標的薬を用いた周術期治療】肝がんに対する分子標的薬を
用いた外科周術期治療の現状 (解説/特集)

がん分子標的治療 (1347-6955) 14(2): 205-209, 2016.7

河北一誠、石田直子、馬場基、細田充主、武富紹信、山下啓子

線維性骨異形成を合併し多発骨転移との鑑別に苦慮した乳癌の1例
日本臨床外科学会雑誌 (1345-2843) 第77(8): 1907-1911,
2016.8

千田圭悟、神山俊哉、折茂達也、横尾英樹、菅野宏美、武富紹信
99mTc-GSA SPECT/CT fusion imageによる術前肝予備能評

価が有用であった巨大肝血管腫の1例

日本消化器外科学会雑誌 (0386-9768) 49(9): 882-888, 2016.9

今泉健、本間重紀、吉田雅、下國達志、崎浜秀康、高橋典彦、川
村秀樹、畑中佳奈子、武富紹信

横行結腸mixed adenoneuroendocrine carcinomaの長期無
再発生存の1例

日本消化器外科学会雑誌 49(10): 1045-1052, 2016.10

阿部厚憲、永生高広、金沢亮、渋谷一陽、松澤文彦、森田恒彦、
本間重紀、川村秀樹、武富紹信

腹腔鏡下手術におけるエノキサパリンナトリウム投与の使用経験
日本外科系連合学会誌 (0385-7883) 41(6): 897-901, 2016.10

本間重紀、吉田雅、市川伸樹、川村秀樹、武富紹信

大腸癌一臨床と研究の歴史と現状一

日本臨床 74(11): 1781-1785, 2016.11

宮城久之、本多昌平、湊雅嗣、近藤亨史、奥村一慶、河北一誠、
岡田忠雄、武富紹信

小児に対する外科治療一小児外科領域における内視鏡手術一

北海道外科雑誌 (0288-7509) 61(2): 7-14, 2016.12

《著書》

腰塚靖之、武富紹信

【消化器外科 肝癌に対する生体肝移植Up-to-date】

Annual Review 消化器 2016巻: 224-230, 2016.1

敦賀陽介、武富紹信

【でっかくドーン！オールカラー図解でみるみるわかる 新人
ナースのための消化器外科 術前術後ケアQ&A】(1章) 消化器
臓器のしくみとはたらきQ&A 膵臓のしくみとはたらき 膵・
胆管合流異常とはどんな病気?

消化器外科Nursing (1341-7819) 2016春季増刊: 32-55, 2016.4

湊雅嗣、武富紹信

【ずばり1ページ解説!術後ドレーンの知識・看護のまるわかり
ノート】消化器外科ドレーンの基礎知識 (解説/特集)

消化器外科Nursing (1341-7819) 21(6): 484-497, 2016.6

■ 学位取得者

山田 健司

■ 学位所得年月

2016年3月

■ 学位論文名

Studies on the functional analysis of CXCR7; tumor endothelial specific marker in tumor endothelial cells

(腫瘍血管内皮マーカーであるCXCR7の腫瘍血管内皮における機能解析に関する研究)

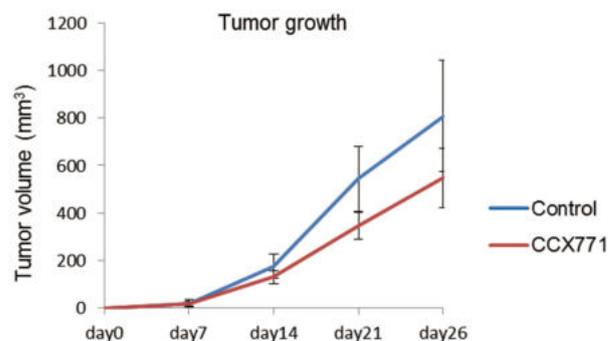
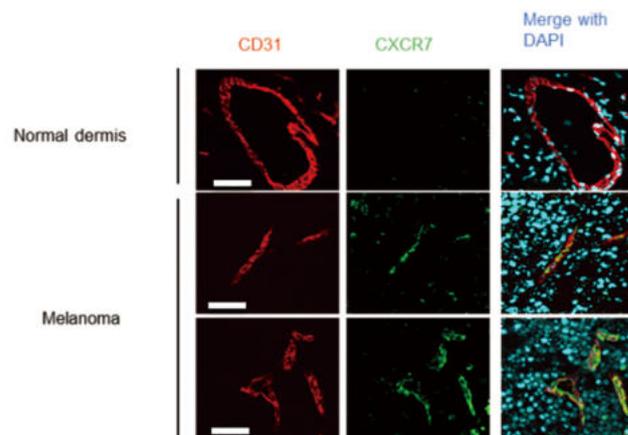
■ 基礎論文

Yamada K, Maishi N, Akiyama K, Towfik Alam M, Ohga N, Kawamoto T, Shindoh M, Takahashi N, Kamiyama T, Hida Y, Taketomi A, Hida K. CXCL12-CXCR7 axis is important for tumor endothelial cell angiogenic property, *Int J Cancer*: 137, 2825-2836, 2015

■ 要 旨

近年、vascular endothelial growth factor (VEGF) 中和抗体に代表される血管新生阻害療法は様々ながん治療に用いられており、生存率が向上している。しかし、VEGFは生理的な正常組織における血管新生にも重要な分子であり、VEGF阻害による高血圧や創傷治癒遅延などの様々な副作用が報告されている。我々はこれまでに腫瘍血管内皮細胞 (Tumor endothelial cell : TEC) を分離培養し、それらが正常血管内皮細胞 (Normal endothelial cell : NEC) と比較して染色体異常があること、抗がん剤などの薬剤に対する感受性が低いこと、様々な遺伝子の発現が亢進しており血管新生能が高いことなどを報告してきた。これら異常性を獲得したTECのみを標的とする治療法の開発が、より効果的で正常血管に対する副作用が少ない新規血管新生阻害薬の開発につながると考えた。DNA microarrayによる網羅的解析を行い、TECで特異的に発現するマーカーの同定を行い、NECに比べTECにおいて発現が200倍以上高かったC-X-C chemokine receptor type 7 (CXCR7) に着目した。CXCR7は7回膜貫通型タンパクであり、Stromal cell derived factor 1をリガンドとしている。脳腫瘍や前立腺癌・肺癌など様々な癌細胞で発現が亢進していると報告されており肺癌や大腸癌においてはCXCR7高発現と予後との関係が報告されている。また、前立腺癌・腎細胞癌組織では腫瘍部の血管においてもCXCR7が発現していることが報告されている。しかし、TECにおけるCXCR7の機能は未だ不明である。本研究ではTECにおけるCXCR7の血管新生に対する機能を解析し、CXCR7阻害による抗腫瘍効果を検討した。過去の報告に一致して本研究においてもCXCR7

はTECに高く発現していることが示された。次にTECにおけるCXCR7の機能を解析した。siRNAならびにCXCR7阻害剤CCX771を用いて同分子を阻害すると、TECの細胞遊走能や管腔形成能などの血管新生能が著明に低下した。また、マウスin vivo腫瘍においてCXCR7阻害剤CCX771により血管新生が阻害され、腫瘍の増殖が抑制された。これらの結果より、CXCR7はTECに発現亢進しており、その高い血管新生能に関与していることが示された。CXCR7は腫瘍血管内皮選択的な血管新生阻害療法開発のための新たな標的分子として期待される。



市川 伸樹

■ 学位所得年月

2016年6月

■ 学位論文名

マウス炎症性腸疾患モデルにおける新規抗炎症薬3-[(dodecylthiocarbonyl) methyl]glutarimideによる炎症抑制効果に関する研究

(Studies on Anti-inflammatory Effect of 3-[(dodecylthiocarbonyl) methyl]-glutarimide on Murine Models of Inflammatory Bowel Disease)

■ 基礎論文

Ichikawa N, Yamashita K, Funakoshi T, Ichihara S, Fukai M, Ogura M, Kobayashi N, Zaitsumi M, Yoshida T, Shibasaki S, Koshizuka Y, Tsunetoshi Y, Sato M, Einama T, Ozaki M, Umezawa K, Suzuki T, Todo T. Novel anti-inflammatory agent 3-[(dodecylthiocarbonyl)-methyl]-glutarimide ameliorates murine models of inflammatory bowel disease. *Inflammation Research* 2016; 65(3): 245-260

■ 要旨

【背景と目的】炎症性腸疾患の病態は、T細胞の無秩序増殖と、マクロファージ (Mφ) から放出される過剰な炎症性サイトカインによる持続性炎症が特徴とされる。一方、新規抗炎症薬3-[(dodecylthiocarbonyl) methyl] glutarimide (DTCM-G) は、RAW264.7細胞株において、LPS刺激によるAP-1誘導を抑制し抗炎症作用を示す。また、p70^{S6K}の阻害によりprimary T細胞の増殖を抑制する。今回、DTCM-Gを用いその腸炎抑制効果を検討した。

【方法】①雄BALB/cマウスに1.5mgTNBS/50% ethanol溶液150μlを注射しTNBS腸炎を誘発した。DTCM-Gを1日2回4日間腹腔内投与し、臨床病理学的所見を対照群と比較した。更に免疫組織化学染色、単離大腸粘膜単核球 (LPMC) を用いた構成細胞の評価、RT-PCRによるサイトカインmRNA発現評価を行った。②雄C57BL/6マウスに3% DSSを5日間自由飲水させDSS大腸炎を誘発させた。20または40mg/kg DTCM-Gを1日2回10日間腹腔内投与し臨床病理学的所見を対照群と比較した。③RAW264.7を用い、0-10μg/ml DTCM-Gの1μg/mlLPS刺激によるIL-6、TNF-α産生の抑制効果をELISA法により評価した。また、7.5μg/mlDTCM-Gの1μg/mlLPS刺激によるPDK1、AKT、GSK-3β、c-Raf、p70^{S6K}リン酸化抑制効果をwestern blot法により評価した。

【結果】①40mg/kgのDTCM-GはTNBS腸炎において、2-4日目のDisease Activity Index (DAI) を軽快させた。4

日目の体重減少を抑制し (Fig. 1)、腸炎肉眼スコアの改善、腸管短縮抑制、腸閉塞抑制、組織診/組織スコアの改善、MPO活性抑制において、著明な腸炎抑制効果を認めた。組織の免疫染色では2日目のF4/80陽性Mφ (Fig. 2左)、CD4陽性T細胞と2、4日目のMPO陽性好中球の浸潤を抑制した。2日目の単離LPMCの解析で、DTCM-GはCD11b陽性Mφ、CD4陽性T細胞数を減少させ、腸管組織のTNF-α (Fig. 2右)、IL-6、MCP-1、IFN-γのmRNA発現を抑制した。②DSS腸炎では、6-10日目の体重減少、DAI (Fig. 3) を軽快させ、組織所見の改善を認めた。③DTCM-GはRAW264.7に於いてLPS刺激によるTNF-α、IL-6産生を抑制し、GSK-3β serine9リン酸化を亢進させた。

【考察】DTCM-Gは、2つのマウス炎症性腸疾患モデルで、強力な腸炎抑制効果を発揮し、CD4T細胞、Mφの浸潤を抑制した。また、Mφに対するサイトカイン産生抑制、GSK-3β活性抑制と腸炎抑制効果の関連が考えられた。

【結語】DTCM-Gの炎症性腸疾患における新たな治療薬としての可能性が示唆された。

Fig. 1 TNBS 腸炎における体重減少抑制

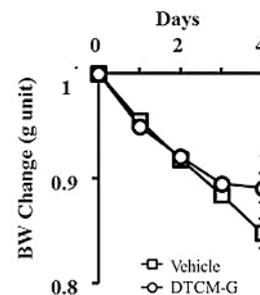


Fig. 2 TNBS 腸炎におけるマクロファージ浸潤抑制 (左) と TNF-α mRNA 発現抑制 (右)

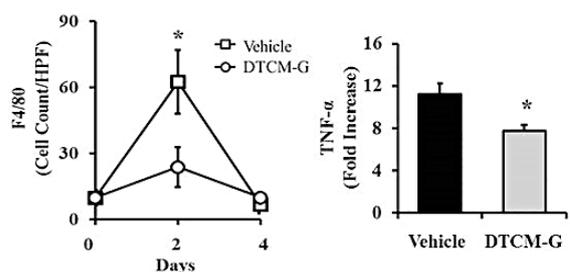
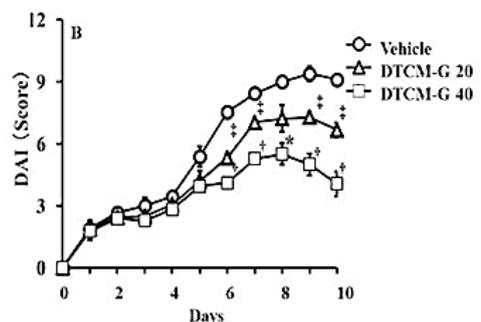


Fig. 3 DSS 腸炎における DAI 改善効果



研究費一覧

種別	事業名	研究代表者	研究分担者	交付額 (分担金配分額)	研究課題名	
科研費	基盤研究 (B)	武富 紹信		4,800,000	炎症性腸疾患における神経ペプチドシグナルの制御機構解明と疾患治療への応用	
	挑戦的萌芽研究	武富 紹信		1,500,000	肝臓グラフトへの移植前siRNA導入による肝炎ウイルス再感染予防法の開発	
	基盤研究 (S)	(前原 喜彦)	武富 紹信	(500,000)	がん幹細胞化に関するSphere形成メカニズムを標的とした革新的治療開発	
	基盤研究 (C)	神山 俊哉		1,200,000	肝癌細胞株における糖鎖異常と浸潤能との関連性の解析	
	基盤研究 (S)	(西村紳一郎)	神山 俊哉	(1,000,000)	網羅的糖鎖解析による新規癌マーカーの探索と診断技術の開発	
	基盤研究 (B)	嶋村 剛		5,400,000	脂肪肝グラフトのミトコンドリア機能と抗酸化能を増強する画期的な肝体外灌流法の開発	
	基盤研究 (C)	高橋 典彦		1,400,000	IL-6による免疫抑制を介した大腸がん肝転移機構の解明と新規治療法開発	
	基盤研究 (A)	山下健一郎		4,700,000	体外誘導免疫制御性リンパ球を用いた細胞治療による免疫寛容誘導に関する研究	
	基盤研究 (C)	崎浜 秀康		700,000	消化器癌の微小転移同定システムの臨床応用	
	基盤研究 (C)	本多 昌平		1,300,000	肝芽腫の発生・進展過程におけるDNAメチル化異常の解明	
	基盤研究 (A)	(檜山 英三)	本多 昌平	(500,000)	小児がん研究グループによる小児肝がんの海外診療状況調査と国際共同臨床研究基盤整備	
	基盤研究 (C)	後藤 了一		1,700,000	ヒト血管移植片に対する抗ドナー抗体の病的意義と免疫抑制性細胞による治療効果の検討	
	挑戦的萌芽研究	三野 和宏		1,400,000	遺伝子導入を用いずに移植片のシャペロン発現を体外で調節する方法の開発	
	挑戦的萌芽研究	砂原 正男		1,100,000	肝芽腫局所進展に関わるドライバージェノム変異の解明	
	若手研究 (B)	柿坂 達彦		700,000	血漿タンパク質LRGの翻訳後修飾に着目した膵癌早期診断マーカーの解析	
	若手研究 (B)	柴崎 晋		900,000	EMTに注目した胃癌における循環・骨髄腫瘍細胞の臨床的意義の検討	
	若手研究 (B)	財津 雅昭		1,500,000	慢性拒絶反応における血管平滑筋細胞に対する制御性T細胞の効果の検討	
	若手研究 (B)	島田 慎吾		1,200,000	脂肪切除後の分子病態解明と抗酸化能増強による易障害性・易転移性克服法の開発	
	AMED・厚労科研	日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 ii	(溝上 雅史)	武富 紹信	(10,000,000)	人工キメラ遺伝子と肝臓特異的な輸送担体の開発を基盤とした肝臓内HBVDNA不活化を目指した新規治療法の開発
		日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 i	(考藤 達哉)	武富 紹信	(2,600,000)	非炎症性肝がんに関する微小環境の解明に基づく病態関連マーカーと治療法の開発
日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 i		(松浦 善治)	武富 紹信	(1,750,000)	O型肝炎の病態の解明と肝癌発症制御法の確立に関する研究	
日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 i		(徳永 勝士)	武富 紹信	(1,300,000)	ゲノム網羅的解析によるB型肝炎ウイルス感染の病態関連遺伝子の同定と新規診断法の開発	
日本医療研究開発機構 感染症実用化研究事業 肝炎等克服実用化研究事業 i		(前原 喜彦)	武富 紹信	(700,000)	多施設共同による肝移植後肝炎ウイルス新規治療の確立と標準化	
厚生労働行政推進調査事業費補助金 エイズ対策政策研究事業		(江口 晋)	嶋村 剛	(500,000)	血液製剤によるHIV/HCV重複感染患者の肝移植に関する研究	
日本医療研究開発機構 未来医療を実現する医療機器・システム研究開発事業		(白土 博樹)	横尾 英樹	(500,000)	医療情報の高度利用による医療システムの研究開発	
その他	秋山記念生命科学振興財団	武富 紹信		1,000,000	ジアシルグリセロールキナーゼを標的とした革新的肝癌治療法の開発研究	
	公益信託 楡刀会外科医学研究助成基金	本間 重紀		500,000	消化器癌再発における上皮間葉転換した循環腫瘍細胞の意義とその精密な検出法の開発	
	第22回伊藤財団交流助成	本多 昌平		300,000	肺芽腫の発生・進展とエピジェネティック異常	

2016年の年表・年間行事

2016年の年表・年間行事

月	医局行事	学会	研究会・特別講演・セミナーなど
1月	1.4 仕事始め	1.15 第84回大腸癌研究会	1.8 New Year Seminar 2016
	1.14 第2回縫合結紮競技会	1.20 第19回札幌肝不全懇話会	1.9 日本外科学会北海道地区生涯教育セミナー
	1.23 教室総会	1.23 第35回北海道腎移植懇話会	1.26 第13回モーニングセミナー
	1.27 第2回消化器外科I縫合結紮講習会		
2月		2.12 第4回北海道小児外科フォーラム	2.5 第3回医工連携セミナー
		2.14 第43回日本集中治療医学会	2.12 北海道小児外科フォーラム
		2.27 第104回北海道外科学会	
3月	3.11-12 アニマルラボ	3.1-3 New Key Opinion Leaders Meeting (Bangkok, Thailand)	3.19 日本消化器病学会北海道支部第18回教育講演会
	3.12 第10回医局対抗バスケットボール大会	3.3-4 第52回日本腹部救急医学会総会	
	3.15 平成28年度3月修了学位審査「公開発表会」	3.3-5 第43回脾・膵島移植研究会	
	3.17 第3回縫合結紮競技会	3.5 第15回東日本肝移植周術期研究会	
	3.23 消化器外科I送別会(人事異動)	3.5 第94回日本小児外科学会北海道地方会	
		3.5-6 第118回消化器病学会北海道支部例会	
		3.12 第28回日本小腸移植研究会	
		3.17-19 第88回日本胃癌学会総会	
		3.19 日本消化器病学会北海道支部第18回教育講演会	
		3.25 Samsung Medical Center Organ Transplantation Symposium (Seoul, Korea)	
4月	(人事異動)	4.2 第6回東京・神奈川劇症肝炎研究会	4.9 第3回北海道肝胆膵内視鏡外科セミナー
	4.1 年度始めの会	4.4-6 22th International Liver Transplant Society annual international congress	
	後期研修医3名が入局	4.8-9 Transplantation Science Symposium (TSS) Asian Regional Meeting 2016	
	4.15 日本外科学会定期学術集会 第一外科同門親睦会	4.14-4.16 第116回日本外科学会定期学術集会	
	4.27 7-2病棟歓迎会	4.21-23 第102回日本消化器病学会総会	
		4.24-28 The 49th Pacific Association of Pediatric Surgeons	
		4.27 第20回札幌肝不全懇話会	
5月	5.25 消化器外科I縫合結紮講習会	5.11-13 XXVIII Congress of the Scandinavian Transplantation Society	5.14 第3回北海道手術手技研究会
	5.29 医局対抗野球	5.21 第70回手術手技研究会	5.28 第12回日本癌治療学会アップデート教育コース
		5.24-26 第53回日本小児外科学会学術集会	
		5.24-26 The 24th Congress of the Asian Association of Pediatric Surgeons	
6月	6.4 北海道大学第一外科同門会「検刀会」総会 平成28年度新入会員歓迎会	6.2-4 第28回日本肝胆膵外科学会学術集会	6.11 第3回北海道ヘルニア倶楽部
	6.11 人材確保委員会	6.11-15 American Transplant Congress	6.25 第22回北海道内視鏡外科研究会
	6.27 研修医お疲れ様会	6.15-17 第41回日本外科系連合学会学術集会	6.28 第14回モーニングセミナー
		6.25 第22回北海道内視鏡外科研究会	
	6.25 第27回北海道肝がん研究会		
7月	7.9-10 第3回7-2病棟・医局旅行	7.1 第85回大腸癌研究会	7.29 第4回北海道消化器癌カンファレンス
	7.11 6年生選択実習慰労会	7.1-2 第52回日本肝臓研究会	
	7.23 wet labo	7.2 第109回日本臨床外科学会北海道支部例会	
		7.6 第11回小児肝移植懇話会	
		7.7-8 第34回日本肝移植研究会	
		7.7-9 第51回日本小児腎臓病学会学術集会	
		7.14-16 第71回日本消化器外科学会総会	
	7.27-29 第21回日本癌免疫学会学術総会		
8月	8.19-20 アニマルラボ	8.3 The international Association of Surgeons, Gastroenterologists and Oncologists Continuing Medical Education: Advanced Post-Graduate Course in Sendai	8.6 第5回札幌VTRカンファレンス
		8.19-20 第43回日本膵切研究会	
		8.18-23 26th international congress of The Transplantation Society	
		8.20 第18回北海道肝イメージ研究会	
		8.27-28 モンゴル国際がんシンポジウム	
9月	9.2 消化器外科I・医局説明会	9.3 第8回血液疾患免疫療法学会学術総会	9.17 第3回北海道サージカルアカデミー
		9.3-4 第119回日本消化器病学会北海道支部例会	9.24 第4回北海道サージカルフォーラム
		9.5 第95回日本小児外科学会北海道地方会	
		9.9-11 International Liver Cancer Association 2016	
		9.12 平成28年度ライオンズクラブ国際協会331-A地区献血推進セミナー	
		9.15-16 第27回日本消化器癌発生学会総会	
		9.16-17 第35回Microwave Surgery研究会	
		9.17 第22回北海道肝移植適応研究会	
		9.29-10.1 第52回日本移植学会	
10月	10.16 アニマルラボ	10.6-8 第75回日本癌学会学術総会	10.1 第2回敗血症性DICセミナー
		10.8 第6回TALTフォーラム (Trans-ARIAKE Liver Transplantation Forum)	10.14 第4回North Japan Cancer Forum
		10.9 第35回日本心臓移植研究会	10.28 第1回札幌外科漢方セミナー
		10.15 第11回膵癌術前治療研究会	
		10.15 第37回日本大腸肛門病学会北海道地方会	
		10.22-24 第25回日本組織適合性学会総会	
		10.23-26 40th world congress of the international college of surgeon	
		10.27 第15回LPEC研究会	
		10.29 Asian Transplantation Week 2016, The 11th Korea Japan Transplantation Forum	
		10.29 第105回北海道外科学会	
11月	11.12 関連施設連絡会議	11.3-6 第14回日本消化器外科学会大会	11.8 第15回モーニングセミナー
	11.27 医局対抗サッカー大会 予選リーグ	11.9-12 The 15th World congress of endoscopic surgery/ ELSA 2106	11.11 第5回北海道サージカル・インフュージョン・フォーラム
		11.11-15 AASLD Liver Meeting 2016	11.18 Surgical oncology meeting -HCC treatment-
		11.12 第33回北海道ストーマリハビリテーション研究会	
		11.18-19 第71回日本大腸肛門病学会学術集会	
		11.23 第10回肝臓内視鏡外科研究会	
		11.23 北海道移植医療推進協議会主催 移植者のつどい2016	
		11.23-26 40th World Congress of the International College of Surgeons	
		11.24-26 第78回日本臨床外科学会総会	
		11.26-27 第43回日本臓器保存生物医学学会学術集会	
12月	12.3 北海道大学第一外科同門会「検刀会」忘年会	12.3 第110回日本臨床外科学会北海道支部例会	
	12.3 医局対抗サッカー大会 決勝トーナメント	12.5-7 第45回日本免疫学会学術総会	
	12.14 7-2病棟忘年会	12.8-10 第29回日本内視鏡外科学会総会	
	12.28 仕事納め	12.17 第58回日本小児血液・がん学会学術集会	

1/4

平成28年1月4日、医局カンファレンスルームで仕事始めの会を行いました。

年末年始の休暇や出張明けではありましたが、全員が疲れた感じもなく出席されました。

仕事初めにあたり武富教授より挨拶がありました。その中で語られたDale Breckenridge Carnegie（デール・カーネギー）の著書「人を動かす」の一節『Today is life - the only life you are sure of.（人生とは今日一日のことである。あなたが確実に生きられる唯一の人生は今日なのである。）』。

当たり前のことを当たり前のよう毎日行っていくということは簡単なことではありませんが、自分のすべきことを今日一日精一杯がんばって悔いのない一日、そして一年を過ごしていきたいと感じました。

本年も消化器外科Ⅰ全員で、前述の言葉を実践できるよう診療・研究・教育に携わっていきます。



1/8

New Year Seminar 2016が 開催されました。

平成28年1月8日、ホテルニューオータニイン札幌にて、New Year Seminar 2016が開催されました。当科 武富紹信教授の座長のもと、群馬大学大学院医学研究科 病態腫瘍制御学講座 肝胆脾外科学分野 教授 調憲先生をお招きし、「大腸がん肝転移に対する外科切除を主軸とした集学的治療」について御講演頂きました。大腸がん治療における化学療法の背景から、肝転移に対する外科治療の現在の位置付け、今後の発展と盛り沢山の内容を拝聴させて頂きました。特に、肝切除を切り札とした大腸がん治療のマネジメントに関しては、フロアーのSpecialistの先生方も交えて、大変活発なdiscussionが行われていました。

多数の先生方に御参加頂き、講演会後の懇親会も大変盛況な会となりました。御講演頂いた調教授、御参加頂いた皆様に御礼申し上げます。



1/9

平成27年度日本外科学会北海道地区生涯教育セミナーが開催されました。

平成28年1月9日、北海道大学医学部学友会館フラテにて、平成27年度日本外科学会北海道地区生涯教育セミナーが開催されました。今回は「甲状腺、上皮小体、副腎の外科」のテーマで、7名の講師の先生方に御講演頂きました。

解剖・生理学の基礎的な内容から、画像診断・病理診断・現在の先端領域の治療と臨床の分野に渡って、幅広く勉強になる内容でありました。専門的な分野についての講演を拝聴できる貴重な機会であったため、参加者は約150名にもものぼり、大変盛況なセミナーとなりました。

円滑な運営を行って頂いた事務局の方々、司会と講師として御協力頂きました諸先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

来年度のセミナーも何卒よろしくお願いいたします。



1/14

第2回縫合結紮競技会が開催されました。

2016年1月14日、医局カンファレンスルームにて第2回縫合結紮競技会が開催されました。

武富教授をはじめとする教員が見守る中、『co-axial position：針挿入→両手結び3回→缺で糸切・針抜き』のタイムを競いました。今回は後期研修医7名が参加致しました。

前回9月10日の第1回大会では、殆どの参加者が普段の実力を発揮できませんでしたが、今回は全員が大崩れすることなくタスクを完了し、平均タイムも1分43秒と、前回の2分17秒から大幅な短縮を果たすことができました。

優勝は1分19秒の矢部先生。第1回大会の優勝者ということで開始前はプレッシャーがかかっていたかと思いますが、安定の手技で見事連覇を飾りました。おめでとうございます。

最後は川村秀樹先生から、参加者の縫合結紮手技に関する修正点・不足点を指摘していただきました。

実臨床で通用するための縫合結紮手技を得るべく今後もトレーニングを継続し、本年度最後の第3回大会（3月下旬開催予定）で優勝を目指して頑張ってくださいと思います。



1/23 教室総会を開催しました。

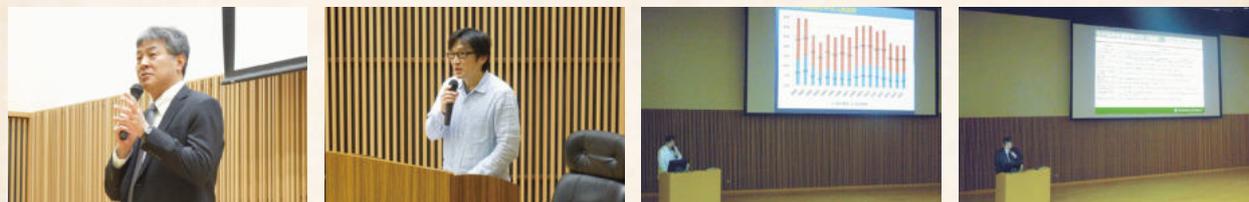
2016年1月23日、医学部学生会館プラテホールで消化器外科 I の教室総会が開催され、大学・関連施設から数十名の先生方が参加されました。

今年は札幌厚生病院の田原宗徳先生が議長に選出され、会の進行をしていただきました。

例年通り、外来・病棟・内務報告とあり、その後、乳腺外科を含む臨床6グループ（小児・消化管・肝・胆膵・移植）、研究グループより今年度の成績や今後の目標などが示されました。また本間重紀先生が来年度も引き続き医局長を務めることが発表されました。

武富教授の挨拶にもありましたが、関連施設の先生方だけでなく、大学に勤めている先生方も、現状の大学で行っている臨床・基礎研究や成績を知るととても良い機会になったと感じます。

教室総会後は、医局カンファレンスルームで顔見せ会があり、大学・関連施設の先生方が近況を報告しあい、今後へ向けて、気持ちを新たにされていました。



1/26 第13回モーニングセミナーが開催されました。

平成28年1月26日、医局カンファレンスルームにて第13回モーニングセミナーを開催致しました。今回の講師には、北海道大学遺伝子制御研究所 プロバイオティクス・免疫学 教授 宮崎忠昭先生をお招きし、「腸管免疫を介した感染症、免疫疾患、癌の予防・治療を目指したプロバイオティクスの応用利用」という題目でお話いただきました。

プロバイオティクスは、乳酸菌・ビフィズス菌などを含む製品・食品であるため馴染みがあり人体に対して良い影響があることは知ってはおりましたが、プロバイオティクスの免疫調整機構、さらには発癌・転移に関わる最新の話まで詳しくご講演頂き非常に刺激になりました。

これまで宮崎先生から直接ご指導いただく環境にはありませんでしたが、本日の講演内容も当教室の疾患領域に関連が強く、今後、臨床・研究を通して連携を深めていければ少しでも医療の発展に寄与できるのではないかと感じました。

消化器外科 I
第13回モーニングセミナー

北海道大学遺伝子制御研究所
プロバイオティクス・免疫学 教授
宮崎 忠昭 先生

**「腸管免疫を介した感染症、免疫疾患、癌の予防・治療を
目指したプロバイオティクスの応用利用」**

日時：2016年1月26日（火） 7:30 - 8:30
場所：消化器外科 I 医局カンファレンスルーム

お問い合わせ：石黒（内線：5927）



1/27

第2回消化器外科 I 縫合結紮講習会を開催しました。

平成28年1月27日、本年度2回目の縫合結紮講習会を開催しました。

5月の第1回講習会と同様に、「糸結び（男/女結び、外科結紮）」「鑷子・持針器での縫合結紮」の内容を実技指導形式で行いました。

当日は医学部4年生・5年生、計11名の方々に御参加いただきました。

参加された学生の皆様は大変熱心に取り組んでおりました。会終了後のアンケートでも『あやふやだった糸結びの手法が改めて学べた』、『ほぼマンツーマンで指導してくれて良かった』、『実際に使われる結紮・縫合を教えてくれて良かった』と、大変ありがたいコメントをたくさんいただきました。

御参加いただいた学生の皆様方、講習会でお手伝いいただいた先生方、ありがとうございました。今後も実りのある講習会を企画していきますので是非御参加ください。

知らなかったら、教えてもらって
忘れていたら、また思い出して
縫合結紮を自分のモノにしよう

消化器外科 | 縫合結紮講習会
2016年1月27日(水)17:00~19:00 医局内カンファレンスルーム
対象：医学部4~6年生の皆様 事前申込みです(当日参加も歓迎です)
【お申込み先】担当 下園 011-706-5927 (医局) t.shimokuni19720421@gmail.com



2/4

大野陽介先生の学位論文がCancer Immunology, Immunotherapy誌の表紙を飾りました。

大野陽介先生（平成18年卒、現函館市立病院）の学位論文FigureがCancer Immunology, Immunotherapy誌（2016年2月号、IF=3.941）の表紙に取り上げられました。医学雑誌表紙には学術的価値が高く、視覚的にも注目を集めるFigureが取り上げられます。直接研究のご指導を頂いた北大遺伝子病制御研究所の北村秀光先生に感謝するとともに、大野先生のこれからの益々の研鑽に期待します。

IL-6 down-regulates HLA class II expression and IL-12 production of human dendritic cells to impair activation of antigen-specific CD4⁺ T cells

Yosuke Ohno, Hidemitsu Kitamura, Norihiko Takahashi, Junya Ohtake, Shun Kaneumi, Kentaro Sumida, Shigenori Homma, Hideki Kawamura, et al

Cancer Immunology, Immunotherapy
ISSN 0540-7004
Volume 65
Number 2
Cancer Immunol Immunother (2016)
65:193-204
DOI 10.1007/s00262-015-1791-4

Cancer Immunology, Immunotherapy
Volume 65, Number 2 February 2016

HLA-DR CD4 CD8
HLA-DR Grade 0
HLA-DR Grade 1
HLA-DR Grade 2

Springer

2/5 第3回医工連携セミナーが開催されました。

2016年2月5日(金)、ホテルオークラ札幌にて、第3回医工連携セミナーが開催されました。

座長にKKR札幌医療センター 消化器外科 診療部長 小池雅彦先生のもと、一般演題として、当科 川村秀樹先生より「工学的解析に見る熟練者と非熟練者の鏡視下操作の力学的差異」を御講演いただきました。

また特別講演として当科 武富紹信教授の座長のもと、メディカルトピア草加病院 院長・外科診療顧問 金平永二先生をお招きし、「low-techで下町から世界へ」を御講演いただきました。日々の診療や手術中に感じるDiscontent (不満) から生まれたideaをいかにして実用化していくかについて、これまでの経験や失敗談を踏まえて大変わかりやすく説明してください、金平先生の医療機器開発への意欲・熱意が強く伝わるものでした。自分のアイデアを具体化することに関しては誰もが強く興味を持つテーマであり、フロアの先生方を交えて大変活発なdiscussionが行われました。

消化器外科 I、同門の先生方をはじめとする多数の先生方にご参加いただき、講演会・懇親会どちらも大変盛況な会となりました。ご講演いただきました金平先生、ご参加いただきました皆様に御礼申し上げます。



第3回 医工連携セミナー

日 時：2016年2月5日(金) 19:00～21:00
 会 場：ホテルオークラ札幌 2F「フォウンテーン」(札幌市中央区南一条西5丁目 TEL:011-221-2333)

I. 製品紹介 コヴィディエン ジャパン株式会社

II. 一般演題
「工学的解析で見る熟練者と非熟練者の鏡視下操作の力学的差異」
 司 会：小池 雅彦 先生 / KKR札幌医療センター 消化器外科 診療部長
 講 者：川村 秀樹 先生 / 北海道大学病院 消化器外科 特任講師

III. 特別講演
「low-techで下町から世界へ」
 司 会：武富 紹信 先生 / 北海道大学大学院工学研究科 消化器外科学分野 教授
 講 者：金平 永二 先生 / メディカルトピア草加病院 院長・外科診療顧問
 出席し後に懇親会を予定しております。

募集定員：50名

主催：コヴィディエン ジャパン株式会社

ホテルオークラ札幌 2F「フォウンテーン」
 札幌市中央区南一条西5丁目 TEL:011-221-2333

周辺広域図 **周辺詳細図**

※本館の2階は、少人数でご利用いただけます。
 ※本館の2階は、少人数でご利用いただけます。
 ※本館の2階は、少人数でご利用いただけます。

3/7 リサーチ大学院生送別会を行いました。

3月7日、リサーチ大学院生送別会を行いました。

今年は、大学での研究者としては湊先生、相山先生、石川先生が研究を終え臨床に復帰します。三人からはリサーチ期間を振り返っていただき、会も大いに盛り上がりました。今後はリサーチの期間で得た考え方やプレゼンテーションなどを次のステップで存分に活かして、ご活躍ください。僕たちも次に続けるよう頑張りたいと改めて感じる会でした。



3/11 アニマルラボが開催されました。

平成28年3月11日～12日、神奈川県川崎市のトレーニングセンターにて、豚の腹腔鏡下手術トレーニングに参加しました。

講師に旭川厚生病院の船越徹先生、当科の吉田雅先生をお招きし、当科・川村秀樹先生の監督のもと、後期研修医9名で3チームに分かれてトレーニングを行いました。各チームに講師の先生1名がつき、「縫合結紮」、「幽門側胃切除」、「高位前方切除」をメインの課題としてタスクに取り組みました。研修医は手術の要所ごとに術者、助手、スコピストの役割を交代し、手術手技や場の展開、器械の特徴を踏まえた使用方法に至るまで、広く指導を受けることができました。普段練習しているドライボックスとは異なり、他臓器の損傷や出血への対応など、より実際に近いかたちでのトレーニングができ、大変勉強になりました。

講師の先生方、諸関係の皆様には厚く御礼申し上げます。今回学んだ事は、必ず今後の治療に生かすべく日々努力を続けてゆきます。



3/12 第10回医局対抗バスケットボール大会で優勝いたしました。

2016年3月12日（土）に札幌市東区体育館にて、第10回医局対抗バスケットボール大会が開催されました。

参加チームは、第一外科、形成外科、第二内科、整形外科、脳神経外科、麻酔科、産婦人科、皮膚科の8チームでした。

予選リーグは1勝1敗の2位通過で決勝トーナメントにすすみ、準決勝は整形外科に24-9で勝利し、決勝は予選リーグで負けた形成との再戦でした。

前半はリードされてしまいましたが、後半見事に逆転し17-12で6年ぶりに悲願の優勝を勝ち取ることができました。

第1～3回大会の3連覇以降は予選リーグで敗退するなど、なかなか勝てない時代が続いていましたが、第7回大会（4位）、第8回大会（3位）、第9回大会（準優勝）と徐々に成績を上げ、今年は若手の台頭もあり、今後、常勝チームになれる可能性が確認できた大会でもありました。

打ち上げは優勝カップで美酒に酔いしれ、大変楽しいひとときを過ごさせていただきました。

今回は、釧路、室蘭、函館と遠方から若手の先生が参戦してくれました。

ご理解・ご協力いただきました各関連病院の上司の先生方に対しこの場を借りて感謝申し上げます。

誠にありがとうございました。



3/15 平成28年度3月修了 学位審査「公开发表会」が行われました。

平成28年度3月学位取得者が決定し、学位審査「最終審査」に係る公开发表会が行われました。

司会進行は当分野特任講師 川村秀樹先生がご担当され、山田健司先生（平成21年入局・学位論文タイトル「腫瘍血管内皮マーカーであるCXCR7の腫瘍血管内皮における機能解析に関する研究（A functional analysis of CXCR7 expressed in tumor endothelial cells）」）が発表されました。

山田先生、おめでとうございます。

これからの益々の研鑽を期待したいと思います。



3/17 第3回縫合結紮競技会が開催されました。

2016年3月17日、医局カンファレンスルームにて、本年度最後の第3回縫合結紮競技会が開催されました。今回は後期研修医5名の参加でした。

優勝は1分25秒の佐野先生。もともと優勝できる力は充分に持っておりましたが、第1回大会では記録なし、第2回大会は他院当直で不参加と、日の目を見ない状態が続いておりました。今回実力を遺憾なく発揮し、最後に見事優勝することができました。おめでとうございます。

今回は参加者の平均タイムが1分45秒と、前回大幅な短縮を果たした1分43秒から少し悪い結果となってしまいました。日々の業務が多忙で同情すべきところはありますが、来年度以降自分が執刀する患者さんのためと思って、今後もトレーニングを継続して行って欲しいと思います。

研修医の先生方、大変おつかれさまでした。また競技会に御参加・御支援いただいた武富先生・神山先生・スタッフの先生方に感謝申し上げます。



3/19 日本消化器病学会北海道支部 第18回教育講演会を開催いたしました。

2016年3月19日（土）、武富紹信教授の会長のもと消化器病学会北海道支部第18回教育講演会が札幌医科大学臨床教育研究棟1階講堂にて開催されました。

北海道大学大学院医学研究科消化器内科学分野 坂本直哉教授より「ウイルス性肝炎の最新の知見」について、北海道大学病院消化器外科 I 本間重紀先生より「炎症性腸疾患診療の外科治療」について、名古屋大学大学院医学系研究科腫瘍外科学 柳野正人教授より「肝門部胆管狭窄の診断と治療」について、イムス札幌消化器中央総合病院 丹野誠志先生より「IPMN診療のup to date」について、KKR札幌医療センター斗南病院化学療法・点滴センター 辻靖先生より「大腸癌化学療法のup to date」についてご講演いただきました。

私たちの分野における日常診療で遭遇する様々な疑問から、消化器疾患の研究や臨床試験を含めた最新の情報に至るまで、大変勉強になりました。またお忙しい中遠方より御越しいただいた名古屋大学大学院医学系研究科腫瘍外科学 柳野正人教授の講演では教室の膨大な研究成果を御提示いただき、大変感銘を受けました。

およそ300名の方に御参加いただき、大変盛況な講演会となりました。また、講演会の前日には柳野先生をお招きして懇親会が開催されました。懇親会でも、実際の手術手技や日々の診断・治療に関して真に迫った議論が交わされおおいに盛り上がりました。

御講演いただきました諸先生方、御参加いただきました皆様はこの場を借りて心より御礼申し上げます。



3/23 消化器外科 I 送別会を行いました。

3月23日（水）毎年恒例の送別会を開催致しました。

医師17名、看護師5名の合計22名の送別となりました。一次会は送別される方々にご挨拶頂きました。下國先生には思い出や抱負を頂きました。敦賀先生と蒲池先生のやりとりは熱いものがありました。

二次会は思い切りはじけて盛り上がりました。崎浜先生、細田先生、財津先生も盛り上げて下さいました。三次会以降もそれぞれ盛り上がったそうです…。

あいにくの雪でしたが、素敵な会になったのでは、と思っています。

最後に、後期研修医の先生より一句、

「いと伸びた 知識の幅より 芸の幅 (い……ち……げ……)」

(多彩な能力を持つ今年の後期研修医の先生方は芸でも賞を頂きました。しかしこれは謙遜であり、プレゼンテーション能力、判断力、手技などすべて着実に実力をつけられての旅立ちです。)



4/1 ご挨拶

JCHO登別病院長 伊藤美夫

平成28年4月1日付でJCHO登別病院長に任命されました。

昨年11月、来年度からJCHO登別病院の院長をお願いしたいと、JCHO本部からの要請がありました。これまでの勤務は北大第一外科関連病院間での異動でしたので少し戸惑いましたが、私でもお役に立つのであればと思います、武富教授の了解を得て、お引き受けいたしました。

地域医療機能推進機構（Japan Community Health care Organization：JCHO）は社会保険病院、厚生年金病院、船員保険病院をまとめて平成26年から運営することになった新しい組織です。全国で57病院あり、北海道には既にお馴染みの北辰病院、北海道病院と当院の3病院があります。まだ誕生したばかりの組織で国立病院機構から主に事務関係者が数多く異動して組織改革に取り組んでおります。

当院は厚生年金病院を引き継いでいますが、病院の老朽化と、今後の診療体制が問題とされています。これに対し現在JCHO本部と登別市とで病院の新築移転の構想が進行中です。

初めての地での仕事なので、まずは病院のスタッフ、地元の医師会、住民に快く受け入れて頂けることを第一に考えています。近隣の室蘭市、苫小牧市には第一外科の関連病院が数多くあり、心強さを感じています。環境の変化に対する適応力はまだ十分あると自分に言い聞かせて、前向きに取り組んでいきたいと思っています。教室、同門の皆様方には今後とも変わらぬ御指導、御鞭撻のほどよろしくお願いいたします。



4/1

平成28年度 年度始めの会を行いました。

平成28年4月1日、医局カンファレンスルームで年度始めの会を行いました。

人事異動により新たに永生先生、市川先生、大野先生、湊先生の4名を始め、Senior fellow5名、新入局員3名、大学院生5名を迎え、総勢54人で本年度の消化器外科Ⅰがスタートしました。新たに迎えた先生方は、皆それぞれに今後の目標を話され、特に、新入局員の3名は不安を隠しきれないものの、期待と高いモチベーションを示してくれました。

また、年度初めにあたり武富教授より挨拶があり、今年の目標として、年初めの会でも語られたDale Breckenridge Carnegie (デール・カーネギー) の著書「人を動かす」の一節『Today is life - the only life you are sure of. (人生とは今日一日のことである。あなたが確実に生きられる唯一の人生は今日なのである。)]を再度説明され、皆、気持ちを新たにしていました。

本年度も消化器外科Ⅰ全員で、前述の言葉を実践できるよう日々の積み重ねを大切に、診療・研究・教育に携わっていきます。



4/9

第3回北海道肝胆膵内視鏡外科 セミナーが開催されました。

2016年4月9日(土)、京王プラザホテル札幌にて、第3回北海道肝胆膵内視鏡外科セミナーが開催されました。

座長に当科 蒲池浩文先生のもと、一般演題として、札幌厚生病院 田原宗徳先生より「形成異常のある膵臓に対する手術」としてpancreas divisumを持つ症例の手術について、市立函館病院 砂原正男先生より「腹腔鏡下側膵切除術」として実際の手術動画を供覧いただきながら腹腔鏡下手術のポイントをご講演いただきました。

また特別講演として当科 武富紹信教授の座長のもと、日本医科大学 消化器外科 准教授 中村慶春先生をお招きし、「腹腔鏡下膵切除の標準化に向けた取り組み」を御講演いただきました。

腹腔鏡下膵切除の導入から現在に至るまで、これまでの経験を踏まえて大変わかりやすく説明していただき、腹腔鏡下膵切除の今後の可能性を感じることができました。

また現在、実際の手術動画の解説や、腹腔鏡下膵切除術が行われていない施設で、どのように導入していくか、具体的な方法も説明いただき、大変興味深い内容で、フロアの先生方を交えて活発なdiscussionが行われました。

当日は多くの先生方にご参加いただき、講演会・懇親会ともに大変盛況な会となりました。ご講演いただきました中村先生、ご参加いただきました皆様に御礼申し上げます。

第3回
北海道肝胆膵
内視鏡外科セミナー

2016.4.9 [Sat] 16:00-18:00
京王プラザホテル 3F 「扉の間」
北海道札幌市中央区北4条西7丁目
製品説明 (16:00-16:15) ジョーンソン・エンド・ジョーンソン株式会社

一般演題 (16:15-16:50)

講師 蒲池 浩文 先生 / 北海道大学大学院医学研究科
消化器外科分科Ⅰ

講師 田原 宗徳 先生 / 札幌厚生病院 外科
砂原 正男 先生 / 市立函館病院 外科

特別講演 (17:00-18:00)

「腹腔鏡下膵切除の標準化に向けた取り組み」

講師 武富 紹信 先生 / 北海道大学大学院医学研究科
消化器外科分科Ⅰ 教授

演者 | 中村 慶春 先生 / 日本医科大学 消化器外科 准教授

*18:00よりフロアにて懇親交流会の会場をご用意しております。

ETHICON



4/14 島田慎吾医員が日本外科学会研究奨励賞を受賞

当科の島田慎吾医員が第116回日本外科学会にて日本外科学会研究奨励賞を受賞しました。

昨年1年間に学会機関誌Surgery Today誌に掲載された論文の中から投票審査にて優秀論文として認められたものです。開会式直後に授賞式と記念講演が行われました。おめでとうございます。今後の益々の研鑽を期待しております。

受賞論文：Hydrogen sulfide augments survival signals in warm ischemia and reperfusion of the mouse liver.
Shimada S, Fukai M, Wakayama K, Ishikawa T, Kobayashi N, Kimura T, Yamashita K, Kamiyama T, Shimamura T, Taketomi A, Todo S.

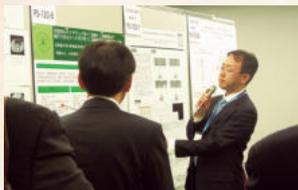
Surg Today. 2015 Jul ; 45 (7) : 892-903.

<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/25362520>



4/14 第116回日本外科学会定期学術集会にて教室から48演題が発表されました。

平成28年4月14日～16日 大阪国際会議場・リーガロイヤルホテル大阪にて、第116回日本外科学会定期学術集会が開催されました。医局からは30演題、関連病院からは18演題が発表され、質疑応答も活発に交わされました。今後の臨床・研究に活かすことができる、大変有意義な学会となりました。



4/15 平成28年度第一外科同門親睦会が開催されました。

平成28年4月15日(金) 第116回日本外科学会定期学術集会の会期中に、日本料理 八幸にて、平成28年度第一外科同門親睦会が開催されました。

道内各地の関連病院からだけでなく、大阪、名古屋にて国内留学中の先生も含め総勢41名が参集いたしました。近況報告や懐かしい昔話に花が咲き、大変盛況な会となりました。

ご参加いただきました先生方、お忙しい中ご都合をつけていただきまして、誠にありがとうございました。



4/27 7-2病棟歓迎会を行いました。

平成28年4月27日、大学病棟勤務で戻られた先生方、研究を開始する先生方、新規に消化器外科 I / 乳腺外科に入局された先生方、及び7-2病棟に勤務されることになった看護師さん方を対象に歓迎会が開催されました。

関連病院勤務から戻られた先生方は一回りも二回りも大きくなっており、また入局されたフレッシュな先生方からは緊張とともにこれから外科医として走り出していく覚悟や希望を強く感じました。そういう姿を見て僕たちも心機一転頑張っていこうと改めて思いました。仕事の際には厳しい側面もありますが、歓迎会では年齢・職種関わらず皆さん交流を図ることができ、大変有意義な時間であったと思います。

この1年間、引き続き7-2病棟一丸となって発展していければと感じました。



5/14 第3回北海道手術手技研究会が開催されました。

平成28年5月14日、第3回北海道手術手技研究会が札幌プリンスホテル国際館パミールで開催されました。はじめに当科 川村秀樹先生の座長のもと、一般演題として大平将史先生（旭川厚生病院）、田原宗徳先生（札幌厚生病院）のお二人から、それぞれ単孔式腹腔鏡下虫垂切除術、臍切離法について御講演頂きました。また、当科 蒲池浩文先生からEnoLap-CG試験の進捗状況の報告がありました。

続いて特別公演を武富昭信教授の座長のもと、帝京大学ちば総合医療センター 外科教授 田中邦哉先生をお招きし、『適応拡大を目指した肝転移切除戦略』と題し御講演を頂きました。本邦におけるALPPS手術のトップランナーである田中先生からは、肝再生を含めたALPPS手術の基礎的な理論から背景、適応、問題点とその解決方法を実際の症例提示を交えて非常にわかりやすくお話ししていただきました。ALPPS手術については系統的に学ぶ機会もなかなかないため大変勉強になりました。今後、さらに注目されてくることと思われました。

土曜日の夜にも関わらず50名以上の参加者にて大変盛況な会となりました。その後の懇親会でも大変盛り上がりました。御講演頂いた先生方、御参加頂いた先生方に厚く御礼申し上げます。

【北海道医師会認定生涯教育講座】

第3回 北海道手術手技研究会

日時:平成28年5月14日(土) 16:50より
会場:札幌プリンスホテル 国際館パミール5F「北斗」
 札幌市中央区南2条西11丁目 TEL.011-241-1111
 製品紹介:癌痛防止吸収性バリア「セラフラム」

【一般演題】17:00~17:30
 座長 北海道大学大学院医学研究科 消化器外科学分野 1 特任講師 川村 秀樹 先生

1. 『手術操作性とコストを考慮した単孔式腹腔鏡下虫垂切除術』
 旭川厚生病院 外科 大平 将史 先生
2. 『臍尾骨切除における切離方法とその結果』
 札幌厚生病院 外科 部長 田原 宗徳 先生

【EnoLap-CG試験進捗状況報告】17:30~17:40
 北海道大学病院 消化器外科 1 講師 蒲池 浩文 先生

【特別講演】17:40~18:40
 座長 北海道大学大学院医学研究科 消化器外科学分野 1 教授 武富 昭信 先生

『適応拡大を目指した肝転移切除戦略』

演者 帝京大学ちば総合医療センター 外科 教授 田中 邦哉 先生

※この講演会は北海道医師会の協賛を得て、「北海道医師会認定生涯教育講座」(1単位)として開催いたします。
 (カテゴリーコード:11-1) 施設別開催順次のA70325。

※研究会終了後、講演交換の場をご用意しております。 共催 北海道手術手技研究会/科研製薬株式会社
 後援 北海道医師会/札幌市医師会



5/25

平成28年度第1回縫合結紮講習会 が開催されました。

2016年5月25日、医学部消化器外科 I 医局において外科基本手技 縫合結紮講習会を行いました。学部学生を主な対象として、モニターでのビデオ講習と実際の糸・針を用いての実技演習を行いました。講習会には37名の学生の参加があり、皆、はじめはぎこちない手つきで結紮や縫合を行っていましたが、約1時間というわずかな時間でも終了間際にはだいぶ慣れた手つきで練習をしていたのが印象的でした。少しでも外科の基本手技を覚えてもらえればと思います。

講習会後の懇親会には50名もの学生が参加され、盛大な会となりました。各々、当科医師より卒業後の進路や外科に関する様々なことを実際に聞き、触れることができたのではないのでしょうか。

今後もこのような会は開催していくので、今回参加できなかった学生も今回参加してくれた学生も含め、多くの学生が参加して少しでも外科を知ってくれればと思います。

消化器外科 I
縫合結紮トレーニングプログラム
~ Training Course for Wound Closure & Ligation ~
日時：2016年5月25日(水) 17時~18時30分
(終了時間は予定)
会場：消化器外科 I 医局 (南棟5階)
対象：医学部 4~6年生

★プログラム 1. 糸結び

…男結び・女結び・外科結紮等 糸結びの基礎、
縫合糸の基礎について学びます。

★プログラム 2. 皮膚縫合

…結節縫合・連続縫合・真皮縫合・機械結び等の基本的な縫合方法、
縫合針の基礎について学びます。



飛び入り参加、大歓迎です！

終了後、懇親会があります！

問い合わせ：消化器外科 I 吉田

(内線：5927, e-mail: ta73825@dg7.so-net.ne.jp)



5/28

第12回日本癌治療学会アップデート教育コースが開催されました。

2016年5月28日、ホテルさっぽろ芸文館にて武富教授を実行委員長として第12回日本癌治療学会アップデート教育コースが開催されました。

14人の司会、演者の先生方によりすぐに日常診療に役立つような広範囲にわたる最新の情報を提供していただきました。当科関係者も含め200人を超える出席者に恵まれ盛会のうちに終了することが出来ました。



5/29 医局対抗野球のご報告

2016年5月29日、すがすがしい新緑の中、豊平川雁来河川公園にて、医局対抗野球大会がおこなわれました。対戦相手は強豪第2外科でした。結果は4-12で敗けてしまいましたが、随所に良いプレーも出て、コールドゲームにもならず、それなりにきちんとした試合になったのではないかと思います。

野球経験者が少なく人数集めに苦労しましたが、市立札幌の大島先生、KKR札幌医療センターの今先生はじめ関連病院の若手の先生のご協力もあり、なんとか試合を成立させることができました。この場を借りて感謝申し上げます。



6/4 平成28年度同門会総会・及び新入会員歓迎会が開催されました。

平成28年6月4日（土）北海道大学第一外科同門会「楡刀会」総会、ならびに新入会員歓迎会をニューオータニイン札幌にて開催いたしました。総会では、様々な議題に対する活発な意見の交換も見られました。その後の歓迎会は105名が出席され、新たに3名の新入会員を迎えました。本年度は例年に比べると新入会員がやや少なめではありましたが、挨拶では皆、真剣な眼差しでこれまでの経歴と今後の意気込みを語っていました。新入会員が少ない半面、各テーブルでは先輩である諸先生方とゆっくりと話をすることができ、激励の言葉をかけていただいたのではないのでしょうか。

また、多くの先生方にも壇上でご挨拶をいただき近況をご報告いただきました。各テーブルも皆大いに話が弾んでおり、歓迎会は盛会のうちに終了いたしました。

ご出席いただきました諸先生方に感謝申し上げるとともに、今後とも、忘年会・新入会員歓迎会と楡刀会行事へのご参加をよろしくお願い申し上げます。



6/11 第3回北海道ヘルニア倶楽部が開催されました。

2016年6月11日（土）札幌グランドホテルにて、第3回北海道ヘルニア倶楽部が開催されました。

北海道医療センター外科医長の植村一仁先生と小樽市立病院診療部長の渡邊義人先生の司会で当教室同門の先生方である、小丹枝裕二先生（札幌北楡病院）、宮岡陽一先生（町立中標津病院）、石川倫啓先生（苫小牧市立病院）に手術ビデオを供覧いただき、ビデオクリニックが行われました。

特別講演に東京慈恵会医科大学附属第三病院 外科 診療医長 諏訪勝仁先生をお招きし、「膜の構造を意識した鼠径ヘルニア修復術と複雑な腹壁癒痕ヘルニアに対する治療戦略」についてご講演いただきました。

40名近くの多くの参加者にご来場いただき、ダイレクトクーゲルを用いた鼠径ヘルニア修復術および腹壁癒痕ヘルニアに対する腹腔鏡下修復術を中心に活発なディスカッションが行われました。終了後には懇親会と前回同様ハンズオンセミナーが開催され大盛況の中で終了いたしました。

関係者の方々、参加いただいた先生方、大変ありがとうございました。

第3回 北海道ヘルニア倶楽部

日時：2016年6月11日（土） 15:00～18:00
場所：札幌グランドホテル 東館B1 クリスタルホールA
札幌市中央区北1条西4丁目 011-261-3311

プログラム

開会挨拶 武富 昭信先生
(北海道大学大学院医学研究科外科科学講座 消化器外科学分野I 教授)

I 一般演題 15:00～16:00

- 司会 植村 一仁先生(北海道医療センター 外科医長)
渡邊 義人先生(小樽市立病院 診療部長)
- 演者 小丹枝 裕二先生(札幌北楡病院) TAPP法
宮岡 陽一先生(町立中標津病院) TAPP法
石川 倫啓先生(苫小牧市立病院) TEP法

II 特別講演 16:00～17:00

- 座長：武富 昭信 先生
(北海道大学大学院医学研究科外科科学講座 消化器外科学分野I 教授)
- 演者：諏訪 勝仁先生
(東京慈恵会医科大学附属第三病院 外科 診療医長)

「膜の構造を意識した鼠径ヘルニア修復術と複雑な腹壁癒痕ヘルニアに対する治療戦略」

III 情報交流会 17:00～18:00

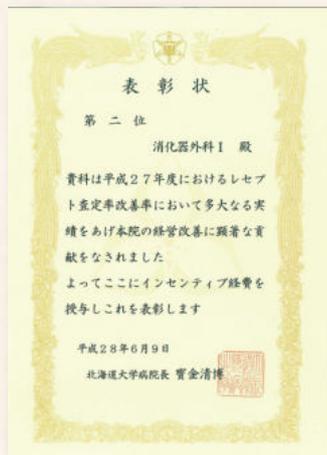
主催 株式会社メディオン



6/15 当科が平成27年度北海道大学病院インセンティブ経費を授与されました。

当科が「診療報酬請求実績額の請求額達成」（第二位）、「限界利益改善額の増加達成」で北海道大学病院の経営改善に貢献したとの御評価をいただき、平成27年度北海道大学病院インセンティブ経費を授与されました。

普段の臨床業務に関し御評価をいただいたことを大変嬉しく存じます。今後も更なる御評価をいただけるよう取り組んでいく所存です。



6/27 研修医お疲れ様会を開催致しました。

平成28年6月赤羽啓慧一郎君（研修医2年目）、小田義崇君（研修医1年目）が消化器外科 I の臨床研修に1ヶ月来てくれました。武富教授の発案で、そのお疲れさま会を6月27日（月）にぶあいそ別邸にて開催しました。1ヶ月の研修を振り返ったり、二人の学生時代の話や普段聞けないような話をしたりと非常に楽しい時を過ごしました。

6月30日（木）には、消化器外科 I の研修での鬼門とも呼ばれるjournal clubでの発表も無難にこなし二人の能力の高さと輝かしい未来を感じました。

お二人とも研修本当にお疲れ様でした。またどこかで一緒に働けることを楽しみにしています。



6/28 第14回モーニングセミナーを開催致しました。

平成28年6月28日に第14回モーニングセミナーを開催致しました。今回は北海道大学獣医学研究科疾病制御学講座実験動物学教室の安居院高志教授を講師にお招きし、「マウス・ラットのゲノム解析 -Hirschsprung病モデルラットの解析を中心として-」というテーマでご講演いただきました。

Hirschsprung病は当科でも小児外科領域を中心に深くかかわる疾患領域であり、身近なテーマとして興味深く拝聴しました。今回のご講演では、その重症度に関与するいくつかの遺伝子をForward Geneticsにより解析する方法についてご紹介いただきました。気の遠くなるような回数 of 交配の末、様々な重症度のHirschsprung病モデルラットの交配方法の確立に成功されていて、大変貴重なモデルであることを実感しました。

安居院先生の教室ではその他様々な疾患モデルの実験動物も研究されています。当科でも実験動物を用いた研究により病態の解明、治療法の開発を目指しています。今後連携を深めて、疾患で苦しむ患者さんの利益につなげていければと感じました。



7/9

第3回7-2病棟・医局旅行を開催いたしました。

7月9、10日に第3回7-2病棟・医局旅行がルスツリゾートで開催されました。

今年は医局員・看護師・秘書・実験補助員や当科をローテートしてくれた研修医の先生を含め、総勢44名の参加となりました。現地到着後はホテル内や広大な自然の中のんびり散策をしたり、温泉で一休みしたりと各々リフレッシュしました。

宴会では新入局員の先生方と新人看護師さんの芸の披露があり、また今年もただならぬエネルギーに圧倒されました。旅行を通じ職種を超えての親交も深められ、非常に有意義なものと感じました。まだ3回目と若い行事ではありますがこれからも脈々と続いて行ってほしいと心より感じました。

最後になりましたがご参加いただいた皆様、出張や勤務の調整を行っていただきました方々に深く御礼申し上げます。



7/11

6年生選択実習慰労会を開催いたしました。

平成28年7月11日、消化器外科Ⅰ選択実習（4月11日～7月8日）を回られた医学部6年生の方々6名を囲み、武富教授はじめスタッフと「選択実習慰労会」を開催致しました。

皆それぞれ昨年5年生時に実習で当科を回られた青白い顔とは異なり、たくましくなられたように見えました。

さらに大学病院当科、天使病院、苫小牧市立病院、岩見沢市立総合病院およびCleveland Clinic等、多岐にわたる施設でベッドサイドでの経験を積まれ、6週間の実習期間で一層たくましくなられました。北海道（そして日本、世界）の医療の未来を牽引する先生方になられるであろうと感じました。

慰労会では、実習先での武勇伝や失敗談、また将来への自分の思いなど、6年生の方々から楽しく熱い話を聞く事ができ、我々もいつのまにか熱くなっておりました。今度医師となった暁には、仲間としてまた熱く話し合いたいと思っております。

消化器外科Ⅰを選択実習に選ばれた6年生の皆様方、本当にお疲れさまでした。今回の実習での経験が、皆様方のmotivationに火を着け、益々ご活躍されていきますことを祈っております。



7/15 第71回日本消化器外科学会総会に参加いたしました。

平成28年7月15-17日、第71回日本消化器外科学会総会（徳島市）で教室・関連病院から多数の発表を行いました。

16日大塚国際美術館で行われた全員懇親会では全国の医局から寄贈された日本酒の利き酒を楽しむなど非常に有意義な時間を過ごしました。また研修医として勤務されていて来年度から当医局に入局を決めた先生方が武富教授と固く握手をされているのが印象的でした。来年度から我々と一緒に働くことを楽しみにしています。



7/23 wet laboが開催されました。

2016年7月23日札幌センタービルにて、2016年度消化器外科 I wet laboが開催されました。全道各地から、36名の研修医、17名の医学生が参加されました。消化器外科 I の関連病院より、27名の外科医が指導役として来場され、総勢80名の方々に参加して頂きました。メニューとしては、Ⅰ：鏡視下縫合結紮手技、Ⅱ：豚皮膚縫合・腸管吻合手技、の二部構成と致しました。最初は、鉗子や持針器の扱い方もぎこちなく、鏡視下特有の2D画面での操作にも苦戦しておられる方が続出でしたが、ラボの終了時には驚くべき上達ぶりを発揮された先生方もいらっしゃいました。3時間半の実習時間もあっという間に経過し、終了の合図の後も実習を続けようとする方もいるほど、熱のこもったラボとなりました。その後の懇親会は63名が出席されて、こちらも盛会のまま終了しました。

今回御参加いただいた研修医の先生方、お忙しい中会場でご指導いただいた上級医の先生方、週末業務多忙のなか若手先生の講習会参加の御配慮をいただいた関連病院の諸先生方に深く感謝申し上げます。今後も更に魅力ある若手講習会を企画していきたいと存じます。何卒宜しくお願い申し上げます。



7/29

第4回北海道消化器癌カンファレンスが開催されました。

平成28年7月29日、札幌グランドホテルにて第4回北海道消化器癌カンファレンスが開催されました。

はじめに市立札幌病院 外科 理事 三澤一仁先生の司会で、基調講演として蒲池浩文先生（北海道大学大学院医学研究科 消化器外科 I 講師）より「膵癌診療における最近の進歩」と題して、膵癌診療における化学療法・放射線治療を併用した最近の治療法等に関し御講演をいただきました。

続いて武富教授の司会のもと、特別講演として大阪大学大学院医学系研究科 外科学講座・消化器外科学 教授 土岐祐一郎先生をお招きし、「進行食道癌に対する総合的治療戦略」を御講演いただきました。手術不能と言われるような進行食道癌に対する局所制御における手術の重要性とその戦略に関して大阪大学の治療成績や貴重な動画を拝見することが出来ました。

教室・関連施設から多数の先生の御参加をいただき、盛会のうちに終了致しました。

懇親会も大変盛り上がりました。

御講演いただいた御二人の先生方、御参加くださった先生方にご場を借りて心より御礼申し上げます。

第4回北海道消化器癌カンファレンス

2016. 7. 29 (FRI.) 18:20-20:00

【場所】札幌グランドホテル 3階「GINSEN」

【製品説明】 18:20-18:30

「ロンサーフ®配合錠T75・T20」 大腸薬品工業㈱ 札幌支店 齊藤 周平

【基調講演】 18:30-19:00

【座長】

市立札幌病院 外科 理事 三澤 一仁 先生

「膵癌診療における最近の進歩」

北海道大学大学院医学研究科 消化器外科学分野 I

講師 蒲池 浩文 先生

【特別講演】 19:00-20:00

【座長】

北海道大学大学院医学研究科 消化器外科学分野 I

教授 武富 紹信 先生

「進行食道癌に対する総合的治療戦略」

大阪大学大学院医学系研究科 外科学講座・消化器外科学

教授 土岐 祐一郎 先生

主催 大腸薬品工業株式会社
後援 北海道医師会 札幌市医師会
※会終了後、情報交換会を予定しております。



8/4

IASGO-CME2016 in Sendai に参加いたしました。

8月4日東北大学医学部で開催されたIASGO-CME2016 in Sendaiに参加いたしました。当科からは武富教授をはじめ市川、宮城、腰塚、永生の各医員が参加し発表を行いました。とくに腰塚医員はPoster podiumで発表する3人のうちの1人に選ばれるという大変名誉な賞を受賞されました。今回の学会で得たことを今後の臨床の場で活かしていきたいと思っています。



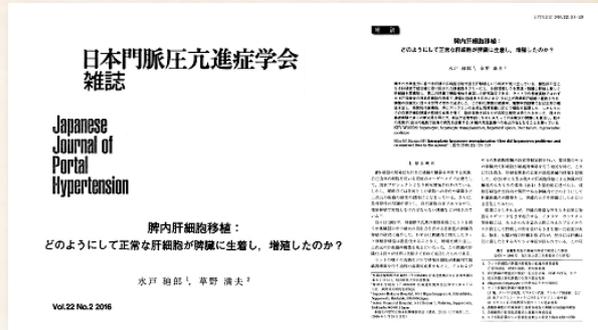
8/4

水戸迪郎先生（北大31期、旭川医大名誉教授）の論文が日門亢会誌に掲載されました。

水戸迪郎先生（北大31期、旭川医大名誉教授）の論文が日本門脈圧亢進症学会誌に掲載されました。昨年の脾臓研究会での特別講演の内容をまとめられたものです。

脾内肝細胞移植研究は水戸先生のライフワークであり、世界で初めて脾臓内で3次元的肝組織の構築に成功されるなど、現代の再生医療の先駆となるご研究についてまとめられたものです。

是非、ご一読ください。



8/6

第5回札幌VTRカンファレンスが開催されました。

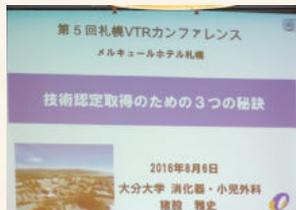
平成28年8月6日、札幌グランドホテルにて第5回札幌VTRカンファレンスが開催されました。

武富教授の司会のもと大分大学医学部消化器小児外科学講座教授、猪股雅史先生をお招きし『技術認定医取得のための3つの秘訣』をご講演いただきました。今後、内視鏡外科技術認定医取得を目指す上での重要なポイントをお示しいただくとともに、貴重な動画も拝見することができました。

続いて、川村秀樹先生の司会のもと網走厚生病院の石川先生、岩見沢市立病院の葛西先生、小樽市立病院の渡邊先生に手術動画をご提供いただき、北海道がんセンターの前田先生、札幌厚生病院の高橋先生、砂川市立病院の横田先生、市立札幌病院の皆川先生、旭川厚生病院の船越先生、当科の本間先生に猪股雅史先生にも加わっていただき手術の改善点やポイントなどをディスカッションいたしました。今後の技術認定医を目指す上にて大変重要なポイントを数多くご指摘いただき、大変貴重な機会となりました。

教室・関連施設から多数の先生の御参加をいただき、盛会のうちに終了致しました。懇親会も大変盛り上がりました。

御講演いただいた猪股雅史先生、動画ご提供いただいた先生、ディスカッサーとしてご参加いただいた先生、および御参加くださった先生方にこの場を借りて心より御礼申し上げます。



8/18 第26回国際移植会議（TTS 2016）に参加いたしました。

香港で開催されました第26回国際移植会議（TTS 2016）に参加いたしました。当教室からは山下健一郎先生が生体肝移植での免疫寛容導入に関して、後藤一先生が生体肝移植症例におけるドナー特異的抗体（DSA）に関して発表されました。また、財津雅昭先生（KKR札幌医療センター）、渡辺正明先生がそれぞれの留学先（財津：University of Oxford、渡辺：Karolinska University）での研究成果を発表されました。大学院生の発表は残念ながらありませんでしたが、教育セミナーであるPost Graduate Courseに参加し、最新の知見について勉強いたしました。

当教室からの発表は以下になります。

山下：A clinical trial of cell therapy-based tolerance induction in living donor liver transplantation : Long-term follow-up results

後藤：The impact of preformed donor-specific antibodies in living donor liver transplantation depending on graft volume

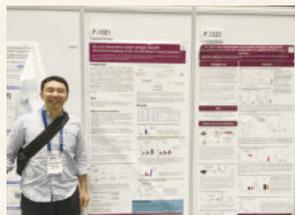
財津：Selective blockade of CD28 costimulation prevented human allo-skin graft rejection in a humanised mouse model

渡辺：ARA 290, A Non-Hematopoietic Erythropoietin Analogue, Improves Islet Engraftment In Pancreatic Islet Transplantation by Protecting Pancreatic Islets and Suppressing inflammatory reactions

Ex-vivo Generation of Allo-antigen Specific Immunomodulatory Cells : Do We Need T-reg Enrichment ?

学会では、各領域のトップランナー達を含め多数の発表があり、それぞれに白熱したディスカッションが行われていました。肝移植領域では免疫寛容を含めた免疫抑制の個別化、DSAが話題となっており、特に免疫抑制の個別化に関してはBiomarkerの探索にGenomicsなどの新しい手法を用いた報告が多くみられましたが、網羅的解析の結果を臨床に還元するには更なるbreakthroughが必要であるという印象を受けました。また、世界に先駆けて当科で行われた臨床試験である免疫寛容の誘導の取り組みが、欧米においてもphase I trialが始まり、制御性細胞を用いた細胞治療が注目を集めています。いずれにしてもtranslational researchの重要性とその成果を臨床に還元するという我々に課されたmissionを改めて確認するいい機会になりました。これからも日々研究に励み、当教室の成果を世界に発信していきたいと存じます。

最後に、このような貴重な経験の機会を与えてくださった皆様方に感謝申し上げます。



8/20 アニマルラボが開催されました。

平成28年8月20日、神奈川県川崎市にて豚の腹腔鏡下手術トレーニングが開催されました。

講師として北海道医療センター・植村一仁先生、釧路労災病院・小林清二先生、当科・川村秀樹先生にお越しいただき、武富紹信教授の監督のもと、当科・坂本謙先生、後期研修医4名、初期研修医3名で3チームに分かれてトレーニングを行いました。各チームに講師の先生1名がつき、「縫合結紮」、「幽門側胃切除」、「高位前方切除」をメインの課題としてタスクに取り組みました。ほとんど経験のない腹腔鏡下手術の術者・助手を経験し思うように手が進まない場面もありましたが、講師の先生方の丁寧な指導により無事全チーム全てのタスクを終了することができました。技量が足りないことを痛感しドライボックスを含め日常のトレーニングの必要性を痛感したとともに、今回学んだことを決して忘れずに今後の腹腔鏡下手術に参加していきたいと思えます。また今回トレーニング終了後には使用した豚に対しての黙祷も行い、医学発展や技術向上に関わる動物使用に関して配慮の気持ちを決して忘れてはならないと思いました。

この場をお借りしまして皆様方に厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



8/26 第8回日本・モンゴル国際消化器癌シンポジウムに参加いたしました。

平成28年8月26、27日にウランバートル市チングスハーンホテルで開催された第8回日本・モンゴル国際消化器癌シンポジウムに参加しました。今回のテーマは肝臓(生体肝移植、肝切除)でした。モンゴル、日本、韓国から合計29の発表があり、当科からも武富教授(Keynote speaker)、横尾先生、高橋が発表しました。個人的には初めての海外発表で大変緊張しましたが何とか無事発表することができました。

翌日はモンゴル市内と草原の観光をし、モンゴル騎馬民族の歴史、文化にも大いに触れてきました。今後もモンゴルの医療の発展と日本・モンゴルの国際交流が深まるよう微力ながら協力していきたいと思えます。



9/2

2016年度医局説明会が開催されました。

9月2日18時より、消化器外科 I 医局において、2016年度医局説明会が行われました。

今年度は、道内各地より前期・後期研修医、大学生総勢44名の方々にご参加頂き、会場に入りきれない程の熱気でした。説明会では、武富紹信教授の挨拶の後、本間重紀医局長から消化器外科 I の沿革、研修プログラム、診療・研究体制、診療実績、国内外で活躍中の先生方からのビデオレターも紹介されました。

その後は、狸小路で懇親会が開催されました。研修医、学生の皆さん、大学スタッフ、関連病院スタッフの先生方などにお集まり頂き、総勢94名という大所帯で大変盛り上がりしました。また、二次会も50名以上が参加され、深夜まで親交を深めることが出来ました。

当日ご参加頂いた研修医・学生の皆様をはじめ、全道各地からご参集下さった関連病院の諸先生方、大学の先生方、ご準備にご協力頂いた秘書の方々にも感謝申し上げます。

今後も魅力ある北大消化器外科 I をアピールしていけるよう、尽力して参りたいと思っております。



9/17

第4回北海道サージカルアカデミーが開催されました。

9月17日に第4回北海道サージカルアカデミーが開催されました。

教育講演として川村秀樹先生が「超音波凝固切開装置を使いこなすには」と言う演題で講演されました。実際に我々が手術、特に胃切除の際に遭遇する場面に沿って、超音波凝固切開装置のティッシュパッドやアクティブブレードの仕組みから、どのような場面でこういった目的を持って操作していくかを勉強することができました。

また、特別講演として、大分大学長の北野正剛先生に「内視鏡外科の現状と将来の展望」についてご講演いただきました。日本で初めての腹腔鏡下幽門側胃切除のお話や、北海道ではまだまだあまり携わることの少ない肥満外科の取り組みについて、そして日本発信の医療をアジア各国に伝えていく事業など幅広い内容について話されました。正直、外科医として自分が出来ることとして考えていた仕事の範囲を超えており、現在の自分としてはただただあっけにとられるくらいのスケールの話でしたが、非常に感銘を受けました。

最後に、このような講演会の機会を提供して頂いた皆様に感謝申し上げます。

**第4回
北海道サージカルアカデミー**

2016.9.17 [Sat] 16:00~17:45

センチュリーロイヤルホテル 3F「エレガンス」
北海道札幌市中央区北5条西5丁目

商品販売 (16:00~16:15) ジョーンズ・エンド・ジョーンズ株式会社

教育講演 (16:15~16:45)

「腹腔鏡下手術で超音波凝固切開装置を使いこなすには」
司会 | 神山 俊徳 先生 / 北海道大学大学院医学研究科
消化器外科分科 准教授

演者 | 川村 秀樹 先生 / 北海道大学大学院医学研究科
消化器外科分科 1 専任講師

特別講演 (16:45~17:45)

「内視鏡外科の現状と将来の展望」
司会 | 武富 紹信 先生 / 北海道大学大学院医学研究科
消化器外科分科 1 教授

演者 | **北野 正剛 先生 / 大分大学長**

*同フォーラムにて懇親交流会の会場をご用意しております。

ETHICON
株式会社
〒230-0292 東京都大田区東大田 3-1-1
TEL: 03-3563-2100 FAX: 03-3563-2101



9/24

第5回北海道サージカルフォーラムが開催されました。

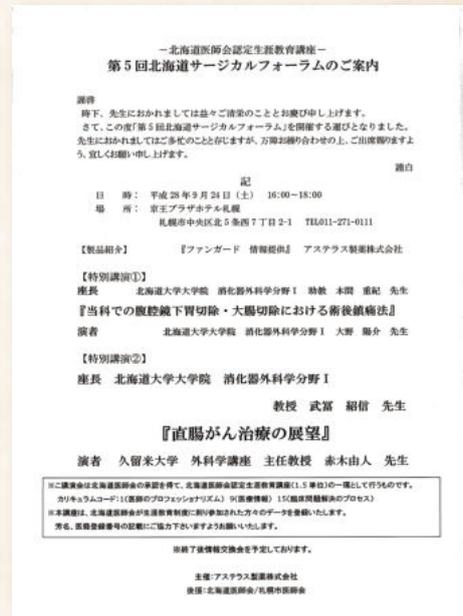
平成28年9月24日（土）、京王プラザホテル札幌にて第5回北海道サージカルフォーラムが開催されました。

はじめに、当科 本間重紀先生座長のもと、特別講演①として当科 大野陽介先生より『当科での腹腔鏡下胃切除・大腸切除における術後鎮痛法』と題して講演いただきました。硬膜外麻酔と、フェンタニル持続に内服鎮痛剤を加えた鎮痛法とを比較検討し、それぞれの利点や欠点、また副次的効果などをお話しいただき、日常でしばしば難渋する術後鎮痛について知見が深まりました。

続いて、特別講演②を当科 武富紹信教授座長のもと、久留米大学外科学講座 主任教授 赤木由人先生をお招きし、『直腸がん治療の展望』と題して講演いただきました。直腸がん手術の歴史から、根治性、機能温存、リンパ節郭清の移り変わり、さらには国ごとの考え方の違いまで、写真・ビデオ・シエマを用いて大変わかりやすくご教授いただきました。また、久留米大学伝統の「摘出標本の全例全割」による膨大なデータと、それに裏付けされた直腸がん術後成績は圧巻であり、このような弛まぬ努力を何十年にわたり継続出来る教室の凄さを感じました。

その後の懇親会でも、久留米大学と、遠く離れた当科や北海道が意外とつながっていることに驚き、今後も様々な面でご指導いただきたいと思いました。

最後になりましたが、ご講演、ご参加いただいた先生方、ならびにこのような講演会の機会を提供していただいた皆様に心より感謝申し上げます。



10/1

第2回敗血症性DICセミナーが 開催されました。

平成28年10月1日（土）、札幌グランドホテルにて第2回敗血症性DICセミナーが開催されました。

はじめに、KKR札幌医療センター副院長 小池雅彦先生座長のもと、一般演題として当科 大野陽介先生より『絞扼性イレウス術後に敗血症性DICを呈した1例』と題して講演いただきました。外科治療後にDICを発症した症例の貴重なお話を聞くことができました。

続いてのレクチャーでは、鹿児島大学病院 救命救急センターシステム血栓制御学講座講師 伊藤隆史先生をお招きし、『侵襲応答を視覚でとらえる-敗血症の病態理解に向けて-』と題して講演いただきました。動画を交えた非常に分かりやすい発表であり、中でも実際に白血球が血管外へ遊走する瞬間を捉えた動画は実に興味深いものでした。

また当科 武富紹信教授座長のもと、特別講演として北九州市立八幡病院副院長 兼 消化器・肝臓病センターセンター長 岡本好司先生をお招きし、『外科領域のDIC ~病態・診断・治療~』と題して講演いただきました。DICの病態や治療戦略に関して理解を深めることができたとともに、DICになることが予想される患者さんに手術前にリコモジュリンを投与するという斬新な発想に驚きました。

その後の懇親会でも、DICについての議論は尽きることはなく、また北海道と九州の強いつながりを感じる大変有意義な時間となりました。

最後になりましたが、ご講演、ご参加いただいた先生方、ならびにこのような講演会の機会を提供していただいた皆様に心より感謝申し上げます。

第2回敗血症性DICセミナー -Up To Date-

講師
特下、先生方におかれましては益々ご清祥の事とお慶び申し上げます。
さてこの度、『第2回敗血症性DICセミナー -Up To Date-』を開催させて頂くことになり
ました。ご多用中とは存じますが、万障お繰り合わせの上、ご参加くださいませようお願ひ申し
上げます。 謹白

日時 平成28年10月1日(土) 15:00~16:50

会場 札幌グランドホテル 本館3階『新緑』
住所：札幌市中央区北1条西4丁目 TEL：011-261-3333

情報提供 15:00~15:10 リコモジュリン点滴用法12800 旭化成ファーマ株式会社

司会 KKR札幌医療センター 副院長 小池 雅彦 先生

一般演題 15:10~15:30

「絞扼性イレウス術後に敗血症性DICを呈した1例」
北海道大学大学院医学研究科 消化器外科分科 大野 陽介 先生

レクチャー 15:30~16:00

「侵襲応答を視覚でとらえる -敗血症の病態理解に向けて-」
鹿児島大学病院 救命救急センターシステム血栓制御学講座(兼務) 講師 伊藤 隆史 先生

司会 北海道大学大学院医学研究科 消化器外科分科 教授 武富 紹信 先生

特別講演 16:00~16:50

「外科領域のDIC ~病態・診断・治療~」
北九州市立八幡病院 副院長 兼 消化器・肝臓病センター
センター長 岡本 好司 先生

*講演会終了後、懇親交流会を予定しております。
*本講演会は北海道医師会の承認を得て、北海道医師会認定生涯教育講座(1.5単位)として開催いたします。
お申し込みコード：11【専門職としての使命】・11【学術活動】・18【その他】

主催：旭化成ファーマ株式会社 後援：北海道医師会/札幌市医師会



10/3

中津市民病院（大分県）の 初期研修医が病棟見学に来ました。

中津市民病院の初期研修医3名が病棟見学に来られました。臨床研修の一環として、年1回いろいろな地域医療を見学しているそうで、今年は北海道とのことです。

朝早くのカンファレンスから総回診まで熱心に見学されていました。

ご苦労様でした。



10/14 第4回North Japan Cancer Forumが開催されました。

平成28年10月14日（金）に札幌グランドホテルにて、第4回North Japan Cancer Forumが開催されました。

まず、はじめに北海道がんセンター外科系診療部長濱田朋倫先生の座長のもと、一般演題として札幌厚生病院乾野幸子先生による、「Capecitabine併用療法で長期SDが得られた進行胃癌の2症例」、北海道大学病院消化器外科 I 横尾英樹先生による、「術前化学療法によりconversionできた多発肝転移の1例－多発肝転移に対する治療戦略とその成績－」についてご講演頂きました。乾野先生からは、Capecitabine利用について、特に合併症の経験も混じえたと発表でした。横尾先生からは多発肝転移のstrategyをご紹介いただき、ともに今後の診療の助けとなる内容でした。

特別講演は、当科武富紹信教授座長のもと、静岡県立静岡がんセンターの副院長兼肝胆脾外科部長である上坂克彦先生に、「膵癌外科治療の進歩：Borderline resectableを中心として」についてご講演頂きました。非常に良好な治療成績を示して頂き、また、実際の手術経験に基づいたアドバイスも頂くことが出来、大変勉強になりました。また、会場もほぼ満席となり、その後の懇親会でも上坂先生から静岡がんセンターでの貴重な経験をお話して頂き、大変盛況な会となりました。

最後に、ご講演された乾野先生・横尾先生・上坂先生、座長の労をお取り下さいました濱田先生・武富先生、このような機会を提供して頂いた皆様に感謝申し上げます。

第4回 North Japan Cancer Forum

日時：平成28年**10月14日**（金）18:50～20:30

場所：札幌グランドホテル 本館3F 「新緑の間」
住所：札幌市中央区北1条西4丁目 TEL:011-261-3311

18:50～19:00 情報提供 中外製薬株式会社

19:00～19:30 【一般演題】

座長 北海道がんセンター 外科系診療部長 濱田 朋倫 先生

1. Capecitabine併用療法で長期SDが得られた進行胃癌の2症例
札幌厚生病院 外科 乾野 幸子 先生
2. 術前化学療法によりconversionできた多発肝転移の1例－多発肝転移に対する治療戦略とその成績
北海道大学病院 消化器外科 I 助教 横尾 英樹 先生

19:30～20:30 【特別講演】

座長 北海道大学大学院医学研究科 消化器科学分野 I 教授 武富 紹信 先生

**『 膵癌外科治療の進歩：
Borderline resectableを中心として 』**

演者 静岡県立静岡がんセンター 副院長兼肝胆脾外科部長 上坂 克彦 先生

※会終了後、情報交換会を予定しております。

※この講演会は、北海道医師会の協力を得て、北海道医師会認定生体数講演者（1.5単位）として開催いたします。
※カンファレンスコード：12（情報公開）：21（食費不敷）：51（電気・電話）
※ご入場いただいた皆様は、本講演会の実施費を費のみにご利用いたします。

主催 中外製薬株式会社
後援 北海道医師会・札幌市医師会



10/16 アニマルラボが開催されました。

2016年10月16日にanimal labが神奈川県川崎市アドバンストレーニングセンター川崎で開催されました。新入医局員と研修医を対象として、「腹腔鏡下縫合結紮」、「腹腔鏡下幽門側胃切除」、「腹腔鏡下高位前方切除」を行いました。慣れない手つきながら、講師の先生方にご指導いただき、なんとか目標の手術を終えることができました。

講師の当院 川村秀樹先生、KKR札幌医療センター 今裕史先生、砂川市立病院 横田良一先生はじめ、animal lab開催に際してご協力頂いた関係者の皆様に、この場をお借りして、感謝申し上げます。

動物への感謝及び畏敬の念を抱きつつ、今回の経験を日々の診療に生かしていきたいと思えます。



10/24 大阪大学微生物病研究所 分子ウイルス分野と懇親会を開きました。

10月23日から25日にかけて札幌で開催されている第64回日本ウイルス学会学術集會に参加された大阪大学微生物病研究所 分子ウイルス分野の方々とは懇親会を開催しました。

松浦善治教授、岡本徹助教、福原崇介助教をはじめ、13名の方に参加いただき、総勢34名でとても賑やかな懇親会となりました。

北海道の海の幸を堪能しながら、寒い札幌の夜に研究にとどまらない様々な話題でとても熱い議論が交わされました。今後とも共同研究などでますます協力していきたいと思ひます。



10/28 第1回札幌外科漢方セミナーが開催されました。

2016年10月28日（金）に第1回札幌外科漢方セミナーが札幌グランドホテルで開催されました。

座長に当院 本間重紀先生のもと、一般演題として、当科 大野陽介先生より「骨盤内臓全摘後に対する大建中湯の使用経験」として大建中湯の実際の使用方法について、JA北海道厚生連札幌厚生病院 柿坂達彦先生より「消化器外科領域における漢方の使い方の工夫」として消化器外科術後の患者様に対し、どのような場面でもいった漢方薬が有効であるかについて症例検討を交えながらポイントをご講演いただきました。

また、特別講演として、当科 武富紹信教授の座長のもと、高知大学医学部外科学講座 外科Ⅰ 花崎和弘教授をお招きし、「漢方薬によるERASを目指した外科周術期管理の最前線」をご講演いただきました。

漢方薬の解析や、現在の治験中の漢方薬について現在までの臨床研究の状況と、漢方薬の今後の展望について、大変わかりやすく説明して下さい、一歩踏み込んだ内容を知ることができ、今まで以上に漢方薬の使用について興味を沸かす内容でした。今回のセミナーをきっかけに、実際に臨床の場で漢方を効果的に使用していきたいと感じました。

今回は初めての札幌外科漢方セミナーの開催となりましたが、当日は多くの先生方にご参加いただき、講演会・懇親会ともに大変盛況な会となりました。ご講演いただきました花崎先生、ご参加いただいた皆様に御礼申し上げます。

第1回札幌外科漢方セミナー
 (日 時) 平成28年10月28日(金) 19:00~20:30
 【会 場】札幌グランドホテル 本館第1階【新 棟】
 札幌市中央区北1条西4丁目 TEL: 011-261-2311

【プログラム】
 19:00~19:10
 漢方製剤の最新トレンド 御ツムウ札幌漢方学術講座 先生 総掌
 19:10~19:30
 一般演題 座長 本間 重紀 先生
 北海道大学大学院医学研究科 消化器外科Ⅰ
 大野 陽介 先生 北海道大学病院 消化器外科Ⅰ
 Ⅱ. 消化器外科領域における漢方の使い方の工夫
 柿坂 達彦 先生 JA北海道厚生連 札幌厚生病院 外科
 19:30~20:30
 特別講演 座長 武富 紹信 先生
 北海道大学大学院医学研究科 消化器外科Ⅰ 教授
 『漢方薬によるERASを目指した
 外科周術期管理の最前線』
 花崎 和弘 先生
 高知大学医学部外科学講座外科Ⅰ 教授

※会費 7,500円 懇親会費は別途ご用意しております
 主催 札幌市医師会 協賛 札幌市医師会 札幌市医師会 札幌市医師会
 後援 札幌市医師会 札幌市医師会 札幌市医師会 札幌市医師会

会場のご案内

会場は、地下鉄大通駅から札幌駅前通地下歩行空間南口にて徒歩。
 札幌駅前通地下歩行空間南口から札幌グランドホテル南口まで徒歩5分。
 札幌駅前通地下歩行空間南口は札幌駅前通地下歩行空間南口から徒歩5分。
 札幌駅前通地下歩行空間南口は札幌駅前通地下歩行空間南口から徒歩5分。
 札幌駅前通地下歩行空間南口は札幌駅前通地下歩行空間南口から徒歩5分。

〒060-0801 札幌市中央区北1条西4丁目 札幌グランドホテル 本館第1階【新 棟】
 札幌市医師会 特別講演(金)第1回札幌外科漢方セミナー
 主催 札幌市医師会



11/8 第15回モーニングセミナーを開催いたしました。

平成28年11月8日に第15回モーニングセミナーを開催しました。今回は北海道大学大学院保健科学研究院 健康イノベーションセンターの特任講師早坂孝宏先生を講師にお招きし、「イメージング質量分析の医学研究への応用」というテーマでご講演いただきました。

イメージング質量分析は従来の質量分析ではなしえなかった「物質の分布」の解析を可能とする研究手法であり、幅広い応用が期待される分野です。その中で、悪性腫瘍に特有の分子の解析や薬物代謝物質の分布など興味深いお話をさせていただきました。

当科では以前から共同研究を行ってききましたが、研究・臨床の両面で大きな可能性を秘めており、さらに連携を深めていきたいと感じました。



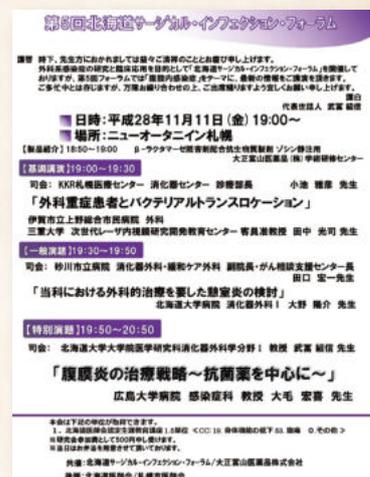
11/11 第5回北海道サージカル・インフェクション・フォーラムが開催されました。

平成28年11月11日に第5回北海道サージカル・インフェクション・フォーラムがニューオータニイン札幌にて開催されました。

基調講演としてKKR札幌医療センターの小池雅彦先生座長のもと、伊賀市立上野総合病院外科・三重大学次世代レーザ内視鏡外研究開発教育センター客員准教授の田中光司先生より「外科重症患者とバクテリアルトランスロケーション」をご講演いただきました。最新の技術を用いて撮像された、バクテリアが血流に侵入する瞬間を捉えた大変貴重な動画を拝見することができました。

また、特別演題として当科の武富紹信教授の座長のもと、広島大学感染症科の大毛宏喜教授より「腹膜炎の治療戦略～抗菌薬を中心に～」をご講演いただきました。薬剤耐性菌の広がりや最新のデータに基づいた抗生剤選択、また培養検査の提出方法まで、実際の臨床の場において非常に役立つ知識を得ることができました。また、一般演題として砂川市立病院の田口宏一先生のもと当科の大野陽介より「当科における外科的治療を要した憩室炎の検討」を発表させていただきました。感染症は、外科治療を行う上にて切り離すことができない分野であり、大変有意義なセミナーでした。

当日は多くの先生にご参加いただき大変盛況な会となりました。ご講演いただきました田中光司先生、大毛宏喜教授、ご参加いただきました皆様に感謝申し上げます。



11/12 関連施設連絡会議が開催されました。

平成28年11月12日、関連施設連絡会議が医学部学友会館フラテホールにて行われました。道内各地より30施設よりご参加いただき各施設の現状や課題などを発表いただきました。情報を共有することで、各施設が連携し北海道においてより良い医療が提供できればと思います。ご多忙の中、各施設より多数の先生方にご参加いただきありがとうございました。



11/18 Surgical oncology meetingが 開催されました。

平成28年11月18日にSurgical oncology meeting -HCC treatment-が札幌市プレミアホテルTSUBAKIにて開催されました。

基調講演Ⅰとして市立函館病院消化器外科科長 中西一彰先生座長のもと、市立函館病院 消化器内科科長 山本義也先生より「当院におけるHCCの集学的治療の実際」として道南圏のHCCの治療の実際についてご講演いただきました。また、基調講演Ⅱとして当科准教授 神山俊哉先生座長のもと、九州医療センター肝胆膵外科医長 和田幸之先生より「肝細胞癌に対するソラフェニブ治療の展開」をご講演いただきました。実際の経験症例をもとに臨床の場において役立つ情報が多く、非常に勉強になりました。

特別演題として当科 武富紹信教授座長のもと、東京医科歯科大学大学院肝胆膵外科学分野 田邊稔教授より「移植に懸けた人々」をご講演いただきました。医学の発展の流れの中で、移植という分野の先駆者である人々の情熱や現代に至る医学発展までの努力を実際の経験談を踏まえながら話していただき、非常に刺激になる内容でした。

当日は多くの先生にご参加いただき大変盛況な会となりました。ご講演いただきました先生方ならびに、ご参加いただきました皆様に感謝申し上げます。



**Surgical oncology meeting
- HCC treatment -**

【日時】：2016年11月18日（金）19:00～20:35
【会場】：プレミアホテル TSUBAKI (旧 ルネッサンスサッポロ)
アイリス・オーキッド 地下1層
札幌市豊平区豊平4条1-1-1 TEL011-821-1111

- PROGRAM -
【情報提供】 ネットサバール錠200mgについて バイエル薬品株式会社

◆ 講演Ⅰ 19:00-19:15
座長：市立函館病院 消化器外科 科長 中西 一彰 先生
演者：市立函館病院 消化器内科 科長 山本 義也 先生
「当院におけるHCCの集学的治療の実際」

◆ 講演Ⅱ 19:15-19:45
座長：北海道大学大学院 消化器外科学分野Ⅰ 准教授 神山 俊哉 先生
演者：九州医療センター 肝胆膵外科 医長 和田 幸之 先生
「肝細胞癌に対するソラフェニブ治療の展開」

◆ 特別講演 19:45-20:35
座長：北海道大学大学院 消化器外科学分野Ⅰ 教授 武富 紹信 先生
演者：東京医科歯科大学大学院 肝胆膵外科学分野 教授 田邊 稔 先生
「移植に懸けた人々」

※ 講演会終了後に情報交換の場をご用意しております。
※ 本講演会は北海道医師会公認研修、北海道医師会認定教育機関(1.5単位)にて開催いたします。
※ 本講演会は北海道医師会公認研修(1.5単位)の認定施設(アイリス・オーキッド)にて開催いたします。
※ 本講演会は北海道医師会公認研修(1.5単位)の認定施設(アイリス・オーキッド)にて開催いたします。
※ 本講演会は北海道医師会公認研修(1.5単位)の認定施設(アイリス・オーキッド)にて開催いたします。

主催 バイエル薬品株式会社 後援 北海道医師会 札幌市医師会

みねっサンズサッポロホテル
住所 〒062-0904
札幌市豊平区豊平4条1丁目1番1号

TEL TEL: 011-821-1111 (代表)

最寄駅 地下鉄東区線「豊平」
(2番出口より徒歩9分)

12/3 医局対抗サッカー大会 結果報告

先日行われた医局対抗サッカー大会の結果をご報告致します。

予選リーグは11月27日に行われ、眼科、第二内科との対戦となり、それぞれ5-2、6-2で勝利し1位で決勝トーナメント進出を決めました。

決勝トーナメントは12月3日に行われ、準々決勝は精神科に6-1、準決勝は第二外科・循環器外科に4-1で快勝し、決勝に進出いたしました。決勝は整形外科との対戦となり、前半は2-1でリードして折り返しましたが、後半に同点に追いつかれる試合展開となりました。整形外科と比べ交代要員も少なく防戦一方となりましたが、何とか凌いでカウンターで1点を勝ち越しましたが、試合終了間際に決められてしまい、3-3の同点でPK戦へと突入しました。PKは相手GKの好守に阻まれ、1-3で悔しい敗戦となり準優勝の結果でした。

忘年会や地方会、楡刀会とお忙しい中、また遠方よりお集まり頂いた先生方、応援に来てくれた看護師の方々に感謝申し上げます。来年度は優勝を目指して頑張りたいと思いますので、今後とも変わらぬご支援をよろしくお願いたします。

参加して頂いた先生方（敬称略）：後藤了一、永生高広、財津雅昭、杉山昂、脇坂和貴、沢田亮史、谷道夫、太田拓児、加藤拓也、阪田敏聖

大学院生：中藪君（修士1年）

研修医：南波君（北大）、赤羽君（北大）、小野寺君（岩見沢市立）

看護師：小林君



12/3 平成28年度同門会忘年会が開催されました。

12月3日（土）、ホテルニューオータニイン札幌において同門会幹事会、講演会、忘年会が開催されました。講演会では本年度スウェーデン カロリンスカ大学の留学より戻られた渡辺正明先生より「Sweden、Karolinska大学での経験」という演題名で、スウェーデンでの留学生活や欧米での移植医療の現状、および免疫寛容や細胞移植といった留学先で行ってきた研究について発表していただきました。講演後の討論では、細胞移植の今後をはじめとした、活発な議論が交わされました。

続く忘年会では、総勢118名の先生方が参加され、大変盛大な会となりました。同門会長の中島保明先生のお話では、患者の気持ちのわかる医師であれとの強いメッセージをいただくとともに、同門の強い絆や歴史を改めて実感しました。今年も多くの同門の先生方に助けられ無事に過ごすことができたことを感謝しつつ、来年も充実した一年になるよう努力してまいりたいと思います。



12/14 7-2病棟忘年会を開催いたしました。

12月14日に、消化器外科 I の医師、7-2病棟の看護師・スタッフの皆様で忘年会を開催致しました。武富教授、小野塚師長より一言を頂きまして、神山先生から乾杯のご発声を頂きました。1次会では絵描きゲームなどで大いに盛り上がりました。

2次会では研修医、新人看護師、今年7-2病棟に配属された看護師さんより余興を披露して頂きました。それぞれのグループの余興の完成度は高く、年末の忙しい中時間を削って練習した様子が見て取れました。

この度は病棟忘年会を企画、運営し数週間より準備をされてきた幹事のみなさま、楽しい会を本当にありがとうございました。



12/28 仕事納めの会を行いました。

2016年12月28日に消化器外科医局にて仕事納めの会が執り行われました。

医局員・大学院生（博士・修士）・秘書・技官の約40人に加え、他科のDrや病棟・手術室の看護師も飛び入り参加してくださり賑やかな会となりました。仕事納めの挨拶では教授がこの1年の無事を喜び、また2017年の無病息災を願われました。本年は、寿司・ピザに加え、たこ焼きを自作するという試みを行いましたところ、出来立てのおいしさのためか完食となりました。2017年はたこ焼きのように、色々な具材が調和した円満な1年となりますことを祈ります。



2016年の年表・年間行事

〈学会・研究会主催〉

1/9

平成27年度日本外科学会北海道地区生涯教育セミナー

小雪の降る中、2016年1月9日（土）13：00より北海道大学医学部フラテホールにて平成27年度日本外科学会北海道地区生涯教育セミナーが開催されました。テーマは「甲状腺、上皮小体、副腎の外科」で診断、内科的治療、外科的治療、病理学の各分野にわたって7人の先生方に講演をしていただきました。あまり良い天候ではありませんでしたが、146人の先生方に出席していただき盛会のうちに終了いたしました。

平成27年度日本外科学会 北海道地区生涯教育セミナーのご案内

日本外科学会北海道地区生涯教育セミナーを下記の要領で開催いたします。
会員の先生の多数のご参加をお待ちしております。 北海道地区委員会 委員長 武富 総信

- 日 時：平成28年1月9日（土）13：00～16：30
 - 会 場：北海道大学医学部 学生会館「フラテ」
札幌市北区北15条西7丁目 TEL.011-716-2111（北海道大学代表）
 - 参加受講料：無 料
 - 主 題：「甲状腺、上皮小体、副腎の外科」
- 総合司会：北海道大学消化器外科Ⅰ 神山 俊哉 先生
- セッションⅠ** 司会：北海道大学乳腺外科 山下 啓子 先生
1. 外科の先生に知っておいて頂きたい内分泌生理の基礎 13:10～13:35
講師：KKR札幌医療センター斗南病院糖尿病・内分泌内科 木島 弘道 先生
 2. 甲状腺・副甲状腺疾患の画像診断 13:35～14:00
講師：北光記念病院甲状腺外来 中駄 邦博 先生
- セッションⅡ** 司会：旭川医科大学外科学講座心臓大血管外科学分野 紙谷 寛之 先生
3. 甲状腺・副甲状腺疾患の内科的治療 14:00～14:25
講師：済生会小樽病院 内科 水越 常徳 先生
 4. 甲状腺分化癌に対する放射性ヨード治療・悪性褐色細胞腫に対するI-131MIBG治療について 14:25～14:50
講師：北海道大学病院 核医学診療科 志賀 哲 先生
 5. 甲状腺・副甲状腺の外科的治療 14:50～15:15
講師：JA北海道厚生連札幌厚生病院 外科 高橋 弘昌 先生
- 休 息（15:15～15:25） -----
- セッションⅢ** 司会：北海道大学 消化器外科Ⅱ 平野 聡 先生
6. 副腎疾患の外科的治療 15:25～15:50
講師：札幌医科大学 泌尿器科 岩森 豊哉 先生
 7. 甲状腺・副甲状腺・副腎疾患の病理 15:50～16:15
講師：国立病院機構国府病院 臨床研究部病態研究室 木村 伯子 先生
- 受講者
(3種以上の講演を受講した方)には生涯教育セミナー参加証をお渡しします。本セミナーへの出席は、日本外科学会での各種資格(外科専門医、指導医、認定登録医)の申請、更新時などの研修実績になります。
- 日本外科学会教育委員会
委 員：橋上 哲哉、武富 総信（地区委員長）
北海道地区小委員
委員長：武富 総信
委 員：東 信良、紙谷 寛之、平田 公一、橋上 哲哉、平野 聡、古川 博之、松居 善郎、山下 啓子、渡辺 敦
 - 日本外科学会北海道地区生涯教育セミナー事務局
〒060-8638 札幌市北区北15条西7丁目
北海道大学消化器外科Ⅰ 横尾 英樹 hi-yokoo@mua.biglobe.ne.jp
TEL：011-706-5927（内線5927） FAX：011-717-7515



3/19 日本消化器病学会北海道支部第18回教育講演会

2016年3月19日（土）10：00～16：00

札幌医科大学臨床教育研究棟1階講堂

2016年3月19日（土）、武富紹信教授の会長のもと上記講演会が開催されました。テーマを「消化器疾患診療のup to date」とし、北海道大学大学院医学研究科消化器内科学分野坂本直哉教授より「ウイルス性肝炎の最新の知見」、北海道大学病院消化器外科Ⅰ 本間重紀先生より「炎症性腸疾患診療の外科治療」、イムス札幌消化器中央総合病院 丹野誠志先生より「IPMN診療のup to date」、KKR札幌医療センター斗南病院化学療法・点滴センター 辻靖先生より「大腸癌化学療法法のup to date」についてご講演いただきました。またランチョンセミナーとして、肝門部胆管癌治療を世界的にリードされている名古屋大学大学院医学系研究科腫瘍外科学 柳野正人教授においでいただき「肝門部胆管狭窄の診断と治療」についてご講演いただきました。およそ300名の消化器に携わる内科・外科の先生に御参加いただき、大変盛況な講演会となりました。

一般財団法人 日本消化器病学会北海道支部

第18回 教育講演会

「消化器疾患診療のup to date」

日時 平成28年3月19日(土) 10:00~15:30

場所 札幌医科大学 臨床教育研究棟 講堂
札幌市中央区南1条西16丁目

●参加費/3,000円 ●専門医更新単位/18単位

会長 武富 紹信
北海道大学大学院医学研究科 消化器内科学分野Ⅰ 教授

Program

I 「ウイルス性肝炎の最新の知見」
10:00 ~ 11:00
司会：加藤 淳二 先生（札幌医科大学医学部 腫瘍・血液内科学講座 教授）
演者：坂本 直哉 先生（北海道大学大学院医学研究科 消化器内科学分野 教授）

II 「炎症性腸疾患診療の外科治療」
11:00 ~ 12:00
司会：武田 宏司 先生（北海道大学大学院医学研究科 腫瘍病態学講座 教授）
演者：本間 重紀 先生（北海道大学病院 消化器外科Ⅰ 助教授）

III ランチョンセミナー「肝門部胆管狭窄の診断と治療」
12:20 ~ 13:20
座長：武富 紹信 先生（北海道大学大学院医学研究科 消化器内科学分野Ⅰ 教授）
演者：柳野 正人 先生（名古屋大学大学院医学系研究科腫瘍外科学 教授） 協賛：大塚薬品工業株式会社

IV 「IPMN診療のup to date」
13:30 ~ 14:30
司会：古川 博之 先生（旭川医科大学外科学講座 消化器病態外科学分野 教授）
演者：丹野 誠志 先生（イムス札幌消化器中央総合病院 院長）

V 「大腸癌化学療法法のup to date」
14:30 ~ 15:30
司会：佐藤 康史 先生（札幌医科大学医学部 腫瘍・血液内科学講座 講師）
演者：辻 靖 先生（KKR札幌医療センター斗南病院 腫瘍内科 化学療法・点滴センター センター長）

●参加申込の事前登録は必要ありません。当日会場にて受付致します。
●午前・午後を通して参加した方に更新単位を渡します。

一般財団法人 日本消化器病学会北海道支部 支部長 加藤 淳二

北海道大学大学院医学研究科 消化器外科学分野Ⅰ 〒060-8638 札幌市北区北15条西7丁目
TEL 011-716-1161(代) 編集 藤本 浩文



5/28 第12回日本癌治療学会アップデート教育コース

2016年5月28日（土）13：00から4時間にわたってホテルさっぽろ芸文館 3Fロイヤルホールにて第12回日本癌治療学会アップデート教育コースが開催されました。全国規模での教育講演会であり平成28年度は武富教授が実行委員長であり当科で準備を進めてまいりました。

前半の総論では「薬物治療」「放射線治療」「緩和治療」について、後半の各論では「婦人科癌」「泌尿器癌」「造血器腫瘍」「消化器癌」といった頻度の高い癌腫の標準治療についてのその分野のエキスパートである7人の先生方に講演をしていただきました。up-to-dateな講演内容で北海道のみならず全国からも参加していただき大変有意義な会でありました。

第12回 日本癌治療学会 アップデート教育コース

日時 平成28年 5月 28日 (土) 13:00 ~ 17:00

会場 ホテルさっぽろ芸文館 3Fロイヤルホール
札幌市中央区北1条西12丁目 TEL.011-231-9551

実行委員長 **武富 紹信**
北海道大学大学院 医学研究科 消化器外科分野

13:00 ▶ 13:05	開会の挨拶	武富 紹信
1 13:05 ▶ 13:35	がんの薬物療法 総論	司会: 加藤 淳二 (札幌医科大学 腫瘍内科) 演者: 辻 靖 (NCC札幌がんセンター がん内科/腫瘍内科)
2 13:35 ▶ 14:05	がんの放射線療法 総論	司会: 福田 諭 (北海道大学大学院 医学研究科 放射線科) 演者: 石川 仁 (国立がん研究センター 放射線科)
3 14:05 ▶ 14:35	がんの緩和医療 総論	司会: 神山 俊哉 (北海道大学大学院 医学研究科 消化器外科) 演者: 石谷 邦彦 (札幌医科大学 緩和ケア科)
4 14:35 ▶ 15:05	婦人科癌の標準治療	司会: 齊藤 豪 (札幌医科大学 産婦人科) 演者: 渡利 英道 (北海道大学 医学部 産婦人科)
15:05 ▶ 15:25	休憩	
5 15:25 ▶ 15:55	泌尿器癌の標準治療	司会: 榎原 信雄 (北海道大学大学院 医学研究科 腎臓泌尿科) 演者: 寛 善行 (創礼大学医学部 泌尿器科)
6 15:55 ▶ 16:25	造血器腫瘍の標準治療	司会: 鳥本 悦宏 (旭川医科大学 腫瘍センター) 演者: 高橋 直人 (和歌山大学医学部 血液内科)
7 16:25 ▶ 16:55	消化器癌の標準治療	司会: 武富 紹信 (北海道大学大学院 医学研究科 消化器外科) 演者: 小松 嘉人 (北海道大学病院 腫瘍センター)
16:55 ▶ 17:00	閉会の挨拶	武富 紹信 (他校)

本コースは北海道医師会の承認を得て、北海道医師会認定生涯教育講座(4単位)、カリキュラムコード(84)として開催いたします。

- 受講料: 500 名 ○ 受講料: 1,000 円
- 単位登録制: 単位申請書は後述のホームページからお申し込みください。http://www.jcco.or.jp
- 受講証明発行: 行方記入、受講証明発行は、申込書・単位申請書提出のいずれかまたは両方で行ってください。
- 教育学会の研修単位: 日本がん治療学会各専門分野の学術単位: 3単位
一般社団法人日本がん治療学会がん診療に関する集合研修単位: 3時間 30分
一般社団法人日本がん治療学会がん専門医研修単位: 1単位

主 催: 一般社団法人日本癌治療学会
後 援: 札幌医科大学 医学研究科、北海道大学大学院 医学研究科、旭川医科大学、和歌山大学、一般社団法人日本癌治療学会
協 賛: 一般社団法人日本癌治療学会、一般社団法人日本癌治療学会、一般社団法人日本癌治療学会



6/25 第22回北海道内視鏡外科研究会が開催されました。

去る、6月25日に札幌市教育文化会館において第22回北海道内視鏡外科研究会（当番世話人：当科川村秀樹）が開催されました。ランチョンセミナーは東京医科歯科大学の小嶋一幸先生に腹腔鏡下胃切除のポイントを、イブニングセミナーには東北労災病院の徳村弘実先生に腹腔鏡下胆摘のポイントに関してご講演いただきました。あいにくの雨模様ではありましたが100名以上の方にご参加いただき、盛会に研究会を行うことができました。

参加していただいた方々に感謝いたします。



10/15 第2回平成次世代外科医療研究会

2016年10月15日（土）函館国際ホテルにて、第2回平成次世代外科医療研究会を開催しました。この研究会は春の日本外科学会、夏の日本消化器外科学会の時に開催されてきた平成2年卒外科医会を発端に、『平成2年卒外科医会から日本の外科を元気にしよう』をコンセプトに「平成次世代外科医療研究会（H2GSC）」と命名され、昨年からはじまった研究会です。今回は武富紹信が当番世話人、函館市立病院の中西一彰が事務局長として函館で開催いたしました。

当日は「各領域の最先端治療」「医療機器開発」「手術における私の工夫・こだわり」「外科医の教育」の4つのセッションごとに熱い議論がかわされました。教室の若手の先生方にも手伝っていただき、有難うございました。



第2回 平成次世代外科医療研究会

会期

2016年10月15日（土） 15:00 - 18:00

会場

函館国際ホテル

当番世話人

武富紹信（北海道大学大学院 消化器外科 I）

主題

- ①各領域の最先端治療
- ②医療機器開発
- ③手術における私の工夫・こだわり
- ④外科医の教育



11/12 第33回北海道ストーマリハビリテーション研究会学術集会

11月12日（土）、北海道大学医学部 臨床大講堂にて、第33回北海道ストーマリハビリテーション研究会学術集会が開催されました。

外科・泌尿器科・看護師さんなど幅広い分野の方々約100名にご参加いただきました。道内の各施設から13題の一般演題のご発表とそれらに対して活発な質疑応答が交わされました。

また、特別講演として、日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会の災害対策委員長も勤めております東京オストミーセンターの大村裕子先生をお招きして、『災害に備える意識 –ストーマ保有者を中心に–』と題して、災害時に実際に発生した事態とその対処方法などについて詳しく、そしてわかりやすく解説していただきました。我々医療者としては、まさに“災害に備える意識改革”の必要性を痛感いたしました。

ご発表いただきました先生方・看護師さん方、本会にご参加いただきました多くの方々へ深く感謝申し上げます。

当番世話人：高橋典彦（北海道大学病院 手術部 准教授）

第33回 北海道ストーマリハビリテーション研究会学術集会

参加費 2,000円

特別講演
「災害に備える意識 –ストーマ保有者を中心に–」
講師 大村 裕子

2016年 11月12日(土) 13:00~17:00
開催場所 北海道大学医学部 臨床大講堂

JR線 札幌駅下車 徒歩約15分
地下鉄 北15条駅下車 徒歩約10分

主催：北海道ストーマリハビリテーション研究会 後援：大腸肛門学会北海道支部／北海道看護協会



関連病院紹介

関連病院紹介

2015年関連病院手術数

▼施設名▼		全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	食道癌	鏡視下	胃癌	鏡視下	結腸癌	鏡視下	直腸癌	鏡視下	原発性肝臓癌	鏡視下	転移性肝臓癌	鏡視下	肺癌	鏡視下
がんセンター北海道	呼吸器外科	243	0	26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	消化器外科	247	0	22	2	0	41	23	61	53	33	26	4	0	12	0	10	0
	乳腺外科	349	0	106	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
市立札幌病院	732	5	272	0	0	55	16	71	41	38	15	15	2	18	1	14	0	
岩見沢市立総合病院	437	33	349	3	0	59	14	50	32	27	16	4	0	3	0	7	0	
苫小牧市立病院	454	12	9	0	0	24	7	50	37	13	10	5	0	3	0	6	0	
釧路労災病院	537	1	42	4	0	44	32	70	25	36	14	2	0	3	1	9	0	
札幌厚生病院	1,017	0	17	0	0	92	69	113	67	65	42	55	7	10	2	36	0	
旭川厚生病院	758	0	4	6	3	77	22	95	44	46	33	6	0	6	0	31	0	
帯広協会病院	447	21	13	1	0	25	5	50	37	30	27	2	0	4	1	5	0	
KKR札幌医療センター	681	0	149	2	0	36	20	69	51	13	13	7	2	5	0	4	0	
JCHO札幌北辰病院 (社保総合)	405	2	25	0	0	15	4	47	23	17	11	1	1	17	5	2	0	
日鋼記念病院	478	3	1	3	1	18	6	23	14	14	6	3	0	7	0	8	0	
市立函館病院	706	11	45	1	0	61	0	76	74	51	47	13	3	9	6	16	0	
北海道医療センター (旧国立西札幌)	487	0	60	0	0	26	14	40	31	26	25	4	0	3	0	8	0	
市立稚内病院	183	2	47	0	0	8	6	23	7	7	6	0	0	0	0	0	0	
士別市立病院	76	9	118	0	0	5	1	10	1	4	0	0	0	5	0	0	0	
砂川市立病院	415	3	20	0	0	27	17	54	31	29	24	8	4	5	2	7	1	
小樽市立病院	420	34	158	0	0	38	8	56	36	18	9	0	0	1	0	2	0	
市立千歳市民病院	226	3	6	0	0	20	5	31	14	15	2	0	0	0	0	0	0	
網走厚生病院	298	2	9	0	0	18	6	41	35	14	13	5	0	1	0	3	0	
JCHO北海道病院 (北海道社保)	394	0	8	0	0	30	11	50	31	16	13	7	0	12	0	8	0	
天使病院	516	0	19	0	0	9	0	20	15	15	8	7	0	2	0	0	0	
溪和会江別病院	278	14	183	2	0	28	4	28	4	14	0	4	0	0	0	8	0	
札幌北極病院	432	143	900	0	0	14	11	42	29	17	14	2	0	5	2	3	0	
北農会恵み野病院	342	2	16	0	0	20	10	33	20	24	10	7	0	3	0	2	0	
苫小牧日翔病院	151	2	89	0	0	8	1	16	5	2	1	1	0	1	0	0	0	
市立美唄病院	0	2	23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
市立三笠総合病院	37	13	55	1	0	4	1	9	1	4	2	0	0	1	0	1	0	
斜里町国保病院	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
町立中標津病院	165	7	8	0	0	16	2	19	5	8	3	0	0	2	0	0	0	
森町国保病院	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
西さっぽろ病院 (旧河西外科)	115	58	84	0	0	3	3	7	3	4	1	0	0	0	0	0	0	
静和記念病院	136	1	16	0	0	9	1	14	5	8	1	1	0	0	0	0	0	
北海道対がん協会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
洞爺協会病院	81	0	100	0	0	1	0	6	4	3	3	0	0	1	0	0	0	
網走中央病院	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
札幌北クリニック	0	0	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
北札幌病院	0	0	22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
すずかけセントラル	119	0	57	0	0	11	4	19	4	9	8	0	0	2	0	1	0	
長万部町立病院	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
はまなす医院	74	0	36	0	0	1	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
静仁会静内病院	121	17	44	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
新札幌聖陵ホスピタル	0	0	173	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
JCHO登別病院	10	0	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
合計	10,379	194	2,604	25	4	843	323	1,295	779	621	403	163	19	141	20	191	1	

胆道癌	鏡視下	乳癌	鏡視下	甲状腺癌	鏡視下	肺癌	鏡視下	胆石症	鏡視下	虫垂切除	鏡視下	小腸切除	鏡視下	鼠径ヘルニア根治術	鏡視下	その他	鏡視下
-	-	-	-	-	-	158	148	-	-	-	-	-	-	-	-	65	61
2	0	0	0	0	0	0	0	15	14	2	2	9	3	18	0	58	0
0	0	325	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6	0	91	0	1	0	0	0	75	63	46	16	20	3	75	29	0	0
2	0	29	0	2	0	29	29	67	54	43	11	0	0	66	19	428	6
11	0	36	0	0	0	15	15	86	65	38	37	20	0	61	30	0	0
2	0	58	0	0	0	6	6	76	60	38	34	13	3	88	44	131	11
7	0	57	0	108	0	32	26	102	82	31	5	17	0	74	35	222	0
14	0	78	0	0	0	73	38	74	60	46	29	17	4	112	39	142	19
3	0	43	0	1	0	0	0	62	55	52	26	8	1	116	9	79	3
5	0	101	0	0	0	58	56	73	66	61	57	12	1	72	54	163	49
4	0	29	0	3	0	0	0	53	42	36	30	13	2	73	21	122	16
2	0	41	0	1	0	9	6	31	23	31	21	16	1	44	11	234	32
8	0	51	0	2	0	0	0	119	111	49	44	22	2	89	44	0	0
8	0	21	0	2	0	32	28	69	55	43	40	10	1	71	55	184	36
2	0	6	0	0	0	1	1	30	21	28	16	7	0	40	15	80	0
1	0	2	0	0	0	3	3	8	6	0	0	19	0	22	0	124	2
2	0	25	0	0	0	(18)	(18)	82	76	29	27	25	7	58	36	88	0
0	0	35	0	2	0	3	2	28	27	27	11	9	1	75	34	318	16
2	0	17	0	0	0	0	0	37	26	34	33	3	1	42	14	34	4
1	0	20	0	1	0	0	0	67	59	26	26	2	0	45	25	83	29
6	0	4	0	10	0	31	31	49	45	28	3	18	0	41	1	84	13
3	0	21	0	0	0	3	3	29	29	27	27	11	4	205	201	185	16
1	0	9	0	4	0	3	3	47	28	29	1	1	0	32	0	364	0
1	0	0	0	0	0	0	0	50	42	14	14	4	1	51	30	700	0
3	1	9	0	1	0	1	1	69	68	36	28	10	0	62	35	65	23
0	0	6	0	0	0	0	0	19	17	13	10	6	0	43	13	180	4
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	23	0
0	0	1	0	1	0	0	0	3	1	2	0	0	0	5	0	73	0
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
0	0	7	0	0	0	0	0	33	23	25	0	11	0	27	0	32	3
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
0	0	1	0	0	0	0	0	12	12	19	19	2	2	36	32	31	26
0	0	1	0	0	0	0	0	38	27	47	39	5	0	9	0	106	26
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	2	0	0	0	11	9	10	2	1	0	8	7	38	5
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1	0	20	0	1	0	2	2	16	16	8	8	6	2	19	11	71	3
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	5	0	0	0	11	0	87	1
0	0	3	0	3	0	0	0	15	0	3	0	0	0	13	0	84	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	158	15
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	17	0
97	1	1,147	0	145	0	301	250	1,548	1,283	926	616	317	39	1,813	844	4,802	358

■ 関連病院総手術件数 (2008年~2015年)

施設名	2008年			2009年			2010年			2011年			2012年			2013年			2014年			2015年			
	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	全身麻酔	脊椎麻酔	局所麻酔	
がんセンター1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	261	0	16	245	0	21	330	0	40	243	0	26	
北海道がんセンター	443	7	59	501	4	57	526	3	47	206	3	37	286	0	31	282	1	47	232	0	22	247	0	22	
乳腺外科	-	-	-	259	0	119	280	0	180	300	0	120	300	0	150	312	0	141	270	0	50	349	0	106	
市立札幌病院	568	46	138	544	36	156	604	34	161	625	33	217	617	48	223	609	38	280	641	24	287	732	5	272	
岩見沢市立総合病院	303	60	62	332	77	37	383	73	43	311	71	34	328	75	35	313	28	19	403	34	18	437	33	349	
苫小牧市立総合病院	463	63	40	426	62	36	395	50	28	424	42	16	355	18	22	371	14	16	376	9	5	454	12	9	
釧路労災病院	575	6	99	645	4	87	639	4	93	590	3	73	629	1	43	663	3	42	583	1	56	537	1	42	
札幌厚生病院	917	2	11	944	-	23	934	2	32	964	1	27	953	1	38	1,034	0	32	1,058	0	29	1,017	0	17	
旭川厚生病院	773	54	23	694	70	8	652	80	16	719	0	0	702	0	0	711	5	12	753	6	6	758	0	4	
帯広協会病院	390	100	37	474	0	36	427	0	20	436	3	22	459	10	10	438	13	12	468	27	9	447	21	13	
KKR札幌医療センター	602	0	46	708	0	49	740	0	26	704	0	90	720	0	6	693	2	36	693	3	34	681	-	149	
JCHO札幌北辰病院(社保総合)	422	3	26	430	1	27	360	0	22	387	0	21	383	0	22	320	0	33	317	6	45	405	2	25	
日鋼記念病院	574	60	53	560	39	34	583	31	24	540	33	22	514	35	22	602	23	23	503	25	21	478	3	1	
市立函館病院	682	52	61	775	18	96	765	21	89	683	32	69	703	32	72	641	60	83	707	56	53	706	11	45	
北海道医療センター	358	2	53	405	6	72	484	1	58	415	5	48	440	12	49	463	2	39	419	0	86	487	0	60	
市立稚内病院	198	49	10	171	45	5	226	42	7	226	32	2	225	11	0	240	0	0	208	4	0	183	2	47	
士別市立病院	89	36	85	84	41	75	91	46	79	123	26	76	147	1	91	106	2	100	127	2	109	76	9	118	
砂川市立病院	396	12	7	397	10	3	370	0	30	395	7	32	430	5	34	389	3	35	434	5	34	415	3	20	
小樽市立病院	260	31	117	235	38	114	244	26	130	265	38	137	276	29	135	299	31	105	346	20	122	420	34	158	
千歳市民病院	201	41	5	225	21	10	206	40	6	245	4	12	201	25	5	215	17	9	208	8	13	226	3	6	
網走厚生病院	360	11	45	352	7	23	312	12	27	315	4	19	316	6	22	316	6	12	318	5	18	298	2	9	
JCHO北海道病院(北海道社保)	451	5	26	381	7	25	399	3	14	450	3	11	385	2	3	424	-	8	408	0	13	394	0	8	
天使病院	404	2	17	363	-	24	407	1	20	412	0	14	407	0	12	489	0	13	465	0	22	516	0	19	
浜和会江別病院	215	57	169	243	53	181	210	61	180	213	83	219	253	50	127	261	49	262	308	12	210	278	14	183	
札幌北楡病院	570	10	639	471	14	744	563	14	741	548	30	768	479	20	720	345	6	840	436	143	913	432	143	900	
恵み野病院	304	11	35	350	5	50	339	0	28	343	0	14	329	1	20	314	2	27	348	0	25	342	2	16	
苫小牧日翔病院	215	8	95	217	7	100	198	29	83	193	11	99	213	4	102	200	6	115	142	3	79	151	2	89	
市立美瑛病院	41	46	128	41	32	102	41	35	124	25	16	124	1	4	120	3	4	33	1	2	29	0	2	23	
市立三笠総合病院	71	25	115	63	26	118	50	27	126	53	24	68	50	16	98	56	15	124	35	18	57	37	13	55	
斜里町国保病院	17	13	24	0	0	0	12	7	5	22	18	21	16	10	23	21	15	32	15	11	31	-	-	-	
町立中標津病院	153	9	22	165	19	14	165	21	11	168	19	11	218	3	4	193	1	3	146	3	1	165	7	8	
十勝いけだ医療センター	0	2	2	0	4	1	0	0	0	0	0	0	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
町立厚岸病院	14	35	24	5	9	12	0	10	8	0	7	7	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
長万部町立病院	-	-	29	-	-	22	0	0	27	0	0	12	0	0	0	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
せたな町立国保病院	-	-	60	-	-	60	0	0	65	0	0	65	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
森町国保病院	0	0	200	0	0	100	0	0	100	0	0	100	0	0	0	0	0	200	-	-	-	-	-	-	
西さっぽろ病院(旧河西外科)	62	111	79	74	103	94	72	64	175	124	65	166	166	56	142	169	40	131	154	59	117	115	58	84	
静和記念病院	159	0	37	164	0	29	148	0	24	150	0	21	144	2	14	121	0	15	213	1	22	136	1	16	
洞爺協会病院	52	-	100	57	5	100	46	7	70	62	2	70	69	9	100	61	-	100	68	10	86	81	0	100	
網走中央病院	12	19	-	12	23	-	24	21	不明	29	13	不明	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0	不明	
北札幌病院	2	2	16	0	8	20	0	6	31	0	9	23	0	3	28	0	1	26	-	-	23	-	-	22	
札幌北クリニック																			0	0	10	0	0	14	
北海道対がん協会														0	0	0	-	-	-	-	-	-	-	-	
すずかけセントラル																74	2	40	104	4	43	119	0	57	
篠路はまなすクリニック														2	1	20	4	-	22	40	1	27	74	0	36
静仁会静内病院														83	6	66	-	-	-	3	2	7	121	17	44
新札幌聖陵ホスピタル																			0	0	93	-	-	173	
JCHO登別病院																						10	0	15	
総計	11,885	1,231	3,614	12,336	992	3,515	12,429	942	3,685	12,269	788	3,552	11,799	496	2,609	11,752	389	3,067	11,950	504	2,825	12,567	400	3,360	

旭川厚生病院



旭川厚生病院外科です。北大一外から7名、旭川医大二外から2名、他2名で構成されています。(山田医師と近藤医師は呼吸器外科兼任)。外来は基本的に2診制ですが、乳腺外科と他科受診があるため、ほぼ毎日4つある診察室がフル稼働していることが多い現状です。

当院の診療圏は道北全般に及び、旭川周辺の市町村のみならず遠くは稚内市や紋別市、遠軽町などからも患者が訪れますが、この地域の特徴として、冬期間は悪天候によって外来に出来ない人がいることが珍しくありません。

主な診療対象は消化器外科全般で、上下部消化管、肝胆膵、ヘルニア、乳腺、と多岐にわたります。最近の傾向としては他の病院も同様かもしれませんが胃がん、食道がんが減少傾向、大腸がんはコンスタントにあります。肝胆膵系の高難度手術も少なくなく、肝切時には神山先生にしばしば応援を依頼しています。また、膵頭十二指腸切除術・膵体尾部切除術などは昨年は年間40例近くありました。また、乳癌症例も増加していますが、乳がん患者は患者意識が高く、消化器系患者に比しより長期のフォローアップを要することが多いため、忙しさは年々増しております。

昨年の年間手術症例数は750例余で本年も昨年と同等のペースで手術を行っています。他科、他院からの緊急の依頼も少なくなく臨時手術症例は約100例です。当科がLACやLADGなど腹腔鏡手術に本格的に取り組んだのは平成19年頃からで、現在では腹腔鏡手術の占める割合はLC、LAC、LADG、ラパアッペ、ラパヘルなど全て増加傾向にあります。これらの件数をただ増やすだけでなく、さらに質の高い腹腔鏡手術を行えるように日々研鑽しています。

(文責：柳田 尚之)

網走厚生病院



網走厚生病院はオホーツク沿岸斜網地区(周辺人口合わせて約9万人)で唯一、外科的治療のできる病院です。診療科は内科、循環器科、小児科、産婦人科、眼科、整形外科が常勤で総勢21名、耳鼻科、泌尿器科、皮膚科、呼吸器科、透析科さらに麻酔科が出張医で対応しています。スタッフは西川副院長、横山、石川、金沢の4名で総病床数309床のうち外科は37床を担当しています。2015年の総手術件数は309件でしたが、2016年は11月末時点で341件と増加しています。主に消化器と乳腺疾患が中心で、鏡視下手術の割合は結腸癌74%、直腸癌100%、胃癌70%、胆石88%、虫垂炎86%、ヘルニア35%となっております。乳腺はほぼ全例にセンチネルリンパ節生検を実施しており、温存術は31%となっております。地域事情により臨時手術は沢山ありそうですが、実際は全体の25%以下で、夜間の緊急手術も年間数回程度です。当院はなるべく若い先生に手術を執刀してもらおう方針としており、また学会や研修会にも積極的に参加してもらえる環境にあります。さらに病院自体が若い先生や医療スタッフが多く、各科との関係も良好で少ない人数ながら活気のある病院です。網走は知床にも近く、自然環境は申し分ありません。若い先生が研修の場として当院を選択肢に入れてもらえることを熱望しています。

(文責：横山 良司)

網走中央病院



当院は昭和35年に先代有里伸一（北大29期）が網走中央病院として開業し、私有里仁志（昭和58年卒）が網走に戻ったのを機に平成9年医療法人社団網走中央病院と致しました。開院当初から夜間救急の輪番当番を担う急性期病院として診療してきましたが、地域医療のニーズに応え平成24年に入院を療養病床（86床）に転換しました。

網走市の医療は厚生病院が基幹病院となり、当院は急性期治療後の在宅復帰や施設入所への橋渡的存在となっております。以前は医局からの出張医師と全身麻酔手術施行していましたが、現在手術は行っていません。

外来は従来通り外科（有里）と内科（2名）体制で診療しており、互いに連携の元で総合的に診断する様に心掛けて、通院患者の急性期疾患には別個に入院対応出来る様にしております。

現医局員の先生方には魅力のある病院ではありませんが、将来「総合診療医」として地方医療に貢献されたいとお考えになった際は是非ご連絡頂きたいと思っております。

（文責：有里 仁志）

岩見沢市立総合病院



前列左から上泉先生、中島先生、羽田
後列左から葛西先生、許先生、石川先生、辻先生、小野寺研修医

2016年度の岩見沢市立総合病院外科は中島保明名誉院長・伊藤浩二副院長・上泉洋外科診療部長・羽田力・許理威・葛西弘規・辻健志・石川倫啓の総勢8名体制で診療に従事して参りました。南空知の他院の事情もありこの3年間は手術症例数が増加しており、2015年度の年間手術症例数は全麻455件・腰麻36件でした。手術は基本的に若い先生を中心に割り当てられており、かなり中身の濃い研修が行われていると思います。腹腔鏡下手術への積極的な取り組みも行っており、教室から吉田雅先生・市川伸樹先生の応援を得て中堅から若手が技術認定医習得を目指し研鑽しています。また、上泉部長の指導のもと肺葉切除も含め年間20～30例ほどの胸腔鏡下手術も手掛けております。

当科の守備範囲は42床の外科病棟だけでなく40床の透析病棟、220人が治療を受ける血液浄化センターにも及んでいます。2015年度の内シャント造設術は37件、PTA（経皮的血管形成術）は245件でした。我々消化器外科医にとって内シャント造設術は血管外科手技を、PTAはIVRの基本を学べる貴重な機会であると考えています。

また、地元の中高生を対象としたブラックジャックセミナー、医学生を対象としたシニアセミナーも開催しております。現在の当院研修医の1人は過去のセミナー受講生です。また、セミナー受講生の医学生が続々と当院での研修を希望してくれています。近い将来、その中から我々第一外科の仲間が誕生することが期待されます。

（文責：羽田 力）

小樽市立病院



佐野修平(医長) 渡辺義人(医療部長) 越前谷勇人(主任医療部長) 権藤寛(副院長)
川俣孝(嘱託医)

小樽市は2つに分かれていた自治体病院が統合され、2014年12月1日、地上7階地下1階、21診療科を備えた総病床数388床（一般302床、精神80床、結核4床、感染2床）の新病院に生まれ変わり小樽後志医療圏により本当の意味での総合病院が出来上がりました。小樽・後志2次医療圏の基幹病院として、高度・急性期医療を担い、他の医療機関とのネットワーク化を推進し、この地域で完結できる医療体制の拠点となることを目指しています。

2015年外科の総手術件数は612件です。統合前に比べ約20%増、新築特需が落ち着いた今年度前半は、昨年より若干の減少はありましたが年末に向けしり上がりにペースアップしてきています。昨年の腹腔鏡下手術は165件で、大腸癌・胃癌・胆嚢結石症・虫垂炎・ヘルニアを中心に年々増加しています。緊急手術も可能な限り腹腔鏡で対応しています。また病院の統合に伴い複数化にまたがる疾患が増えました。

現在外科スタッフは正職員4名（権藤寛副院長、越前谷勇人主任医療部長、渡辺義人医療部長、佐野修平外科医長）、嘱託医1名（川俣孝前副院長）で手術や化学療法その他、研修医12名（1年目6名、2年目6名）の教育と指導に当たっています。また北海道がんセンター呼吸器外科のご協力を賜り、本格的な胸腔鏡手術も開始しました。市内開業医を中心にID-linkを用いたon-line診断が一部で開始され、また倶知安厚生病院とは遠隔画像診断システムを用いて緊急搬送前に協議し連携を深めています。

（文責：越前谷勇人）

帯広協会病院



左上から阿部院長、高橋、水上、大畑、加藤、橋本、
中心に鈴木麻由（来年入局）

帯広協会病院は今年度阿部厚憲院長、橋本卓を除き、4人が入れ替え（高橋徹、大畑多嘉宣、水上達三、加藤拓也）となり心機一転しました。皆様からたくさんのお声掛けを頂きましたが、今年度解散するSMAPとは違い、一見不仲のように見えますがリーダー橋本を中心に団結して仕事に取り組んでおります。今のところ解散予定はありません。2016年度は前年度を超える手術件数で、500件を優に超える勢いで手術を行っております。今年度の取り組みとしましては11月から上徳ひろみ先生にお手伝い頂き、毎週月・木・金で乳腺外来を新設しました。これにより乳癌手術件数が増加し、特に早期乳癌の発見も増加しております。また今年度から「外科24時間ダイレクトコール」と銘打ち、周囲の病院・クリニックなどから手術が必要そうな患者様を直接外科PHSに相談できる体制を設けたことで、臨時手術件数も増加しております。嬉しいニュースとしましては、彼氏との関係がギクシャクしつつある鈴木麻由の来年度入局（一緒にカナダでオーロラ見れず）、阿部院長の六つ子出産（すぐ盲導犬施設へ連行）、橋本指南の松井結婚（前任。まだあいさつなし）、高橋の新築祝い（推定1億円。帯広ではない）、水上のソフトバンク方面への完全移籍取り消し（違約金なし）、加藤の全快祝い（夜竿中折病）などがありました。大畑の矯正も整いつつあります。

心配をおかけし申し訳ありません。十勝は大丈夫です。この場をお借りして御礼申し上げます。（文責：加藤 拓也（助言：橋本））

北札幌病院



医療法人社団北札幌病院は1963年（昭和38年）開業、一般病床35床、療養病床60床で、外科スタッフは院長の小川秀彰（昭和63年卒）1人です。現在、医局から外来診療や当直の多大なる応援を頂いており、心より感謝申し上げます。年間手術件数は20～30例で、2008年までは医局からの応援医師と全身麻酔の手術を年間数例施行していましたが、最近では局所麻酔の小手術（CVポート留置、胃瘻造設など）のみになりました。当院の特色としては、JR学園都市線新琴似駅と地下鉄南北線麻生駅のいずれからも徒歩数分で公共交通アクセスが良好です。また、医局の関連病院で北大病院より北に位置する病院は少ないため、札幌市北部や石狩市の患者さんの受け入れに適しています。関連病院としての北札幌病院の役割は、北大病院での手術後の療養継続、入院・外来での癌化学療法、入院して北大病院通院放射線療法（送迎あり）、癌終末期緩和ケアなどと考えています。今年4月によくホームページを開設し、入院・外来患者さんへの情報提供が充実しました。今後も医局との連携を維持しながら、地域医療に貢献していきたいと考えておりますので、宜しくお願い申し上げます。

（文責：小川 秀彰）

独立行政法人労働者健康安全機構釧路労災病院外科



カンファレンス後の会議室にて
後列左から 江本 谷 千田
前列左から 小林 小笠原 河合

釧路と言えば「霧」をイメージする人が多いようですが、実は晴天の日が多く冬は乾燥して降雪が少ない太平洋側気候なのです。釧路に住んで一冬越すと「認識が改まって住みやすい街なんだな」と感じるのは私だけではないはず。広大な道東地域の医療を釧路市が支えており、当院も二次救急を含む地域医療の中核病院の役割を担っています。がん診療連携拠点病院・地域医療支援病院・臨床研修指定病院として地域住民の安心をサポートするとともに勤労者医療にも接する機会があります。

当科は、消化器・乳腺・緩和ケアを三本の柱として診療しています。教室の事情で2016年度は1名減の6名で診療をすることになりましたが、2016年の手術実績（11月末まで）は561件（全身麻酔520件、臨時89件）と、昨年を上回る勢いです。主な疾患は食道癌4例、胃癌35例、結腸癌65例、直腸癌31例、肝胆膵癌17例、乳癌71例（一次再建2例）、虫垂炎28例、胆石症83例、鼠径ヘルニア77例でした。麻酔科常勤医の確保はいまだに課題ではありますが、手術実績の維持・向上は図れています。院長の方針により機器の導入には積極的で、腹腔鏡下手術の推進、乳癌診断機器の更新、緩和ケアの充実を次年度以降の強化目標としています。何でもできるブラックジャックなどと言うと「そんな時代じゃない」と笑われそうですが、当科では総合的な臨床外科医の育成を心掛けています。開腹と腹腔鏡の療法が上手な外科医になるため、飽き飽きするくらい手術を経験したい熱い心を持った方を求めます。

（文責：副院長 小笠原和宏）

KKR札幌医療センター



KKR札幌医療センターの前身である幌南病院（こうなんびょういん）は平岸のリンゴ畑の中に昭和27年に開設し、平成18年にKKR札幌医療センターと名称を変更しています。

病床数は450床で、すべて急性期病床です。年間の手術件数は年々増加しておりますが、昨年は720件ほどでした。このうち消化器一般外科が500件ほど、乳腺外科が100件、呼吸器外科が100件という内訳になります。スタッフは小池・田村（乳腺）・武田・今・桑原（呼吸器）・財津・村田・大淵の8人です。また、当院では血液透析も外科が担当しており、24床ある血液浄化センターは外科の管理で、透析の認定医・専門医も取得できる体制です。

手術では胸部も腹部も内視鏡外科手術が多いのが特色で、最近では進行胃癌も腹腔鏡手術でD2郭清を行っています。大腸癌は年々増加しており、年100件ほどになっていますが、ほとんどが腹腔鏡手術です。鼠径ヘルニアは腹腔鏡手術の方が圧倒的に多くなりましたが、再発が全くないのには驚かされます。

また、当院は初期研修医が1年目、2年目共に10名おり、後期研修の医師も多く、非常に活気のある病院で、来年発足する予定であった新たな外科の専門医制度には道内の3大学、手稲漢仁会と当院の5施設が審査に合格しておりました。しかし、新たな専門医制度全体が1年先送りとなっており、残念です。

（文責：副院長 小池 雅彦）

溪和会江別病院



溪和会江別病院は昭和62年11月に故品田佳秀先生が開院され、急性期医療を中心に地域医療に取り組み、今年で28年目となります。スタッフは院長の大森一吉先生、主任外科部長の野村克先生、外科部長の佐々木彩実先生、医長の小野仁の計4名で外科・透析診療を行っております。開院以来、当院の運営・発展にご尽力された南田猛先生は今年をもって退職されました。

外科のベッド数は52床で、2015年の外科の総手術件数は488件（全身麻酔278件、局所麻酔183件）です。悪性疾患は食道癌2例、胃癌28例、大腸癌42例、原発性肝癌4例、膵癌8例、胆道癌1例、乳癌9例、甲状腺癌4例、肺癌3例でした。良性疾患は虫垂炎29例、胆石症47例、鼠径ヘルニア32例でした。その他にも、透析用の内シャント造設や血管拡張術など症例は多岐にわたります。また、腹腔鏡手術に関しては、経験を蓄積し、徐々に適応を拡大しております。

毎週月曜日には移植Gの山下健一郎先生、毎週水曜日には肝胆膵Gの蒲池浩文先生に来ていただき、外来および手術に入っただき御指導御鞭撻いただき大変勉強になります。また、毎月第一土曜日には乳腺外科の馬場基先生に来ていただき乳腺外科外来をお願いしております。術前術後の化学療法は外科で行っており、化学療法の経験が得られます。災害救急当番日には、骨折、脱臼などの外傷や、腹部救急、心肺停止などの救急医療を幅広く経験できます。土日の当直では、大学の諸先生方に大変お世話になっており、感謝しております。自立した外科医に必要な臨床力を培うのに非常に適した病院です。

(文責：小野 仁)

札幌北クリニック



札幌北クリニックは、北区で透析専門クリニックとして診療しています。現在の透析ベッド数は45床で、135名ほどの外来透析患者さんを診療しております。これまで常勤医師は院長、増子佳弘、顧問、大平整爾先生の2名でしたが、今年から津田一郎先生もメンバーに加わっていただきました。また、北大に近いこともあり、第一外科の諸先生や他科の医師の方々に、夜間や専門診療などの応援に来ていただいております。

その他透析室ではNs、CEの他、事務などのスタッフが30名前後働いています。

2015年はシャント局所麻酔手術を13件、すべてエコーを使ったインターベンション治療を60件ほど行ないました。現在、第一外科関連病院で外科が透析管理を担っている施設が数力所あります。透析療法の見識を深めるために当院で役に立てることがあれば気軽に相談してください。

(文責：増子 佳弘)

札幌厚生病院外科



2016年の外科は高橋（昌）、高橋（弘）、石津、田中、秦、高橋（周）、山上、田原、柿坂、野口、及川、乾野、松本のスタッフ13名と、嘱託の安達の計14名で診療を行っています。

当科の特徴は臓器別に中心となる医師を決めていることで、甲状腺は高橋（弘）、胃は高橋（周）・松本、大腸は山上・野口、乳腺は秦・田中、呼吸器は田中、肝は石津・柿坂、胆膵は田原・柿坂が担当しています。悪性疾患の治療方針に関しては、各臓器別に週一回開催されるカンサーボードで、他科と詳細な検討を行い決定しています。

2015年の手術症例数は1034例でした。主要な疾患の手術数は甲状腺癌・甲状腺腫瘍116例、胃癌93例、大腸癌184例、乳癌、乳腺腫瘍62例、肺癌・肺腫瘍39例、肝癌・肝腫瘍84例、膵癌・膵腫瘍42例、胆道悪性腫瘍13例、胆のう良性疾患156例、炎症性腸疾患42例、虫垂炎31例、そ径ヘルニア72例でした。クリニカルパスの適応疾患を拡大し、多くの症例で医療スタッフと患者さんが外来の時点から退院までのパスの共有化を図ることが出来るようになりました。年々、手術件数の増加と、患者の高齢化に伴った術前の合併症の増加などで、術前管理上の仕事が年々負担になっていますが、術前管理センターの協力を得られ、薬剤管理や患者さんへのオリエンテーション、合併症の把握などが外来の時点から行えるようになっていきます。

現在当院は急性期病院としての生き残りを模索している段階ですが、外科医や麻酔医のマンパワー不足がありその道のりは厳しいものがあります。各種専門医取得などに配慮いたしますので、手術が好きな若手の先生方には是非当院に来て協力してもらえたらと思っています。

なお、スタッフの休職のため10月から第一外科から週3回応援に来ていただいています。この場をお借りして御礼をさせていただきます。

（文責：石津 寛之）

札幌北楡病院



当院は一般・消化器外科の推進、移植医療の展開、人工臓器開発と臨床応用、高度先進医療技術の開発と実践を旗印に急性期医療施設として昭和60年に開院されました。総病床数は281床で、15の診療科があります。外科は米川元樹、目黒順一、久木田和丘、小野寺一彦、堀江卓、飯田潤一、服部優宏、土橋誠一郎、谷山宜之、佐藤正法、小丹枝裕二の11名です。透析・血管外科チームと一般・消化器外科チームに分かれて診療に当たっていますがお互いに協力し合っています。消化器外科は内視鏡外科を重点的に行っており、Reduced Port Surgery、ロボット支援下手術も行っています。また、透析関連では内シャント造設、血管グラフト留置、Blood Accessトラブルに幅広く対応し道内の多くの透析施設からの信頼を得ています。

2015年の外科の手術件数は約1100例で消化器系のおもな手術は約230例です。透析関連の血管系の手術が殆どを占める約900例という数字は、実際はかなり過酷な数字です。高齢化が進むスタッフで厳しい戦いを続けていますが、今年は旭川医大出身の谷山先生が血管チームに加入してくださいました。

2016年は病院の創始者であり、第一外科の偉大な先輩である川村明夫先生が急逝されました。残った我々が、川村先生の志を引き継いで、先進的な医療を積極的に取り入れつつ、地域の皆さんからの信頼に応えられるよう、また臨床と研究に今後も日々精進していく所存です。今後ともよろしく願いいたします。

（文責：服部 優宏）

士別市立病院 外科



当科は平成28年4月から平成元年卒の山賀1名体制となりました。昭和57年卒の澤谷先生と平成元年卒の三國先生が各々月曜日と金曜日の外来を担当してくれています。また4月から昭和54年卒の澤口先生が検診業務を引き受けて下さっています。当院は昨年慢性期を中心とする病棟再編を行い、現在療養80床、急性期病棟60床（回復期含む）の体制となりました。急性期病棟の外科入院患者は12名前後ですが、急性期を過ぎたあと自宅にすぐに帰られない方は療養病棟へすぐ移れるようになり、入退院の調整が非常に楽になりました。その他に55名の透析患者を担当しています。空床が出るようになったため今年から1部の方に5時間透析を開始しました。外科手術は、私が病気になったためもあり、長らく全身麻酔手術を控えていましたが、8月から消化器内科医が1名増員となり、9月から徐々に全身麻酔患者、消化器手術が増えています。しかし、一人体制であり休日の緊急手術や大きな手術は主に旭川厚生病院にお願いしています。この場を借りて同門の先生方に感謝申し上げます。また、私の入院期間中に出張の先生方を大学医局から派遣して頂き治療に専念することができました。お陰様で元通りとまではいきませんが、だいぶ髪の毛も復活しました。ご支援大変ありがとうございました。

（文責：副院長 山賀 昭二）

市立札幌病院 外科



病院全体747床のうち、一般消化器外科として46床、乳腺外科として6床の計52床を任ざれております。外科スタッフは三澤理事をはじめ9名に加え後期研修医1名の計10名で診療しています。乳腺・小児疾患は大川医師を中心に、腔鏡手術は皆川医師が中心にやっています。ラパヘルを立ち上げてくれた葛西先生が3月に岩見沢へ異動となり、4月からは沢田先生が赴任しました。評判通りの爽やかさで診療に当たってくれています。当院赴任2年目に入った寺崎医師も脂がのっています。

2015年の全麻手術件数は732件（臨時・緊急手術は160件）でした。主な手術の件数は、乳腺疾患：102例、胃癌：55例（腹腔鏡下16）、大腸癌：109例（腹腔鏡下56）、胆摘：75例（腹腔鏡下63）、肝切除36例（原発15例）（腹腔鏡下3）、PD13例、DP7例、鼠径または大腿ヘルニア：成人51例（TAPP：29例）、小児ヘルニア：25例、ヘルニアを除く小児手術：9例です。また、若手がCVポート留置を一手に引き受けており、他科からの依頼も含めて191例でした。

最近の傾向としては、大川医師が中心となって診療している乳癌が増加しており、形成外科と合同で行う乳房切除および一次的再建術も積極的に行われております。

また、2015年11月に開設された術後ハイケアユニットが軌道に乗り安定した術後管理を提供できるようになりました。同部門の宿直は当科スタッフが交代で行っております。

（文責：大島 隆宏）

市立千歳市民病院



当院は総病床数190床の千歳市唯一の急性期総合病院で、本年度も川向裕司、福島剛、安念和哉、谷安弘の4名で診療にあたっております。

- ・昨年度の年間手術数は平均238件（全麻229件）、教室の先生方のご指導、ご助力のおかげで鏡視下手術の症例数は101例と100例をこえました。
- ・千歳市を含む南空知地区の救急医療の中心施設として365日24時間体制で交通外傷や腹部救急患者の対応にもあたっており、昨年は202件の救急患者の受け入れを行いました。

常勤医34名と医師数の少ない小規模な病院ゆえ、診療のみならず病院運営などにおいても外科の果たす役割は大きく、4名で力をあわせ病院理念である「より質の高い心あたたまる医療の実現」を目指しております。

（文責：福島 剛）

市立函館病院



万延元年（1860年）に北海道初の官立病院（箱館医学所）として創立された市立函館病院は現在、病床数660床、26診療科で運営されています。医療圏は道南全域に加え下北半島北部まで及び診療対象人口は約50万人です。3次救命救急センターを併設しており、ドクターヘリで広い医療圏をカバーしております。

消化器外科は北大第一外科5名（H28年度は木村純院長、中西一彰科長、砂原正男、植木伸也、加藤紘一）と弘前大学消化器外科（旧第2外科）5名との混成で、現在は日常業務・手術は弘前大チーム（消化管）と北大チーム（肝胆膵）の2チーム制で行っています。

若手は教育のために6か月交代でチームを移動し消化管から肝胆膵まで万遍なく経験できるように配慮しております。また、前述のように3次救急施設のため救急症例も多く、若手がファーストコールで受けて、上級医とともに診療・手術にあたるシステムです。年間手術件数は750～800件程度でH27年の主な手術は胃癌61例、結腸癌76例、直腸癌51例、肝癌（転移を含む）22例、胆膵癌24例、胆摘116例、虫垂炎44例、ヘルニア89例でした。学会活動も活発で全国会、地方会に多数発表しており、病院の支援も充実しております。今後はさらに大学の垣根を取りはらい、良い意味での“異文化交流”を進めていきたいと思っております。

（文責：中西 一彰）

市立三笠総合病院



平成28年3月末、羽田先生が岩見沢市立に移動され、4月以降は、石黒先生に手術および外来のサポートをお願いしつつ、2人体制で外科業務を続けています。この1年間（平成28年1月より平成28年12月12日まで）の手術は、全身麻酔21例（結腸癌8例、直腸癌2例、胆石症、気胸、十二指腸潰瘍穿孔その他11例）、腰椎麻酔16例で、臨時手術も必要に応じ行っています。手術以外では、術後化学療法、交通事故や作業中の外傷、火傷、蜂窩織炎や褥瘡、皮下腫瘍など外科関連疾患は概ね診ております。病院としては、住民高齢化の背景もあり地域のニーズに応じて、訪問看護ステーション、回復期リハビリテーション病棟が開設されました。病院の業務内容が変化していく中、外科として必要とされ、出来ることを行っていきたいと考えています。

（文責：内藤 昌明）

市立稚内病院



市立稚内病院は、宗谷管内唯一の総合病院で、離島を含めた同地域の医療をすべてカバーしております。診療は、高橋学、菊地弘展、小柳要、田中大樹の4人で行っております。

総病床数362床のうち外科は28床で、年間手術件数は200-250件とそれ程多くはありませんが、臨時手術の割合は40%に達しております。2015年1年間の腹腔鏡手術施行率は、胃75%（6/8）、大腸43%（13/30）、ヘルニア37%（15/40）、虫垂57%（16/28）胆摘70%（21/30）（カッコ内は症例数）でした。

腹部外科以外にも血液透析患者の診療を兼任しており、約100名の患者に対しシャントトラブル等の対応を行っております。

警察の検案囑託医も行っており、年間80件前後の検案業務も施行しております。

常勤の循環器内科医不在のため、循環器疾患が発生した場合には各科で協力して搬送業務を行っております。特に冬はヘリは天候不良で飛ばないことも多く、陸路で搬送することが多くなっております（名寄まで片道2～3時間）。

以上のように多種多様な業務を行っておりますが、他科医師との連携も非常に良好なため、手術に支障を来すことなく業務を行っております。

（文責：菊地 弘展）

JCHO札幌北辰病院



JCHO札幌北辰病院と名称を変更して3年目となり、この名称も浸透してきたようです。当院は地下鉄新さっぽろ駅より徒歩1分の好立地にあり、買い物や飲み会には事欠きません。札幌の外れということもあり、患者さんは石狩・江別・北広島・恵庭・果ては夕張の方からもやってきます。

外科のメンバーを紹介します。写真の左から蔵谷、下國、佐々木院長、中川副院長、藤居です。下國先生が腹腔鏡の、中川先生が肝胆膵のエキスパートであり、レベルの高い手術を経験できる点が非常に恵まれていると感じます。藤居・蔵谷の若手コンビも腹腔鏡手術からPD・肝切除などの高難度手術、Acute care surgery、乳房切除、シャント、LPEC、VATS、甲状腺切除など、バラエティーに富んだ手術をさせてもらっています。若手2人とベテラン2人の構成で、日々楽しく診療に取り組ませてもらっています。

救急科がないため時間外に呼ばれることはほとんどなく、オン/オフははっきりした職場です。本年度は吻合不全など重篤な合併症も発生しておらず、今後も安全で信頼される医療を続けていきたいと思えます。意欲ある医師が集まっており、新しい取り組みや手術件数の増加、学会発表など、新札幌を盛り上げていけたらと思います。

2016年度手術内訳（10月中旬時点）：全身麻酔手術319件、胃癌13例、大腸癌33例、肝癌5例、膵癌4例、胆道癌2例、乳房癌16例、胆石症35例、虫垂切除22例、小腸切除11例、鼠径ヘルニア71例。

（文責：藤居 勇貴）

JCHO登別病院



外科は私一人ですので職員の写真を送ります。

2016/8/28 登別地獄祭り（撮影：小笠原春一登別市長）

JCHO登別病院は平成26年4月に登別厚生年金病院から地域医療機能推進機構（Japan Community Health care Organization: JCHO）登別病院となり、今年度で3年目を迎えることになりました。JCHOは全国で57病院あり、地域住民のニーズに応え地域医療に貢献することを目的としています。

しかし昨年11月に病院の老朽化と経営の問題で当地での存続が困難になり、登別駅近郊に移転が決定されました。新病院の診療機能は平成28年12月中旬頃に決定される予定です。

現在、病床数は104床で、標榜科は内科、外科、整形外科、リハビリテーション科、麻酔科、神経内科、泌尿器科ですが、年々常勤医が減少し診療機能の維持に苦戦しております。当院の外科は今まで札幌医大第一外科が担当しておりましたが、ここ数年業績は低迷し、今年度中に撤退の予定です。

当院は現在急性期と回復期の疾患を担当しておりますが、登別市内唯一の公的機関として診療機能を維持する責任があります。今後は新病院の診療体制、移転、新築など、課題は山積しています。

（文責：伊藤 美夫）

JCHO北海道病院



地域医療機能推進機構（JCHO）北海道病院となって3年目になりますが、今年度は院長交代、心臓内科の規模縮小と入院一時休止および心臓外科の撤退と病院存続にもかかわるような大きな変化が起きました。しかしそのような苦境において逆に院内がまとまり内科系各科（特に消化器、呼吸器）の患者数が増えて外科への紹介患者も前年より増加しております。外科は25床で、2016年度は数井啓蔵統括診療部長・消化器センター長のもと、正村裕紀、敦賀陽介、坂本聡大、矢部沙織の5名で約400例の手術を行っています。手術は例年どおり、ヘルニア、乳腺・甲状腺などの体表外科から上下部消化管、肝胆膵、肺、シャントとバラエティーに富んでいます。若手にはできる限り手術に参加してもらい術者・助手としての経験を積んで外科医と成長してもらおう方針のもと、今年度も4月から11月までの8か月で坂本が70例、矢部が80例執刀しています。内容は矢部がヘルニア、アッペ、胆摘、開腹胃切除・結腸切除を、坂本が胆摘、開腹胃切除・胃全摘・結腸切除、鏡視下大腸切除などを中心に執刀してもらっています。内視鏡手術は本年度も教室から毎週本間重紀先生に応援にきていただき、技術認定習得を目標に指導していただいています。今後も引き続き当科の内視鏡手術の定着、レベルアップのためをお願いしたいとおもいます。肝胆膵領域では敦賀を中心にPD、肝切除などを25～30例行っております。中西先生が異動となり院外よりの肝切除の紹介が減りましたが代わりに消化器内科より胆膵領域の悪性疾患の紹介が増えてきております。当科の特徴として肺切除が毎年30例前後あることです。数井、正村が主体となり手術を行っておりますが来年度より呼吸器外科専門医認定施設の関連施設となる予定で当科での経験も呼吸器外科専門医取得につながるようになります。

（文責：正村 裕紀）

すずかけセントラル病院



静岡県浜松市南区に位置するすずかけセントラル病院外科 今井です。鈴木 友己先生と自分で2013年4月から消化器外科として勤務し、4年目となりました。当院は病床数309床で、うち外科のベット数は20床です。手術件数ですが2013年度は116件（全身麻酔74件、全身麻酔以外42件）、2014年度は157件（全身麻酔106件、全身麻酔以外51件）、2015年度は176件（全身麻酔119件、全身麻酔以外57件）と件数は増加しています。手術体制としては麻酔科医が1人常勤、手術室が3室で、外科は週2日の定期手術、臨時手術は随時行っております。2016年4月からは藤田保健衛生大学に留学している柴崎先生に週1回手伝いに来ていただき、鏡視下手術が組みやすくなりました。そのため2016年度は可能な限り鏡視下手術で行い、件数を増やしております。また浜松市の南区には大病院がないため、周囲の開業医からの紹介も徐々に増えてきており、少しずつですが手術件数が増えてきてます。施設としても日本外科学会、日本消化器外科の関連施設の認定は取得しております。浜松は夏は暑いですが、晴れる日も多く、冬はめったなことでは雪が降りません。最近北海道の降雪の映像をテレビで見ると、すごいところで暮らしていたなと思うようになり、雪のない生活を嬉しく思っています。

（文責：今井 敦）

砂川市立病院



当院は、中空知のセンター病院としての機能を担っている総合病院です。本年度のスタッフは、田口宏一副院長・横田良一・細田充主・本間友樹・松井博紀・河北一誠の6名です。診療科は、消化器外科・乳腺外科・緩和ケア外科と分かれています。乳腺外科は細田先生、緩和ケア外科は田口先生を中心として、スタッフ全員ですべての診療科の治療に当たっています。昨年と同様に市の人口は減少し続けておりますが、周辺地域からの紹介患者も多く、当院への医療の集中化が進んでいます。特に本年度から本格稼働となった乳腺外科はデジタルマンモグラフィも導入され、紹介患者が増えています。

消化器疾患（食道癌、胃癌、肝胆膵悪性疾患、小腸、大腸癌、肛門疾患）、乳癌、ヘルニアなどの手術を行っており、その件数は、2015年が439件、2016年は477件（12月9日時点）と増加傾向にあります。また、大動脈疾患・肺疾患に関しては、当院の胸部外科で症例を経験することもできます。医療の集中化に伴い、救急外来から紹介となる緊急手術や外傷手術も数多く行っております。特に急性胆嚢炎の症例が多いのが特徴です。待機手術は、横田先生を中心として腹腔鏡手術の割合が多くなっています。急性期疾患から緩和医療、腹腔鏡から乳腺疾患まで幅広く行っているのが当院の特徴です。

（文責：本間 友樹）

医療法人静仁会 静仁会静内病院



静仁会静内病院は日高地方の中心に位置する新ひだか町静内にあり創立26年を過ぎました。対象人口は4万人くらいですが、まともに手術のできる施設がありません。当院にも外科の副院長がいましたが、10月で退職して現在外科医不在です。元外科医は私を含めて3人おりますが、もはや現役を退いております。外科医がいた頃は年間手術件数が200件、うち全麻が120件でした。手術の内容と苫小牧市立病院が80kmくらいしか離れていないので、現役バリバリの外科医にはやや物足りないと思います。むしろ、外科の最前線は退いたけれど、まだマイペースで手術はやりたいという外科医にはうってつけの環境です。

静仁会静内病院の特徴は、漢方薬を西洋医学的診断法に則り簡便に処方できる「サイエンス漢方処方」を基本として、主に救急や急性期病棟で漢方薬を使っていることで、漢方研修にきている医師が大半であることも、医局のまとまりの良さに繋がっています。漢方薬は、免疫系、微小循環、水分バランス（浮腫・乾燥）、熱産生系のシステム異常を正常化させるresponseを患者から引き出す薬剤です。「サイエンス漢方処方」を会得することは、診療科に関係なく治療の精度が増します。この点に関心のある先生、お待ちしております。

（文責：院長 井齋 偉矢）

医療法人社団 静和会静和記念病院 外科



川上理事長



壇上先生



草野先生

今年度、当院では月曜と金曜に小児外科の本多、宮城先生、水曜に嶋村先生に診療と手術支援を、当直を1外科の若手の先生にお願いしている。

当院の1外科出身者は川上理事長、そして壇上先生と私だ。川上理事長は週2回昆布温泉病院の地域医療を長年にわたり継続している。壇上先生は北大からの出張医の支援のもと手術を中心に診療を行っている。最近の私は、外科医のかたわら、総合医として求められることも多く、さらに院長業、地域の医師会活動など忙しく動き回っている。

当院外科は消化器内科の小野先生および非常勤医（北大）と協働し、消化器病センター的役割を果たしている。昨年のNHKスペシャルでも取材された北大遺伝子診断部の西原教授と林先生らの支援で、当院でがん組織生検、また抗がん剤治療を行っている。昨年、テレビドラマドクターXにも取り上げられていたICG蛍光法の臨床応用も順調で、札幌医師会から研究助成金もいただいた。

手術件数こそ少ないが、内視鏡、超音波、ERCP、PEG造設など、消化器外科医としてsub-special的な診療技術を習得できる体制が整っており、特に将来、地域医療、開業を視野に入れている外科医が研鑽を積むにはふさわしい環境といえる。仕事時間も余裕があるので、国外留学の準備期間として勤務することも歓迎している。今年度は英文論文2編、英文図書1冊をpublishした。Compact High Quality Hospitalとしてさらに地域医療に貢献したい。先般ご報告した通り、新病院構想も順調に進展しつつあり、新年度には教室からの応援スタッフを派遣いただけることを期待している。

(文責：院長 草野 満夫)

町立中標津病院



町立中標津病院は199床の病床を有する地域中核病院・災害拠点病院です。長瀬英介先生を中心に、宇根良衛先生、中川智徳先生、宮岡陽一先生、小生の5名で日々の外科診療をこなしております。年間手術件数は約140件で、中川先生の指導の下ほとんどの手術は宮岡先生と小生の若手で執刀させてもらっています。今年度は宮岡先生が積極的に腹腔鏡手術を推進してくれたおかげで、腹腔鏡下鼠径ヘルニア根治術が11件（4月からの全鼠径ヘルニア手術件数26件）、腹腔鏡下虫垂切除術が14件（4月からの全虫垂切除術件数16件）と急増しました。小生も恥ずかしながら医師10年目にして初の腹腔鏡下鼠径ヘルニア根治術を当院で経験させてもらいました。さらに、大学の消化管グループの先生方の協力のおかげで、大腸癌や胃癌も半分以上が腹腔鏡手術で行うことができいております。

また、今年度から透析を外科で担当することとなり、血液透析の導入から維持、腹膜透析の管理も行っております。小生は透析管理の経験がほとんどなく日々四苦八苦しておりますが、長瀬先生や中川先生はもとより透析スタッフも非常に優しく優秀なため楽しく学ばせて頂いております。

最後になりましたが、手術の協力だけでなく週末応援にもご協力頂き、大学の諸先生方には大変感謝しております。この場を借りてお礼申し上げます。今後ともご支援のほどよろしくお願いいたします。

(文責：相山 健)

天使病院



スタッフ：山本浩史、中山雅人、大場豪、海老沼翔太の4名です。昨年まで3名体制でしたが、4月より後期研修医として海老沼が加わり4名となりました。

来年度は当院で初期臨床研修をした佐藤彩が外科医として加わる予定です。
病床数：260床（外科38床）
年間手術件数：2015年は外科と小児外科をあわせて全身麻酔件数500件を超えました。今年はずでにこの件数を超えており、開設以来の最高記録件数を更新中です。

病院の特色および注力分野：周産期母子医療センターが病院の核を担っており、産科・小児科・NICU科が充実しています。小児外科はこれらの科と協力し、全道から幅広く母体搬送や新生児のヘリ搬送なども受け入れています。

初期臨床研修にも注力しており、今年度6名、来年度も6名とフルマッチで初期研修医を迎え入れる予定です。今後大学病院で始まる診療参加型実習にも積極的に協力していく方針です。

（文責：大場 豪）

洞爺協会病院



当院は、社会福祉法人北海道社会事業協会が設置する7病院（函館、小樽、余市、岩内、帯広、富良野、洞爺）の一つとして、昭和5年に創立された歴史と伝統のある病院で公的病院に指定され、地域医療に貢献しており周辺住民の方々大変親しまれております。

当地は洞爺湖、有珠山、昭和新山等す道内屈指の観光地であり、国内はもとより海外からの観光客も多く、救急告示病院として24時間診療している救急外来にも多数受診し、国際色豊かな病院となっています。

診療科は、内科、外科、整形外科、リハビリ科、泌尿器科、小児科、麻酔科、歯科口腔外科で、北海道大学、札幌医科大学の関連施設（北海道地域大学循環型専門研修プログラム関連教育病院）となっています。

外科スタッフは2名で、科を問わず何でも診るようにしています。外科全麻件数は年間60から70例で腸切始め鏡視下手術を積極的に取り入れています。血液透析も外科で管理しており、シャント手術、PTAとも当院で完結しております。年々患者数が増加している周辺地域の期待に答えるべく、透析ベッドを拡充し現在25床で約90人前後の透析患者さんの治療をしています。

外科に限らず幅広く知識と技術を身につけたい伸び盛りのあなたには最適な病院だと思います。
（文責：院長 青木 茂）

苫小牧市立病院



当院は苫小牧市を中心とする東胆振～日高地方の1市11町、人口約30万人を医療圏とする広域中核病院です。2006年10月に新築移転し、今年で丸10年を経過しました。総病床数は385床（外科20床）で、診療科は17科です。新築移転の際にはPET-CT、デジタルMMG、放射線治療装置（リニアック）なども導入され、放射線科専門医も常勤しているので高い画像診断能力とIVRも可能です。2016年度の診療スタッフは松岡院長、佐治副院長以下、広瀬、花本、蔵谷、小林（展大）の計6名です。初期研修医は病院全体で計14名、その中、1～2名が交代で当科ヘローテーションしています。2012～2013年度は麻酔科常勤医が不在という危機的な時代もありましたが、現在は3名の麻酔科常勤医が勤務しています。2012年～2014年の手術件数は年間約400件と低迷していましたが、2015年は475件と回復の兆しがありました。主な内訳は胃癌24例（腹腔鏡下7例）、大腸癌63例（腹腔鏡下47例）、乳癌36例、肺癌15例（胸腔鏡下15例）、肝切除術12例（肝癌8例、肝門部胆管癌3例、胆嚢癌1例）、PD 9例、胆嚢摘出術86例（腹腔鏡下65例）、虫垂切除術34例（腹腔鏡下30例）、鼠径ヘルニア61例（腹腔鏡下30例）などでした。

（文責：広瀬 邦弘）

医療法人社団養生館苫小牧日翔病院 外科



当院は、札幌市の南東約65km、苫小牧駅のやや西側に位置しています。病床数は168、透析センター 97床あり、11の診療科を有する病院です。胆振地方において、血液透析治療を積極的に行っています。

外科のスタッフは3名（熊谷、櫛田、崎浜）です。主に透析部門は熊谷、櫛田両先生が担当され、崎浜は外科を担当させていただいております。昨年度は麻酔科医が退職されたため、水曜日以外 櫛田先生に麻酔をかけていただいております。また大学から移植G（後藤、腰塚、渡辺、川村典生）、肝胆膵（若山）やリサーチの先生方が、手術の手伝い、当直などで応援に来ていただいております。また消化管G（川村秀樹、吉田雅、市川）の先生方に鏡視下手術の応援にきていただいております。

2016年の手術件数は305件（内全麻173）であり、症例数が前年に比べ増えてきています。シャント手術やPTAは局所麻酔で行っております。主な手術の内訳は原発胃癌3（鏡視下1）、大腸癌32（鏡視下17）、胆石胆嚢炎24（鏡視下23）、虫垂炎14（鏡視下10）、鼠径ヘルニア37（鏡視下30）、肝癌2、胆嚢癌1、Vater乳頭癌1でした。鏡視下手術の割合が徐々に増えています。

今後も近隣の医療機関と連携しながら、胆振～日高地方を支える病院としてその役割を担っていききたいと思います。（文責：崎浜 秀康）

日鋼記念病院



室蘭の人口は約8万8千人まで減少しており、その中で当院、製鉄記念室蘭病院、市立総合病院の3院がしのぎを削っております。当院の特色は西胆振医療圏唯一の「地域がん診療連携拠点病院」であり各科が悪性腫瘍の診療に特に力を入れているということと、「地域周産期母子医療センター」として周産期の医療に携わっているということと、「災害拠点病院」として災害時に対応する訓練を持続的に行なっていること等が挙げられます。また、当院を含め、透析センターである東室蘭サテライトクリニック、登別記念病院では300人以上の透析患者の診療を行なっており、それらの患者のブラッドアクセスを維持することも、当科の重要な仕事となっております。

当院外科は今年から一人増員となり、勝木良雄元理事長（S48卒）、柳谷晶仁理事長兼院長、益子博幸副院長（S61卒）、高田譲二透析センター所長（H63）、喜納政哉（H10卒）、旭火華（H17卒）、奥村一慶（H23卒）、吉田祐一（H24卒）が勤務しております。また天使病院の山本浩史先生（S61卒）が月に1回の出張で小児外科外来・手術を担当してくださっております。今後も外科一丸となって病院の理念である「医療人として組織として社会に貢献する」を体現していきたいと考えております。

（文責：旭 火華）

医療法人はまなす



篠路はまなすクリニック



はまなす医院

- ・篠路はまなすクリニック（札幌市北区）：院長 工藤岳秋（74期）、栗林弘（45期）
- ・はまなす医院（石狩市花畔）：院長 工藤立史（80期、北大第2内科同門）、会長 工藤謙三（46期）

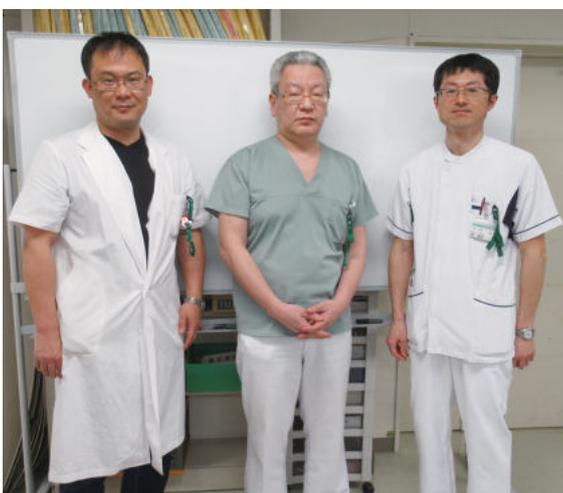
有床診療所の篠路はまなすクリニックでは入院・手術・外来を行っています。消化器関連全麻手術件数（胃、大腸、胆嚢、虫垂、鼠径ヘルニア等）は平成27年：26件、平成28年：29件（11月末日現在）でした。入院・手術可能な病院が少ない地域でありこれからもニーズに応えていきたいと思えます。血液透析患者は150名を超え、アクセス関連手術はPTAも含め平成27年：225件、平成28年：236件（11月末日現在）でした。

はまなす医院は50名超の血液透析患者の加療とともに外科・内科外来を行っています。平成28年春から同門の佐藤裕二先生（55期）にも水曜日に診療して頂いています。平成29年半ばの完成を見込んだ増改築が進行中で、血液透析ベッドを現在の27台から増床し、運動器リハビリにも取り組む計画です。

両院とも第一外科医局から手厚い診療応援を頂戴しており、改めて感謝申し上げます。今後とも教室、同門の皆様の御支援を賜れば幸いです。

（文責：工藤 岳秋）

北農会恵み野病院



恵み野病院は病床数199床の急性期病院で、恵庭・千歳・北広島を中心とした地域の急性期医療の中核をになっております。外科スタッフは中村貴久副院長、林俊治、森田恒彦の3名で、今年度は昨年より1名減となりましたが、医局より毎週火曜日・水曜日に診療応援の先生方を派遣していただき、昨年と同様に円滑に日常診療を進めることができました。全麻手術件数は年間約350件程度を維持し、またその約1/4は臨時手術で、急性虫垂炎、消化管穿孔、絞扼性イレウスなど、高齢の患者が多いですが、術後合併症を減らすべく常に安全にかつ根治的標準手術を心がけて診療にあたっております。また、学会活動も症例報告が中心ではありますが、全国学会に積極的に参加し、最新の知識の習得と診療水準の維持に努めております。

（文責：林 俊治）

北海道医療センター



北海道医療センターは、旧国立西札幌病院と旧国立札幌南病院が統合して平成22年に設立された病院で、27診療科、全病床数500床（一般410、精神40、結核50）で構成されています。このうち外科は35床で、外科5名、呼吸器外科2名で診療を行っています。

2015年度の年間手術件数は511件（臨時手術22.9%）で、主な疾患の内訳は大腸80件（腹腔鏡76.3%）、胃30件（腹腔鏡50%）、胆膵13件、肝8件、その他ヘルニア、胆石、虫垂炎等でした。外科の修練として当院を考えた場合、内視鏡外科領域では技術認定医（胃）である植村医師が常勤であり、現在は川村秀樹医師が毎週指導に来ていただける体制になっているので、個人的には最高の環境であると考えております。

当院の特徴としては、3次救急併設のため、外傷、全身状態の悪い消化器疾患（なぜかNOMIが多いです）の診療や、結核、精神・神経内科的疾患を併存している患者さんへの診療の機会が多いことが挙げられます。これら特殊な疾患であっても各科の協力のもと円滑に診療を行っております。

研修医は1年目、2年目の初期研修医が毎年各々10名程度在籍しており、定期的に外科に配属になっております。外科研修の際は積極的に手術に参加していただき、執刀を行ってもらう場合もあります。また、毎週行っている抄読会や研究会等でも積極的に発表してもらっております。アフターファイブは琴似で外科チームとして親睦を深めております。

（文責：三野 和宏）

北海道がんセンター呼吸器外科



当院は明治29年12月に第7師団の病院として開設されてから120年が経ちました。昭和20年12月に名称が国立札幌病院となり昭和43年に北海道地方がんセンターを併設、平成16年に独立行政法人化され北海道がんセンターとなりました。また平成21年2月に都道府県がん診療拠点病院に指定され、北海道のがん対策推進計画に精力的に取り組んでいます。

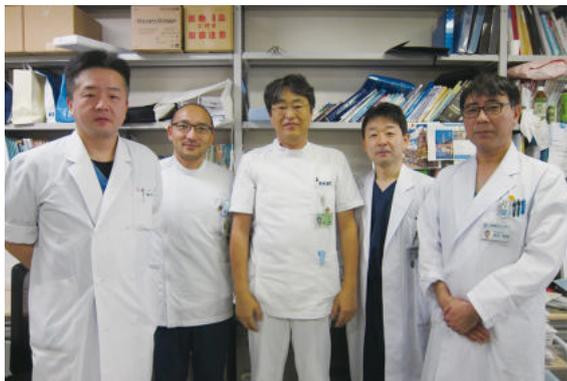
さて呼吸器外科は平成10年4月に単科として活動を始めてから、原発性肺癌、転移性肺腫瘍、縦隔腫瘍などを対象に、現在病床数25床で年間250件超の全身麻酔手術を行っています。とくに胸腔鏡手術では、その黎明期から手術術式や手技、手術器具の開発などを積極的に行い、現在手術患者の8割以上が胸腔鏡手術をうけるまでになっています。

昨年1年間の出来事では、呼吸器外科専門医の安達、有倉につづき、当科で経験を積んだ1名が専門医試験に合格しました。現在専門医3名の体制となり、診療の充実をはかっています。また、臨床研究も積極的に行っており、国立病院機構の多施設共同研究への参加や、小規模な院内研究ながらも統計家の助言をうけつつブドウ糖による胸膜癒着に関する臨床試験を行うなど精力的に活動を行っています。

呼吸器外科分野にご興味のある方はぜひご相談ください。

（文責：安達 大史）

北海道がんセンター消化器外科



濱田朋倫、篠原敏樹、二川憲昭、前田好章、片山知也

私共の施設は、2000年代初頭に国立札幌病院から北海道がんセンターへ改称し、現在へ至っています。乳腺外科と呼吸器外科が独立していますので、純粋に消化器外科の悪性腫瘍手術中心の診療を行っています。ほとんどが消化器のmajor手術です。近隣施設には、急性腹症・虫垂炎・胆石、等もいつでもwelcomeですよ、と事あるごとにアピールしているのですが、がん以外の疾患の割合はかなり低くなっています。

本業の癌手術は年間、胃50-70件、大腸癌80-100件、肝切除（原発＋転移）20-30件、胆膵10-20件、食道癌数件程度で微増の状況です。当科の特徴として、他科（婦人科、泌尿器科、等）との共同拡大手術、癌性イレウス等に対する症状緩和手術がそれぞれ年間20-30件程度あるのが特徴です。近隣に大病院が多い激戦区のなかでも少しずつ手術件数を増やしています。

手術は少ない出血量で、郭清のきちんとした質の高い手術を実践するよう努めています。腹腔鏡手術は結腸癌はbulkyなもの以外はほぼ全例を適応にしています。胃癌についても原則早期胃癌から、進行癌へ適応を広げつつあります。

2015年11月からダビンチシステムを使用した胃癌に対するロボット支援手術を開始し、現在まで5例に合併症なく施行しました。日常診療になるにはまだ多くのステップがあると思いますが、これからも慎重にこの新しい手術に取り組んでいきたいと思っています。

研究・学術活動も積極的に行っており、2016年までの5年間に5編の英文論文が当科からacceptされました。以下のような項目については継続的に全国学会に発信しており、シンポジウム等上級演題・国際学会での発表も多くなっています。

- ・大腸癌集学的治療（Conversion肝転移切除、肝肺転移切除、Repeat肝転移切除、等）
- ・胃癌NAC後の外科治療
- ・3D-CT画像ナビゲーションによる腹腔鏡下大腸癌手術
- ・癌性イレウス等に対する症状緩和手術

これらの学術活動を行うにはData baseの充実が不可欠であり、Data baseの整備に時間をかけています。国立札幌病院のころのパンチカードの時代からの受け継がれている自分達のデータで発表するというスタイルを大切にしています。この伝統を大切にしつつ今後とも、臨床・研究活動に精力的に取り組みたいと考えております。

（文責：前田 好章）

北海道がんセンター乳腺外科



前列左から山本、佐藤、高橋、渡邊、富岡

北海道がんセンター乳腺外科は関連病院ではほぼ唯一の乳癌診療に特化した診療科です。診断、初期治療から転移再発乳癌の治療、緩和医療に至る診療にあたっています。

スタッフは、高橋将人（統括診療部長・平成元年卒）、渡邊健一（医長・平成元年卒）、富岡伸元（医長・平成3年卒）、佐藤雅子（平成7年卒）、山本真（平成11年卒）の常勤医5名と北大乳腺外科後期研修医（4ヶ月交替）の計6名で、高橋、渡邊、富岡、山本の4名が第一外科同門です。

2015年は、新規乳癌手術325例、入院患者32.3人、平均外来数85.6名、年間の乳癌化学療法施行4000件超で9割以上を外来で実施しました。

当科は、初期治療はもちろん、進行例、転移再発乳癌を含めすべての症例をお断りすることなく診療する方針です。治験・臨床試験への参加を重視しており、症例登録数は全国有数です。新規薬剤・治療の開発、エビデンスの創出に貢献したいと考えています。

形成外科との連携による乳房再建（同時・2期的）、内視鏡下乳腺手術、ラジオ波熱焼灼療法（臨床研究・先進医療）なども実施しています。遺伝子・先端医療外来を開設し、主に遺伝性乳がん卵巣がん症候群（HBOC）に関するカウンセリング・遺伝子検査に対応しています。またHBOCに対するリスク低減乳房切除を実施出来る体制とし開始しています。お困りの症例などございましたらいつでもご連絡ください。

（文責：渡邊 健一）

北海道対がん協会



北海道対がん協会札幌検診センター外科（乳がん検診部門）の固定医師は1名、病床も手術もありませんので、簡単に乳がん検診の現況を報告させていただきます。

札幌検診センターでの検診数は年間約3万例、道内各地で行われるバス検診は約2万5千例です。センターは午前2診、午後1診で行っており、北大第一外科、乳腺外科、関連病院の先生方にご協力をいただいています。それに加え、バス検診においては札幌医大、旭川医大等の先生方にもお手伝いをいただいています。

2016年度から厚生労働省の指針がわかり、視触診がなくなる方向です。2016年度はバス検診で視触診がほぼなくなりました。来年度は札幌市などの大きな市でもなくなる方向です。大学や関連病院の先生方にはご負担をかけなくてよさそうですが、今後とも読影や精査でお助けいただけたらと存じます。

（文責：池田由加利）

森町国民健康保険病院



スタッフ数：3名（同年齢の嘱託医師2名と総合医1名）

病床数：60床のうち外科は24床

年間手術件数：全身麻酔・腰椎麻酔0件

局所麻酔150件

病院の特色：

平成28年11月1日の森町の人口は、16,284人です。そのうち65歳以上の方は5,652人で、高齢化率は34.71%です。森町国保病院を訪れる受診者も高齢の方が中心です。

内科医3名、総合医1名、外科医2名の計6名が固定医です。その他、週2回の整形外科医、週1回の泌尿器科医がいます。以上の陣容で、入院・外来・救急を支えています。

救急車は年間1000台で、1日平均3台です。医療機器としては、MRI（永久磁石・0.4テスラー）・CT（16列・ヘリカルCT）・一般撮影・マンモグラフィ・US・骨密度計が稼働しています。病床稼働率は76%前後で経過しています。

特に力を入れている分野：

血管疾患に興味をもっています。

胸部：解離性大動脈瘤

腹部：腹部大動脈瘤、総腸骨動脈狭窄症など

診断のついた方は、函館市内の心臓血管外科の先生に紹介しています。

（文責：川崎 和雄＝嘱託）

初代編集長の柴崎先生、二代目の吉田先生と、優秀な先生方から編集委員を引き継ぎ、非常に重圧がありましたが、2016年の教室年報を無事発刊できまして安堵しております。

昨年4月に海外での学会発表の際に、他大学のある教授より「君のところの教室年報、良かったよ！」と声をかけて頂き、非常に驚き、またうれしかったのを今でもよく思い出します。教室年報が、我々といろいろな方々をつないでくれることを実感致しました。

編集に際しましては、各関連病院の先生方がとても協力的に原稿や写真を送ってくださり、時には声までかけて頂き、励みになりました。また医局秘書の方々も遅くまで残って協力して下さいまして、今日を迎えることができた次第です。

今回は、北海道がんセンター院長の近藤先生より似顔絵スケッチ、また高橋准教授、蒲池先生、川村先生、横尾先生より世話人会のコーナーを頂戴し、教室年報に彩りを与えて下さいました。より温かいものになったのではないかと考えております。

今回の編集に際して多大な御尽力を頂きました、編集委員の市川伸樹先生、秘書の松澤美都さん（旧姓：小原さん）、正木聖子さんにはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。またこのような重要な任務を任せて頂き、貴重な経験をさせて頂きました武富教授、本間医局長に深く御礼申し上げます。

次年度以降も、より充実した読みごたえのある教室年報を発刊できますよう、引き続き皆様の御指導御鞭撻を頂けますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

（文責：宮城 久之）



消化器外科学分野 I 教室年報2016

平成29年3月発行

発行 北海道大学大学院医学研究科消化器外科学分野 I
TEL: 011-706-5927
FAX: 011-717-7515
ホームページ: <http://surg1-hokudai.jp/>

印刷 北大生協 印刷・情報サービス部